

---

# 碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

デビル涼月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧の軌跡〜つながる姉妹の絆〜

### 【Nコード】

N6530X

### 【作者名】

デビル涼月

### 【あらすじ】

「私の姉は輝いてる・・・だからかな、私みたいな汚れた存在があの人の傍にいちやいけないんだ。」

これは、イリアの義理の妹が主人公のオリ主もの小説です。

駄文ですがその辺は気にせず読んでいただけるとうれしいです。

オリ主や原作崩壊が嫌という人は回れ右です（笑）

今作者は1章での話が長すぎるのではないかという問題に直面しています。

短くするべきかこのままで行くべきか……………どうしよう・w・

## プロローグ（前書き）

オリ主のクラフト技は何にしよう・w・

## プロローグ

??? side

「はあ……………」

夜空を見上げ溜息を吐く1人の女性がいた。

アルカンシエルのメインヒロイン、イリア・プラティエである。

「あれからもう8年…あの子は元気にしてるのかしら。」

イリアは懐から1枚の写真を取り出して当時を思い出すように見る。

「昔はよくセシルと一緒に3人で遊んだっけ。」

そういえば一緒にお風呂に入ったこともあったわね、あの子ったら顔すごく赤くして…ふふふ、本当にあの頃は楽しかったわ。」

昔を懐かしむその顔は、普段リーシャをからかって楽しむ顔とは別の愛おしい誰かを思う優しさに満ちた顔をしていた。しかし、その顔はすぐに後悔の色に変わる。

「もうあの頃にはもどれないのかしら…」

あの時、自分がもつとあの子を見ていればこんなことにはならなかったのだと過去を後悔するように呟く。

「いつか…またいつか会えるわよねきっと……リリース……」

その小さな囁きは誰の耳にも届かずただ夜の闇に溶けていく。

??? side end

リリース side

ワタシヲ ミツケテ

眩しい…もう朝ですか。

なにか夢の中で女の子の声が聞こえた気がしますね、気のせいでしょうか。

「うっん」

なぜ朝はこうやって伸びをすると気持ちいいのでしょうか…  
たまらなくどうでもいいですね。

考えてみれば私が姉さんの傍を離れて8年…長いようで短いように感じてしまいますね。姉さんは元気にしているのでしょうか…いえ。

「私に姉さんの心配をする資格はありませんね、私があの人元から勝手に消えてしまったのですから…。」

そつだ、私にあの人の心配をする資格はない。あの誰をも魅了し笑顔にする太陽のような姉の傍に私みたいな汚れた存在がいていいはずがない。

「さてと、そろそろ起きましょう。電車に間に合わなくなってしまうそうですから。」

では行きましょうか、

……………光と闇の混在する都市、クロスベルへ。

リリース  
side  
end

## プロローグ（後書き）

小説ってむずかしいですね、文の書き方が雑です・・・  
もっとうまくかけるようになりたいですね><;



## オリ主設定（前書き）

設定変えました。

使徒より執行者のほうがいいかなという意見もらったので考えた結果こうしました。

直属の執行者とかありましたっけ？？

## オリ主設定

名前：リリス・プラティエ

性別：女

武器：日本刀のような細身の刀、切れ味はけっこう鋭い。

容姿：ぶつちやけ黒髪の星光の殲滅者です。けっこう好きなキャラなので^^；

基本的に穏やかで物静か、とてもやさしい性格をしておりあまり争いを好まない。

過去にレンやティオ同様に教団に攫われた過去がある。

隙を見て逃げ出し衰弱して倒れていたところをイリアに拾われる。

戦闘力はかなりの腕前で各地を回っていたときに《身喰らう蛇》の第七柱アリアンロードに出会い、執行者に誘われたほど、本気を出したときはレーヴェをも上回る。

執行者候補としての二つ名は“迅雷”

リリス自体の名前はまったくと言っていいほど知られてはいないが、剣帝を超えるほどの力を持った執行者候補としての迅雷の名は有名である。

2月ほどアリアンロードとアリアンロードを補佐する3人の戦乙女

達と共に行動し、その時にアリアンロードに稽古をつけてもらったこともある。

本人曰く、なんであんなやさしそうな顔をしてるのに稽古の時は鬼のような形相をするのかとのこと。

戦乙女達の中では特にエンネアに可愛がられていた。

作者「まあこんな感じかな。」

リリス「ふむふむ、ネタばれがある気もしますが気にしないでおきましょう。」

作者「うん…気にしないでくれるとうれしいな……」

リリス「わかってますよ、ところで…クラフトとかは決まってるの？」

作者「うーん、大体決まってるんだけどまだ検討中かな。個人的に雪とか桜とかの文字を入れた技にしたいんだよね。」

リリス「ほほう、それはなぜです??」

作者「なんかかつこよさそうだし、簡単に決まりそうだからだね!」

リリス「……………」

作者「えっと…怒ってる？」

リリス「別にその考えが嫌いなわけではありませんが、一ついい技を思いつきました。  
ちよつと試し打ちさせてもらってもいいですか？？」

作者「ほ…ほんと？いいよ見せて見せて……うん？試し打ち？試し切りじゃなくて？」

リリス「はい、ではいきますね……」

作者「なんか嫌な予感が……ていうかおもいつきりあれしか思い浮かばないんだけど……。」

リリス「ルシフェリオン・ブレイカアアアー！！」

作者「やっぱりかあ……！それはいろんな意味で駄目だよ……！  
……まあもしその時はそれでいいかあ……。」



## 1話「出会い」

リリス side

「ということやってきましたクロスベルです。」

え？1人でなに言ってるのかって？なぜか言わないといけない気がしたからですよ。

グウ

「うっ／＼／＼そういえば昨日の夜から何も食べていませんでした。」

うっん、情報収集もしたいですが…お腹が減りすぎて倒れる…なんて恥ずかしい事態は避けたいですし…よし！ごはんを食べに行きましょう。

「たしかレストランは中央通りと東通りでしたね…今日は東通りのレストランでチャーハンでも食べましょう。」

私はこう見えてもチャーハンが大好きなんです。なんであの食べ物はあるのにおいしいのでしょうか。ほんとどうして……おっと、思

わず止まらなくなりそうでした。

つと、考え事をしてて気づきませんでした。がもう中央通りですね。  
たしかオーバルストアの右側を通って…

「リュウ〜遅れてごめり、わわ」

「キーア!!」

うん？声がする方を見てみたら女の子が転びそうになってますね、  
目の前で怪我されるのは嫌ですし…助けるとしましょうか。

私は瞬動を使い女の子を抱き抱えます。

「大丈夫ですか？」

「ふえ？」

やはり驚いていますね、知らない人がいきなり現れたのですから。

「えっと、お姉ちゃん誰？？」

「名乗るほどのものではありませんよ、それより怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫！！お姉ちゃんが守ってくれたから！！」

「そうですか、それはよかったです。」

笑顔で私に答えてくれる女の子、なぜでしょう…この子の笑顔を見ていると心があたたかくなりますね。

「キーア無事か！？」

「キーアちゃん大丈夫！？」

そこに私と同じくらいの年の男女が4人来ました。

「大丈夫だよ！このお姉ちゃんが助けてくれたから。」

「そうだったのか、ありがとうございます。」

男の人がお礼を言います。なんか年上の女性に好かれそうなオーラが見えますね…

「ありがとうございました。キーアちゃんを助けてくれて。」



灰色の髪をした女の人もお礼を言いました。どこかのお嬢様でしょうか…

「いえ気にしないでください。当然のことをしたまでですので。」

「それでもです。この子を助けていただいて本当にありがとうございました。」

うーん、そこまでお礼を言われるとは思っていませんでしたね。この二人は本当にこの子を大切にしているんですね。あ！もしかしてこの子は…聞いてみましょう。

「この子はお二人のお子さんですか？」

「「えっ!?!」」

「いえ、とてもこの子を大切にされているようです。」

「ち、違います！この子はちょっとある事情で保護した女の子なんです！」

「そうです！私たちは《まだ》そんな関係じゃありません！！」

二人とも動揺しすぎですね。女の人もまだって…まあ男の人は鈍感  
そうでしたまだそんな関係ではないようですね。女の人フアイトで  
す…。

「おっと、そろそろ行かないと授業に遅れるぞキア。」

「え？うわ！ほんとだ。じゃあ行つてきまゝす！！」

「「いつてらっしやい！！」」

微笑ましい光景ですね、そういえば昔私も姉さんにこんなふうにな  
やめましょう。

そろそろ行きましょう…お腹が限界です。

「それでは私はこの辺で失礼しますね。」

「あ、今日はキアを助けていただいて本当にありがとうございます。  
ました。」

「ふふ、本当に気にしないでください。あなた達とはそう遠くない  
うちにまた会えそうな気がします。」

私はそう言ってその場をあとにした。

リリス    s i d e    e n d

ロイド    s i d e

キーアが転びそうになり思わず大声を出してしまった。

キーアが怪我すると思ったけどそんなことはなかった。

気づいたら短い黒髪で整った顔立ちの女の子がキーアを抱えていたからだ。

女の子はすぐ行ってしまったけどまた会えそうだと言ってきた。

本当にそんな気がするのは俺の気のせいかな…

「不思議な子だったわね、すごく綺麗だったし。」

エリイが言う、やっぱり女性から見ても綺麗なんだな。

「たしかにな、俺と同じくらいの年なのかな。」

「ふ、リーダーはあの子が気になるのかい？」

「たしかに綺麗な子でしたね。女の私でも思わず見とれちゃいました。」

ワジとノエルが言う、

「でも…あの子の動き唯者じゃないね…まったく見えなかったよ。」

そこは俺もワジと同意見だ。本当に不思議な子だったな

「おっと、支援要請を忘れるところだった。早くレクターさんを探さないと。」

「そうだったわね、早く見つけてしましましょう。」

「あの人どこ行ったんでしょか、いくらなんでも逃げ足速すぎます。」

「まあ、ただの秘書ってわけじゃないようだね。」

とりあえず歓楽街のカジノに行ってみるか。目撃証言もあるし。

ロイド     s i d e     e n d

リリース     s i d e

ふう、初対面の人とあんなに話したのは久しぶりですね。

時間を使っただけと思っていましたが、まさかほしかった情報の一つがこんな所に入るとは思ってもみませんでした。

「……………キア、ですか……………あれが……………」

……………零の至宝……………。」

リリース side end

## 1話「出会い」（後書き）

疲れた、たぶんこれが一番長いかも・・・><  
相変わらず駄文だな、ほんとにうまくないよ・w・

## 2話「驚愕！！神仙麻婆 麒麟」

リリス side

さて、零の至宝の少女に出会い幸先のいい旅になりました。

私自身あまり《碧き零の計画》に興味はありませんが…なんでしょう。

あのような小さな少女を贄にする計画というのは正直気に入らな

小さな子どもを生贄にする…非道さを除けばあいつらとやってることとは何一つ変わらないじゃないですか。あまり干渉はしないつもりでしたが…なんとか守ってあげたいと思ってしまいますね……。

でもそうした場合……アリアさんとも戦うことになるのでしょうか…。

私にできるのかな、一時とはいえ温もりを与えてくれたあの人達に剣を向けることが……やめましよう。考え出したら止まらなくなるのは私の悪い癖ですね。アリアさんやエンネアさんにも注意されていましたし…

グウ

……シリアスぶち壊しですよ私……

「はあゝ、ご飯食べてスッキリしましょう。」

グウ

うん？このお腹の音は私ではありませんね。  
ということは……いつの間にか私の横にいたシスター服の女性でしょうか。

「あなたもこれからお昼ですか？」

「はい。朝にマフィンを5個ほど食べたのですが足りなかったようです。」

えっと、5個って食べすぎではないのでしょうか……。  
私でも2個くらいが限界なのですが……。

「同じ時間にお腹が減り昼食を求めて出会った。これも空の女神のお導きでしょう。」  
よければ一緒にしませんか？」

え？それって女神のお導きなのですか？？



よくわかりませんが断る理由はありませんね、一緒にさせてもらいましょう。

「はい、喜んで一緒にさせていただきます。」

「ふふ、ではいきましょう。」

そして私たちは店内に入って行きました。

カラカラ〜ン

おお、やっぱり前来た時より綺麗になっていますね。  
メニューのほうもけっこう増えていきますごく楽しみです。

「あそこの席に座りましょうか。」

「はい。」

こうして私たちは向かい合うようにして席に座ります。

「さてと、チャーハンをたのm、うん!？」

チャーハンを頼もうとしたとき私の目に飛び込んできた名前がありました。それは…神仙麻婆 麒麟…

なんかすごそうな名前です、値段も高いですね。

私が頼もうか悩んでるときに彼女が声をかけてきました。

「えつとあなたは………そういえば自己紹介をしていませんでしたね。」

シスター服の女性が気づいたように私に言います。

そう言われてみればそうですね、トントン拍子で進んだのですっかり忘れていました。

「私はリース・アルジエントといいます、この度クロスベル大聖堂に赴任してきました。よろしく願いますね。」

彼女はリースさんと言うのですか……あちらが自己紹介したというのなら私も名乗らなければいけませんね。ですがプラティエの名は伏せさせていただきましようか……私がその名前を名乗る資格はありませんから……

「私はリリースと言います、わけあって名前しか名乗れない無礼をお許してください。」

そういつて私が頭をさげるとリースさんが言います。

「お気になさらないください。なにか事情がありなのでしょう。詮索するという野暮なことはしないのでご安心ください。」

「ありがとうございます。そう言っていたけるとすごくうれしいです。」

私は満面の笑みで彼女にお礼を言いました。

「／／／」

うん？なぜか顔が赤いですね、熱でもあるのでしょうか。

「どうしたんですか？なにか顔が赤いようですが。」

「な、なんでもありません／／／。」

「そうですか…。」

風邪ではないのでしょうか、私がお礼を言ったあたりから顔が赤い

ですし……ほんとにどうしたのでしょうか。

リリースは自分の容姿がかなりいいということに気づいていません。その笑顔で微笑みかけられたら男女問わず見とれてしまいます。

「と、ところでリリースさんは何を注文なさるのですか？」

なぜか誤魔化された気がしないでもないですが……まあいいでしょう。

「そうですね、最初はチャーハンを頼もうと思っていたのですが……  
気になった物があり悩んでいるんですよ。」

「気になったもの？」

「はい、これです。」

私はリリースさんにその名前を見せます。

「神仙麻婆 麒麟 ですか……聞いたことがありませんね。何やらすごそうですが。」

「それは私も思いました、だから気になっているんですけど……。」

「では二人でそれを頼んでみませんか？私も気になってしまいました。」

「そうですね、リースさんがよろしいのであれば私は構いません。」

「では頼みましょうか。そのウェイトレスさんよろしいですか？」

「はいはい！、ご注文はお決まりでしょうか！」

なかなか元気のいいウェイトレスさんですね。

私と同じくらいの年でしょうか、すこし上……のような感じがします。

「この神仙麻婆 麒麟 を2つお願いします。」

「かしこまりました！少々お待ちください！」

「元気な方でしたね。」

やはりリースさんも同じことを考えていましたか。

「はい、でもこちらまで元気になりそうで私は好きなタイプですね。」

「ふふ、そうですね。」

そうして二人で話しているうちに頼んだ料理が運ばれてきました。

「お待たせしました〜！こちらが神仙麻婆 麒麟 になりま〜す！  
熱いうちにお召し上がりください〜い！」

「じ……これは……。」

リースさんが驚いていますね。

私もけっこ〜というかなり驚いています。

「あの〜リースさん、私の目の錯覚でしょうか。料理が輝いてる  
ように見えます。」

「いえ、錯覚ではなさそうです。ほんとに輝いていますね。」

マジですか……輝く料理って何なのでしょうか。アニメの世界ですよ。

「こう見ても始まりません、いたただきましょう。」

「そうですね、そうしましょうか。」

なぜか異様に緊張しますね、アリアさんとの修行以上に緊張しています。

「それでは……」

「はい」

「いただきます」

「あむ……んんんん！！」

な……この味は……お、お、

「「おいしいです!!」」

「なんですかこの料理は!?!こんなおいしいもの今まで食べたことがありません!!」

おっと、思わず大声を出してしまいました。他のお客さんが見ていますノノノ

「たしかにものすごくおいしいですね、私も今までいくつもの料理に出会ってきましたがこんなおいしい料理は初めてです。ああ女神よ……あなたの巡り合わせに感謝致します。」

リースさんが感動しています、かくいう私も感動していますけど……そこにこの店長さんでしょうか?が近づいてきます。

「嬢ちゃん達いい食べっぷりじゃないか!そこまで感動してくれるなんてこつちも作った甲斐があるってもんだ!どうだ?俺のおごりだ、チャーハンもつけてやろう。」

「え?さすがにそこまで」ああ……あなたのご慈悲に感謝致します、ご馳走になります!」リースさん!?!」

「リースさん、店長さんのお心遣いを無駄にはいけません。いただきますしう。」



うつ、たしかにうれしいですがそれは……リリースさんが目をキラキラさせながら私を見えています。……はあ。

「わかりました。店長さんご馳走になります。」

「はっはっは！おうよ、すこし待ってな！！」

「リリースさんありがとうございます。」

「いえ、まあ私も食べたかったですし。」

チャーハンを頼む予定でしたから今回は役得ということと考えましよう。

そして私たちは運ばれてきたチャーハンを食べて店を出ました。

「今日は久しぶりに楽しい食事でした、リリースさん。機会があればまた一緒にしましょう。」

ふふ、そうですね。ほんとに今日は楽しかったです。

「はい、その時はまたよろしくお願いしますね。」

「それでは私はそろそろ行きますね。西通りのパン屋にも行かないとですし。」

「そうですね…（まだ食べる気ですかリースさん…）」  
言葉には出さず私はその言葉を呑み込んだ。

「では本当に今日は楽しかったです。それではリースさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

今日はほんとに楽しかったですね。そこで私はリースさんと別れその場を後にした。

リース      s i d e      e n d

リース      s i d e

「では本当に今日は楽しかったです。それではリリースさん、また会いましょう。」

「はい。ぜひまた。」

リリースさん…不思議な方でした。

偶然一緒にご飯を食べることになりましたがとても温かいというのが第一印象でした。

クロスベルにきて教会の人に警戒されて気が滅入りそうでしたが大丈夫そうですね。

前に出会ったエリイさんですがリリースさんともよき友人になれるそうです。

しかし、リリースさんとの会話の中で時折見せる彼女の悲しげな表情…あれは…過去になにかあった人が見せる表情です…。

私にはわかります。かつて、ケビンが姉さまを死なせてしまったことを悔やみ時折見せていた表情にそっくりですから…

「リリースさん…いつか私に話してくれる日が来るのでしょうか…」

リリース side end

2話「驚愕！！神仙麻婆 麒麟」(後書き)

店長さんの喋り方微妙です。

というより店長オリジナル感がバリバリです。

リースは食べ物には目がないということでこんな感じかなとくちよっとはっちゃけさせすぎた氣もしますが・w・

### 3話「赤い星座との邂逅」

リリス side

ふう、お腹いっぱい満足です

リースさんの昼食を終えて私は次の目的地に向かっています。

せっかくクロスベルに来たのですからヨルグさんの所に顔を出しましょう。

1時期私のお世話をしてくれましたからね、私にとっては恩人といつても過言ではない人です。

まあ…そこで知ったんですけどね、《身喰らう蛇》が進めている《幻焰計画》

というものを……。

そしてアリアさんと旅をしている時に聞いたんです。

《幻焰計画》の通過点として《碧き零の計画》を発動させる必要があると。

つまりキーアを守るという名目で戦う場合は…否応なく蛇と対立することになる。

……ううう、今から憂鬱です、アリアさんに傷をつけることはできなくはないと思いますが、倒すとなると話しは別です……はあ、考えても仕方ありませんね。

そうこうしてる間に歓楽街ですね。あ……

「アルカンシエル………ですか………」

私の前に飛び込んできた建物、私が姉さんと過ごした大切な場所……大切な場所でありもう戻れない場所……

「……行きましょう、ここにずっといるわけには行きません。」

歩きだした私の前に二人の男女が近づいてきました。  
女の子のほうは15、6歳でしょうか、男性のほうは私よりも年上ですね。

「いやあ、いい揉みっぷりだったよあのお姉さん。」

「まあやりすぎて犯罪するなよ。」

「しないよ、でもほんとにいい揉みっぷ」………」

うん？女の子と目が逢いましたね。  
なんでしょうか……獲物を見つけたような笑みです……。

気にしてもしょうがないですね、行きましょう。

歩いて通り過ぎようとしたところ女の子が前に出てきました。

「お姉さん……強いね。」

「え？」

「強い……悔しいけど、シャーリイよりずっと強い。」

いきなり強いといわれても……この場合なんて答えればいいのか。  
よう。

まあ思ったことを言いましょうか。

「あなたのほうも相当な腕前ですね、正面に立ってみて改めて伝わってきますよ。あなたの力が。」

この言葉は嘘ではありません、私には及ばないでしょうが。  
それでも彼女の实力は相当なものであるというのはわかります。

「なんかお姉さんに言われるとうれしく感じちゃうなあ。」

年相応の笑顔…というのでしょうか。

雰囲気わかりますが、この子はきっと幼い頃から戦場に立っていたでしょう。

私がいろいろ考えてる時に彼女が聞いてきました。

「お姉さん名前は？シャーリイはシャーリイ・オルランド。」

「私はリリスです、よろしく願いしますね、シャーリイさん。」

「シャーリイでいいよ、その代りリリスのこともリリスって呼んでいいかな？」

「構いませんよ、では改めてよろしく願いします、シャーリイ。」

「うん、よろしくリリス。」

可愛い子ですね、できればこの子とは戦いたくはないものです。

そこに後ろで控えていた男性が声をかけてきました。

「おい、仲良くなつてるとこ悪いがそろそろ行くぞ。」



「あ、うんわかったよ。それじゃ〜ね〜リリース、また会おうよ。」

「はい、縁があればまた。」

そういつて私たちはすれ違います。  
そのとき確かに聞こえました……

……次は思いつきり殺り合おう……と。

「ふむ、さすがは噂の“血染めのシャーリイ”ですか…。」

彼女がクロスベルにいるということは、すでに父親のほうもクロスベル入りしている可能性が高そうですね。

「これは赤い星座のこともヨルグさんに聞くことにしますか。」

おそらく赤い星座については知らないと思いますけど…。  
さて行きましょうか、ここを進んで住宅街を抜ければマインツ参道ですね。

リリース  
side  
end

### 3話「赤い星座との邂逅」(後書き)

リリス視点は主にゲームでロイド達が主要人物と出会った後と前でロイド達とはかぶらないようにしたいと思います。

場面によつては会うこともあります。主要戦闘くらいですね。アリオスと戦わせてみたいです・w・

それではまた。

#### 4話「マインツ山道の人形工房 前編」

リリース side

みなさんこんにちわリリースです。

今私はマインツ山道の分岐点、つまりバス停にいます。  
え？早すぎるって？歩いて行くわけじゃないじゃないですか、バスって  
いう立派なものがあるのに歩いて行く道理がありません。

「さて、左はマインツトンネル道なので右ですね、人形工房は。」

どうせなら人形工房前までバスも運行してくれると楽なのですが…  
…そんな贅沢も言ってもらえないですね。

「はあ、登りましょうか……。」

私はあたりを見回しながら進んでいきます。

「この辺はあの頃とあまり変わっていませんね、まあ来る人があまり  
いないっていうのも理由の1つでしょうが。」

そうですね、ここに来る人はあまりいません。

用があるといえばヨルグさんに人形を作ってもらいたいひとが頼みに来るかアルカンシエルで使う機材や人形器具などを調達するくらいですか。

そういえば少し前にレンが訪れたそうですね。

久しぶりにお話したかったのですが……あの子はやっと家族というものを手に入れたんです。

今は素直に喜ぶとしましょうか。

連絡を取ろうと思えばいつでも取れますしね。

カサカサ……

「うん？」

先ほどからなにか心配がするとは思いましたが案の定魔獣でしたか……。  
それに……けっこう大きいですね、こんなものが参道には通る人の迷惑になりかねません。

しょうがないですね、倒すとしm！？  
ドン！ドン！

「増援……7体沸いたということは。」

全部で8体……しかし、私の敵ではありません。  
腰にさした刀を抜き私はクラフトを発動する。

「一の舞、夜桜」

リリスは一瞬で魔獣達の背後に回り強力な一閃を放つ。

ーシューーー

音はわずか、しかしその威力は受けた者の命を刈り取るには十分だった。

「痛みはありません、斬られたとわかった時はすでに……。」

ボタン！ ボタン！

「命潰えた後でしょうから。」

あれ、命潰えた後では斬られたとわかりませんね……気にしないで  
進みましょう……。

「さて、もうすぐ工房ですね、日が暮れるまでにはクロスベルに戻りたいですし急ぎましょうか。」

余談ですが、リリスが倒したこの魔獣がクロスベル警察特務支援課に手配魔獣討伐依頼として来ていたことを知るのは後のことになる。

「ふう、着きましたね。」

相変わらずここは変わっていませんね。  
まあヨルグさんらしいといえらしいのですけれど。

「さて入るとしましょうか。」

門に手をかけようとしたときに声が聞こえました。

「すこし待っておれ、人形に案内をさせよう。」

すると扉が開き小さなアンティークドールが出てきました。

「私が来たことはお見通しですか……どこでわかったのでしょうか。」

人形についていくと部屋に入りました、ここも変わっていませんね。部屋の中には一人の老人がいました。

「まあいろいろ聞きたいことはあるが、まずは久しぶりと言っておこうかの。」

「そうですね……お久しぶりです、ヨルグさん。」

なにを聞かれるかわかりませんが今はこの再開を喜ぶとしましょう。

リリース side end



## 5話「マインツ山道の人形工房 後編」

リリス     s i d e

みなさんこんにちわりリスです。

今私は人形工房でヨルグさんとの久しぶりのお話しに花を咲かせています。

「ふむ、そうか。アリアンロードに修行をの。」

「はい、アリアさんにはほんとにお世話になりました。」

「アリアさんか、あの者を愛称で呼ぶのはお前くらいのものだな。」

「ううゝ、いけなかったでしょうか……アリアンロードさんと長くて大変なんですよゝ。」

「まあよいだろう、あの者は使徒の中でも卓越した力をもつやつだ。故に対等に話しかけてくる者もありおらんかったのかもしれない。その点でならお前のことはさぞ気に入ってるのやもしれんな。」

「ふふ、そう言ってくれるとうれしいですね。」

できれば本人の口からききたい言葉ですけれど。」

もし言われてしまうと私はあまりのうれしさに飛び跳ねてしまうかもしれません。あの人は私の憧れなのですから……あ！もちろん1番の憧れは姉さんですよ、こればかりは譲れません。……姉さん

……

私が若干俯いているとヨルグさんが声をかけてきました。

「ふむ、その様子だとお前の姉には会ってないのだな。」

「！？……いけませんね私は、姉さんのことを考えるとすぐ顔に出てしまいます。」

ヨルグさんは鋭いですね、思えば昔から私の思いの内を察して話してくれていましたね。その心遣いに私はどれだけ救われたでしょうか。

「まああの姉のことだ、どんな過去を持っていようがお前のことを受け入れてくれると僕は思うがな。」

「……そうですね、おそらく今会いに行ってもあの人は私を思いつきり抱きしめてくれて……ただ一言、おかえりと言ってくれと思う

います。ですが……私は……。」

そうです、姉さんはとてもやさしいですから。  
でも……だからこそ私は……

「……教団での出来事が引きずっておるのか。」

「……はい……。」

「教団はもうおらん、ヨアヒムもすでに死んでおる。  
お前を縛るものはなにもないはずだがな。」

「そうですね、でもやはり忘れられないんです。自分が生きるため  
とはいえ……私を受け入れてくれた人達をこの手にかけたことが  
……。」

あれは今でも忘れられません。

何日にも続いていた薬物投与と脳をいじられていた生活に私は心を  
壊しそうになっていた。

そして私は奴らの一言に心を許してしまった。

——お前が今もつとも親しくしている者を殺せばここから出してや  
る——

その瞬間、私の中で何かが弾けた。

グサツ！ズブ！グシュ！

「アハハハ、これでコレデ私は自由にナレル。」

ズブ！グサツ！

四肢を切り落とし、内臓を抉り出し、人間の原型が留めてないほどに私はその友人を壊しつくした。  
まるで………相手を壊すことを楽しむかのように………。

気づけば私は涙を流していました。

「私は……またあの時の感覚が蘇ってくるのが怖いんです！！あの人を壊すことを楽しんでるような自分が！！もしかしたら姉さんにも同じことをしてしまうかもしれないって！！。」

「それが……お前を大切なものから遠ざけている理由か……。」

「……はい。」

「ふむ……しかし儂のいうことは変わらん。」

「えっ？」

「それでもやはり、お前の姉はお前を傍に置いとくと思うぞ儂は。」

「ふふ、そう……でしょうね、それが……姉さんですものね。」

ふふ、なぜか不思議と気持ちが軽くなりましたね。  
ヨルグさんには感謝しないといけません。

「今すぐとは言わん、近いうちに会いに行ってみるといい。  
それがお前ら姉妹のためにもなる。」

「そうですね、今すぐはまだ心の整理がつかないのでなんとも言えませんが、近いうちに必ず会いに行きます。」

今の私はどんな顔をしているのでしょうか。  
ただ……これだけは言えます、私はもう……泣いていないって。

「ふふ、ありがとございます、ヨルグさん。」

「礼などいらん……それよりこれからどうするんだ？外はすでに暗いが。」

「えっ。」

ふと時計を見ると……ほんとにもう夜ですね……。  
もうおそらくバスは動いてないでしょうし……困りました。

「その様子だと帰る手段が思いつかないといったところか。」

「うっ……わかりますか。」

うっ／＼／＼恥ずかしいです。

ちよつと挨拶してお暇する予定でしたのに話し込みすぎました……。

「ふむ、なら今日は泊まっていくといい。」

「え？よろしいのですか？？迷惑なのでは……。」

「ふ、今さら遠慮する必要もあるまい。」

そうですね、この際お言葉に甘えさせていただきましょか。

「わかりました、今日1日お世話になりますね、ヨルグさん。」

ヨルグさんにはほんとに感謝してもしきれませんね。  
あ！　そうです。

「ヨルグさん、今日の夕食は私に作らせてください。」

「そうだな、久しぶりにお前の料理を食べさせてもらおうかの。」

「はい!!」

今日は腕によりをかけて作らせていただきます。  
覚悟してくださいね、ヨルグさん。

（夕食時）

「ふむ、ほんとにお前は料理がうまいな、久しぶりに食べたがあの頃より腕が上がっているようだ。」

「ふふ、ありがとうございます。」

やはり自分の作ったものを褒められるのはすごくうれしいですね。がんばって作った甲斐がありました。

さてと、それではそろそろ聞きたいことを聞くことにしましょうか。

「ヨルグさん、2つほど聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」

「なんだ？ 儂に答えられる範囲でなら答えよう。」

「ありがとうございます、まず一つ目ですけど、身喰らう蛇は此度の計画にどれほどの戦力を回してくるのかを教えてほしいのです。」

「ふむ、幻焰計画か、一つ言えることはリベールのように本格的に介入してこないことだな。お前が知っている通りアリアンロードともう二人……“第六柱”と“道化師”が来ると聞いておる。」



「第6柱と道化師……博士とカンパネルラさんですか。」

アリアさんだけでも厄介ですけどその二人も十分厄介ですね。  
博士が来るということはゴルディアス級が出てくる可能性が高いです。

カンパネルラさんは神出鬼没ですし対処の仕様がないですよ……。

「まあどいつも厄介なことに変わりはない。」

「そうですね、いずれ見えるでしょうしその時ですね。」

「まあ明日第6柱と道化師が訪ねてくると言っていたが。」

「そうですね？　なんでまた……。」

「なんでもゴルディアス級の最終型がどうか言っておった。  
大方自慢もあるだろうがな、まったく忌々しい。」

「あはは、相変わらず仲悪そうですね。」

「当たり前だ、あんなのとは顔も合わせたくはない。」

これは相当ですね……お二人の間に何があったのでしょうか。  
気になります。聞かないでおきましょう。

「ヨルグさん、その二人が来たときは私も挨拶していいですか？」

「ふむ、まあいいだろう。奴らにとってもたいして気にはせんだろうしな。」

「ふふ、ありがとうございます。」

さて、明日が楽しみですね、敵として見えるとはいえ知り合いですから。

「ではもう一つ、赤い星座について何か知ってることはないですか？」

「ふむ、ゼムリア大陸最強の獵兵团か。  
クロスベル入りしたということはわかってはおるが詳しいことはわからんな。」

「そうですか、わかりました。」

「力になれんですまないな。」

「いえ、そんなことはありません。  
身喰らう蛇の情報だけでも十分すぎるくらいですから。」

「ふ、そうか。」

さて、聞くことも聞きましたしそろそろ休みましょうか。

「それではヨルグさん、私はそろそろ寝ようと思います。」

「わかった、人形に部屋へ案内させよう。」

「わかりました、それではヨルグさんおやすみなさい。」

「うむ、ゆっくり休むといい。」

「はい。」

こうして人形工房での1日が過ぎていきました。

リリース side end

## 6話「蛇の使徒と執行者」

リリス     s i d e

「ここはどうか、真っ暗です……。」

私は今何も見えない真っ暗な空間にいます。

たしかに昨日人形工房で寝たはずなのですが……

ということとは考えられるとするならば……

「夢……なのでしょうか。」

ここ最近夢というものを見ていなかったのになんか変な感じですね。  
そんなふうに私が思っていると目の前に映像が広がってきました。

「これは……昔の私と……姉さん？」

そこには、私が姉さんに拾われて2月ほど経ったときの映像が流れていました。

・  
・

・  
・  
「次はこの服を着てみなさい、リリース。」

「すこし派手じゃないでしょうか、私には似合いませんよ。」

「いゝや、絶対似合うわ。私が保障するから！」

「うう、わかりました。着てみます。」

懐かしいですね、あの頃の私はあまりオシャレというものをしていませんでしたからよく姉さんに言われていました。オシャレってきれいな人がするものでは？と姉さんに言ったら「ならリリースもしないとダメじゃない」と言われましたっけ。私は自分の容姿が優れているとは思えないのでその言葉の意味が当時はわかりませんでしたね。

「着てみました。」

「やっぱり私が言った通りね！すごい似合ってるわよリリース。」

「／／／そうでしょうか、自分ではよくわかりません。」

「リリースは自分の容姿に自信を持ったほうがいいわよ、振り向かない男はそうそういないと思うわ。」

「別に男の方に振り向いてもらわなくても……姉さんにさえ見てもらえれば……。」

「え？最後のほう聞こえなかったんだけどなんて言ったの？」

「／／／なにも言っていない！」

「えゝ、絶対なにか言っていたわよ、いいからお姉さんに言ってみなさい！」

「だからなにも言っていないって言ってるじゃないですか！」

ふふ、懐かしいです。

あの後ずっとなにを言っていたのか聞かれましたね、結局言いませんけど……

もし、もし許されるなら……あの頃の生活に戻りたいですね……姉さんとまた一緒に……

ペペペペペペペペペペ！

「うつ！？」

そうでした、目覚ましをかけていましたね。

いいところだったので怒ればいいのか、気持ちに沈んだ所でちょうどよかったと喜ばいいのかわかりませんね……

「ヨルグさんは……………」

ヨルグさんはいませんね、そういえば今日は博士とカンパネルラさんが来ると言っていました。

「ということとはもうすでに？」

行ってみましょうか、お二人に会うのはほんとに久しぶりです。  
どういう反応されるのでしょうか…………

私は扉を開けて外を見てみると思ったとおり、ヨルグさんとお二人がいました。



「博士、僕たちは喧嘩をしに来たんじゃないんだからもうすこし穏便……………あれ？」

「ん？どうしたカンパネルラ……………おや？」

お二人とも気づいたようですね、黙っているのもなんですし挨拶しましょうか。

「お久しぶりですね、博士にカンパネルラさん。」

「リリースじゃないか！久しぶりだね、まさかクロスベルにいたとは思わなかったよ。」

「たしかにな、なにかクロスベルに用でもあったのか？」

上からカンパネルラさんに博士が聞きます。

「これからクロスベルでなにかが起きるかもしれないのを黙って見ていることなんかできないということですよ、お二人とも。」

「そうか、たしかクロスベルにはお前の姉がいたな。」

「はい。」

「そっか、でも……どんな理由があっても僕たちは手を引かないよ?。」

そんなことわかっていますよ、私自身そんなことはありえないと思っていますし。

「わかってますよ、すべては大いなる 盟主 のために。ですよね。」

「ウフフ、わかってるじゃない。」

「だからこそ私も手を引くことはできません、クロスベルを……姉さんを守るためなら……たとえどんなにあなた方が強大であったとしても刀を向けさせていただきます!。」

「ふふ、いいのかい? そうなるとあの人も戦うことになるよ?。」

「……覚悟はできていますよ。」

「そうか、まあ僕たちの計画にとって君は大きな壁になりそうだしあの人には勝ってもらいたいけどね。」

「そう簡単には負けてあげませんよ？といってもたとえあの人相手で負けてあげるつもりはありません。」

「そうです、たとえ相手がどんなに強くても負けるわけには行きません。」

「まあ僕たちよりも赤い星座を気にしたほうがいいと思うよ、彼らは獣みたいなものだからね。」

「そうですね、もちろんそちらのことも考えています。」

「ふふ、精々ががんばりなよ。陰ながら応援くらいはしてあげるからさ。」

「応援するくらいならこちらの力になってほしいものですけどね…。」

「まったくそのとおりですよ、私一人ではいくらなんでも限界がありますからね。」

「ふふ、それは無理さ。っと博士は……。」

そういえば博士のことを忘れていましたね、すっかりカンパネルラさんと話し込んでしまいました。

「だから調整を頼みたいのだよ。」

「自分でやったらどうだ、僕はお前にはあまり関わりたくない跟前にも言っただけだ。」

……ヨルグさんだけ博士のこと嫌いなんですか。

「あの、カンパネルラさん？」

「ん？なんだいリリース。」

「あの二人はなぜあんなに仲が悪いのですか？」

「さあ？僕もあまり詳しいことはわからないんだよ、いつも会って喧嘩ばかりしてるからなにかあったんだろうとは思ってるんだけどね。」

「そうですか……うん？」

向こうから誰か着ますね、あれは……

「……特務支援課……ですか。」

リリース side end

## 7話「再会」

リリス    s i d e

あちらから来るのは特務支援課ですね。

あの人たちは身喰らう蛇について知っているのでしょうか……レンと関わっているのであれば組織の事くらいは聞いているかもしれないですね。

人物までは知らないでしょうが。

それにしても……ヨルグさんと博士の話し終わりませんね……

「くどい。おぬしを入れるつもりはない。

いかに    十三工房    の統括者とはいえ、立ち入る権利はないはずだ。

」

「……フフ、まあいいだろう。

アレはN o . X V の所有物、元より取り上げるつもりはないさ。」

N o . X V ……レンの所有物ですか、まああれをあの子から取り上げるというのであれば私はあの子の味方をしますよ……博士？

「っ！？、し、しかしマイスター？データは一通り渡してもらったよ

「？」

あ、ちょっと殺気を出してしまいました。博士が動揺しています……  
カンパネルラさんがちょっと笑っていますね、うん？口パクでなにか言っています……

“あの子がかわいいのはわかるけど過保護すぎじゃない？”ですか  
……

……余計なお世話ですよ？少しO H A N A S Iをしてほしいのしょうかね、カンパネルラさんは。」

「！？」

あ、カンパネルラさんが震えています、どうしたんでしょうか……

「（今リリースの声でO H A N A S Iというワードが聞こえた気がするよ……うん、余計なことは考えないようにしよう。僕はまだ死にたくはないからね……）」

なんかカンパネルラさんが一人で頷いています、ほんとにどうしたのでしょうか。

っと、まだ話しは……終わっていませんね、……長いです。

「それが“あの方”の御意志でもあるのだからねえ。」

「……フン、おぬしに言われるまでもない。」

本当に仲が悪いですね、今度なにがあったか本気で聞いてみましょうか。

「ウッフ、本当に仲が悪いなあ。」

そこに今まで話さなかったカンパネルラさんが口を開きました。

「博士も嫌われていると判ってわざわざ訪ねなきゃいいのに。」

その通りですね、私なら絶対嫌われている相手の元には姿を現そうとは思いません。

「ハハ、何を言ってるのかね？私とマイスターは旧知の仲。

特に人形作りに関しては固い師弟の絆で結ばれているんだからねえ。

」



……師弟の絆ですか、とてもそんなふうには見えません。

「フン、戯言は止めるがいい。

所詮儂の技術など結社にしてみれば古臭いもの。

おぬしの 統合理論 があれば儂に頼る必要などあるまい？」

統合理論……聞いたことありませんね、まあ私も結社についてそこまで詳しく知っているわけではないですから仕方ありませんけど。

「フフ、ご謙遜を。

こと人形の調整にかけてマイスターの右に出る人間なんでこの世に存在しないさ。」

そうですね、私もそれは思います。人形作りでヨルグさんに勝る人などいないでしょう。

「あ、でも パテルⅡマテル に付けたあの回路だけはただけないねえ？あれじゃあ、せつかくの 殲滅天使 のポテンシャルが無駄になってしまうじゃないか。」

っ！？この人は！！

「……この外道が。」

私も口を出そうとしたとき来訪者が来ました。やっと来たんですか、特務支援課…………

「えっと、すみません。」

「おや…………？」

「あれ？お客さんみたいだね。」

お二人も気づいたのか話しが終わりましたね。

「…………カンパネルラ、用件は済んだだろう。  
その不快な男を連れてとっと立ち去るがいい。」

不快って…………まあわたしもさっきの会話を聞いているうちにそんなふうになってしまいました。

「ウフフ、了解。」

ほらほら博士、さっさと次に行かないと。  
今日中に用を済ませてラボに戻るんだろう？」

「フフ、もちろんだとも。」

それではマイスター、これで失礼されてもらうよ。

例の子たちも完成しだい、チェックをお願いするからね?」

「……………くどい!とつと失せるがいい!」

ああ、ヨルグさんついに怒ってしまいましたね、これはとうぶん機嫌が悪いかもしれませぬね。

「ウフフ、それじゃあまた、リリースもまたね。」

「はい、またお会いしましょう。」

また……………ですか、きっと次会うときは戦う時ですね……………

お二人が去っていきます、ていうか特務支援課のみなさんボーっとしていますね。

そりゃそうでしょうね、いきなりこんな場面に出くわせば誰だってこうなりますかね。

「……………何を呆けている。」

4人が慌てて来ます。

「す、すみません。」

「その節はどうも……ご無沙汰していました。」

上から前にも言いましたが年上に好かれそうな男性と灰色の髪でお客様のような女性が言います。

「特務支援課か、久しいな。」

私もあいさつしておきましょうかね、黙って立ち去るなんてできないですし。

「ふふ、またお会いしましたね、みなさん。」

「君はあの時の……」

「知り合いだったのか？ リリス。」

「いえ、知り合いというほどのものでもありません、昨日すこし話したくらいですよ。」

「ふむ、そうか……」

ヨルグさんがすこし考える仕草をしたあと彼らに向き直ります。

「レンはリベールへ去った、今さらここに何の用だ？」

やっぱり機嫌悪いですね、ヨルグさん。

「いえ、近くに来たので挨拶に伺っただけなんですよ。」

「その……来客中に失礼しました。」

「フン、招かれざる客だ。その辺は気にしておらん。」

招かれざる客ですか、博士からすればたしかにそうでしょうね。  
私としては久しぶりに会えるということであれしさはありましたが

……

「だが今は特に話すこともあるまい。」

そう言つてヨルグさんは工房の方を向き

「何か用件ができたなら改めて訪ねてくるがいい、レンに免じて話くらいは聞いてやろう。」

なんだかんだで話を聞いてくれるのがヨルグさんのいいところですね。

「あ……」

どうやら彼には予想外の返答だったようです。

「リリースも何か困ったことがあればいつでも来るといい、儂にできることなら力になろう。」

ふふ、やっぱりやさしいですね。ヨルグさんは。

「はい、その時はぜひ力を貸してもらいます。それではまた会いましょう、ヨルグさん。」

「フ、またな。」

ヨルグさんの門の内側に入ると門が勝手にしまりました、どこかにセンサーでもあるのでしょうか。

「か、勝手に門が閉まった……」

やっぱり驚いていますね、この反応だと彼女がここに来たのは初めてでしょうか。

「ふうん、古めかしいけど何か仕掛けでもあるのかな。」

もう一人の彼もそうは言いますがあまり驚いてはいませんね。

「ああ……とんでもないカラクリを作っている場所だからな。それに……さっきの来客も気になるな。」

気になる……ですか、この人……きっと警察官としての感は相当な物なんでしょうね。

「ええ、招かれざる客って言ってたけど……何ていうか、その……」

怪しげな感じだったわね。」

ふふ、怪しげですか、博士はともかくカンパネルラさんは怪しさ満点ですね。

「そうですね……まあ危険そうには見えませんでしたけど。」

危険そうには見えませんか……今は……ですよ？

「（……フフ、危険そうには見えないか。）」

彼はなにか知っていますね、それに……彼はなにか隠している気がします、その何かはわかりませんが他の人たちも知らないことでしょうねきっと。

「そうだ！まさか君がここにいるとは思わなかったよ。」

「本当ね、なにか知り合いだったみたいだけど」

ふと気づいたように彼らが聞いてきました。



「そうですね、簡単に言えばヨルグさんには昔に助けていただいたことがあるんです。私にしてみれば恩人なのですよ。」

「そうだったのか、それにしても君の言った通りだったな。」

「うん？何がですか？」

はて……私は彼らに何か言ったのでしょうか。

「昨日会ったとき、“また近いうちに会えそうだ”って言ってただろ？」

「ああ、そういえば言いましたね。」

まさかそれが1日後の今日だとは思いませんでした。」

「ふふ、そうね。」

ちよつと挨拶にきただけなのにあなたに会えるなんて思っても見なかったもの。」

「そうですね、それはわたしですよ。」

たしかにこんなにはやい再会は私自身予想外でした。

「そういえば俺たち、なんだかんだで君の名前聞いてなかったな。」

そういえばそうでした、キアを保護していることしか私自身彼らのことを知りませんね。

「ああ、そうですね。それでは自己紹介でもしましょうか。こうして再び会えたのも何かの縁でしょうし。」

「そうだな、俺はロイド・バニングス。よろしくな。」

「エリイ・マクダエルよ、よろしくね。」

「ノエル・シーカーです、よろしくお願いします。」

「ワジ・ヘミスフィアさ、今後ともよろしく頼むよ。」

「はい。私の名前はリリスです、みなさんよろしくお願いしますね。」

思わぬ所で彼らと知り合いになってしまいました。

……ですが……なんでしょうかこの違和感は……まるで彼らと知り合うことが決められてしまったような感覚です。  
まさか、私がクロスベルに着いたときにキーアを助けて彼らと知り合うというのも決められたこと？

私がクロスベルに行く日に見た夢で聞こえた少女の声が気になります……うゝん、考えても仕方ありません。いずれわかることでしょう。

リリス     s i d e     e n d

??「悪夢」

月が輝く中、アルモリカ古道の先、古戦場で対峙する二つの影があった。

「はあ……はあ……はあ……」

「うう……はあ……すう……」

お互い長い間戦っていたのか息が絶え絶えになりながら片方の人影が言葉を発する。

「どうして……どうして姉さんを守れなかったの！あなたはずっと姉さんの傍にいたのでしょうか！？」

「っ！？わたしは……」

「あなたが姉さんのことを大切にしてくれてるって思ったから！！私はあなたに姉さんを守ってくれるように頼んだの！！姉さんのために……暗殺者の道を捨ててくれたあなたに！！」

「……わたし……し……は……」

大切な存在を失い、憎悪を宿らせた瞳の少女。

大切な存在を失い、悲しみと絶望を宿らせた瞳の少女。

二人はともに大切な存在を目の前で奪われた。

元々彼女たちは互いに親友ともいえるべき存在だった。

二人は暗闇の道を歩き続けてきた。

そんな道を歩む中、一人の女性の手によって二人は光を手にするこ  
とができた。

だが、運命は無情にも二人の元から光を奪い去った。

女神が誤った道を指し示すかのように二人はその道を進み、そして

.....

「私は.....あなたをゆるさない!!」

「くっ！？」

お互いが激しい斬撃を繰り出す。

しかし、その戦いもすぐに決着は着いた。

ズブッ！！

「……………あ……………あ……………」

黒い短めの髪の少女の剣は青紫の髪の少女の心臓を貫いた。

グサッ！！

「……………う……………うあ……………」

そして青紫の髪の少女もまた、黒い短めの髪の少女の心臓を貫いていた。

大切なものを失い、殺し合いをした世界。

これも一つの未来だったのだろう。

幼き少女は思う、そんな世界はあまりにも悲しすぎると。

だから幼き少女は力を振う、よりよい未来を築き上げるために。

.....叶わぬならば.....すべてを“零”に.....

## 8話「新しい絆」

人形工房から山道を下る影が5つ。

クロスベル警察特務支援課と我らが主人公リリスである。

「へえ、8年ぶりにクロスベルに帰ってきたのか。」

特務支援課リーダーのロイドが言う。

「はい、久しぶりに帰ってきたのですがあまり変わっていないくてホッとしましたよ。」

このリリスの気持ちは本当である。

大好きな姉と共に育った町があまりに変わりすぎているかもしれない、これがリリスにとっては心配だった。

だがそれも杞憂だった、彼女にとって一番安心できたのは何よりアルカンシエルであろう。

クロスベルの中でも特に大切な場所、彼女が本当の自分を見つけることができた場所なのだから。

「ねえ、リリスさんは今までどこにいたのかしら？」



特務支援課メンバーの一人、エリイが聞く。

「そうですね、私は今まで各地を転々としていたんですよ。だからどこかにの町に住んでいた、ということはありませぬね。」

「そうなの……その年で各地を回るっていろいろと大変なこともあったのではないの？」

エリイの疑問も当然である、リリスの年は１７歳。

自分と変わらないくらいに年なのだ、エリイ自身も大陸を回ったことはある。

しかしそれは自分の叔父であるマクダエル議長と共に回っていたからだ、決して一人でいたわけではない。

「そうですね……たしかに大変なことも多々ありました。ですが私は……過去の自分を許すことができなくて旅に出たんです、家族を捨てて……」

リリスの顔が悲しみに染まる。

最愛の姉と離れること、それは彼女にとって何事にも代え難いほどの悲しみを伴う選択だったのであろう。

「えっと……ごめんなさい、なにか嫌なことでも思い出させてしま

「たかしら……」

「いえ、かまいませんよ。

この道を選択したのは私です、後悔はしていない……といえは嘘になつてしまいますけど……」

リリスは笑う、だが周りの4人はそれが強がりの笑顔というのがわかつてしまった。

「えっと、私には妹がいるんですけど……リリスさんの家族はどういった方だったんですか？」

警備隊からこのたび特務支援課に異動してきたノエルが言う。

「家族ですか……先ほど言った家族というのは本当の家族ではないんです、私は本当の自分の家族がどういった人なのか、顔も知りませんから……」

またもや暗い話題になってしまった、ロイドとエリィがジト目でノエルを見る。

「え……えっと……本当にすみません……」

「ふふ、構いませんよ。」

私は確かに本当の家族を知りません、ですが私は今の家族に家族以上の愛情をもらいました。

ですから私は幸せなんですよ、決して悲しくはありません。」

「そうですか……」

4人は思う、なぜ彼女はこんなにも強いのかと。

だからこそ4人は聞きたいと思った、家族がいない彼女をこんなに幸せに満ちた顔をさせた今の家族がどういった人たちなのかを。

しかし聞きづらかった、さつき彼女はその家族を捨てたと言ったのだから。

「ふふ、私の今の家族がどういった人なのか知りたい……そんな顔ですね。」

「!?」

4人は驚く、それもそのはず。

思っていたことをこうも簡単に言い当てられたのだから。

「そうですね、別に隠さないといいけないことでもないですし話すのは構いません……聞きたいですか？」

「……いいのかい？聞いても。」

わけあつて特務支援課にきたワジが聞く。

「構いませんよ、私自身……なぜかわかりませんがあなたがあなたたちのことは嫌いではないです、むしろ好意的です。本当になぜかはわかりませんが。」

リリスは本当になぜかわからないというふうに笑いながら言う。

4人は嬉しかった、好意的に見ているというのは誰に言われても嬉しいだろう。

リリスに受け入れてもらえた、それが4人にとってはすごく嬉しかった理由なのかもしれない。

「じゃあ聞かせてもらえるかな、君の家族のことを。」

「はい、私には……姉がいました。」

リリスは当時を思い出すように話し出す、その顔は本当に大切な人を想うやさしい顔をしていたと後に特務支援課のメンバーは語ったという。

「姉は……一言でいうなら“太陽”のような人……でしょうか。」

「太陽？」

「はい、姉は見る人すべてを魅了するかのような人でした。」

「すごいお姉さんのね、ふふ……リリスさん本当に楽しそうに話すから。」

「はい！本当にすごい姉さんだったんですよ。」

4人は内心驚いていた、リリスは一言でいうなら俗に言う“クールビューティー”な感じであろう。  
そんな彼女が目を輝かせながら姉をすごいと言っているのだから。

リリスの話は続く。

「姉さんは私に光をくれたんです、暗闇の道を歩いた……生きる意味を見いだせなかった私に。」

「本当にリリスはお姉さんのことが好きなんだな……でも……でも

どうして君は……そのお姉さんの傍を離れたんだ？」

ロイドが聞く、それはほかの3人も思ったこと。

「……すみません、それは私が姉さんに拾われる前のことが関係しているのですが……それはまだ話せません……ごめんなさい。」

「いや……構わないよ、ありがとう。話してくれて。」

「本当にいい話だったわ、あなたのお姉さんに会ってみたいわね。」

「はい、一度妹のことについてお話ししてみたいですね。」

「フフ、久しぶりにいい話を聞いた気がするよ、ぜひ僕もその姉に会ってみたいね。」

上からロイド、エリィ、ノエル、ワジが言う。

「ふふ、もしかしたら会えるかもしれませんよ？姉さんは今クロスベルにいるので。」

「そうなのか!？」

「はい……私自身今すぐにも会いたいのですが……まだ心の整理というものができていなくて……」

そう、リリスは今すぐにでも姉に会いたい、姉の胸に飛び込みたい  
と思っている。

しかし過去の自分の記憶がそれを邪魔してしまう。

「そうか……でも早いうちに会った方がいいと思う、俺はそう思う  
よ。」

「ふふ、ありがとうロイドさん、それにみなさんも。  
みなさんと話すうちに私自身心が軽くなった気がします。」

「ふふ、私たちもリリスさんの力になれてよかったわ。」

「本当です、もし困ったことがあればいつでも言ってください。」

「そうだね、その時はぜひ力にならせてもらっよ。」

「みなさん……本当にありがとうございます。」

リリースは嬉しかった、自分の身の上の話はすべて聞かせたわけではないが、自分を受け入れてくれた特務支援課が温かい場所だと感じた。

「よし！そろそろバス停だな、リリースはどうするんだ？」

「そうですね、私はバスでそのままクロスベルに戻ろうと思います。みなさんとはバス停までですね……私自身もうすこしみなさんと話したいと思っていたのですこし残念です。」

リリースはシュンとした、リリースは気づかなかった。

数人が顔を赤くしていたことに。

「と、とりあえず進みましょう。」

私たちも早くメインツに向かわないといけないし／＼／＼。」

「そ、そうですね。」

時間は限られていますから急ぎましょう／＼／＼。」

「フフ、そうだね。」

リーダー、先に進もうか。」



「そうだな……っと、どうしたんだ二人とも、なんか顔が赤いよう  
だけど。」

「な／＼／！？なんでもありません／＼／！」

「そ、そうか……。」

「ふふ、行きましようかみなさん。」

リリスは新しい絆を手に入れた。  
この絆が後に奇跡を生むことになるのを今はまだ、誰も知らない。

## 8話「新しい絆」（後書き）

二つ名決まりました！！

設定に付け加えました。

## 9 話「リリスの力」

エリイ     s i d e

みんなこんにちわエリイよ。

私たちは今リリスちゃんと一緒にバス亭に向かっているところよ。

「それにしても……さっきのリリスさんのシュンとした姿……可愛かったですね。」

隣を歩いていたノエルがそう言ってきたわ。

「そうね、たしかにあの時のリリスちゃんは可愛かったわ……思わず抱きしめちゃいそうになったもの。」

私は前を歩いているリリスちゃんを見ながら言う、クールな感じはするけれど時折見せる年相応の子供らしさが一層リリスちゃんを可愛く見せてしまうのかしらね……

「あはは……それは私もです、フランとはまた違った可愛らしさですよ。」

「ふふ、ノエルさんはフランちゃんのことになると人が変わるものね。

いつだったかしら…… フランちゃんにお礼をしたいって人がいて、その時にフランちゃんが好きながいるって言った時のノエルさんすごく慌てていたものね。」

「あ／＼あれは姉としてすこし気になっただけです!!」

もう、ノエルさんったらこんなに慌てちゃって。

まああの時は私たちもすこしだけびくりしていたのだけどね。

「おゝいエリィー！、ノエルー！どうしたんだ？」

あら、いつの間にかロイドたちと離れていたのね。

「ノエルさんいきましよう、離されてしまっていたわ。」

「あ、本当ですね、行きましょ。」

「ええ、いきましようか……ふふふ。」

「も／＼／＼エリィさん忘れてください!!」

「ふふ、ごめんなさいね。」

慌てるノエルさんが少し可愛いと思ってしまったのは内緒よ。

エリイ     s i d e     e n d

リリス     s i d e

すこし遅れてしまっていたエリイさんとノエルさんが追いつきました。

なぜかノエルさんの顔が赤い気がするのは気のせいでしょうか……

「二人ともどうしたんだ？何かあったのか？」

「すこしノエルさんと話し込んでしまったのよ、ごめんなさいね、心配させたかしら。」

「いや、なにかあったのか思ったただけだから、謝る必要はないよ。」

なにもなかったようで安心しました。

……それにしても近いですね、それも……けっこうな数です。

「みなさん気をつけてください、魔獣です。」

「気づいていたんだね、けっこうな数……かな。」

ワジさんも気づいていたようですね。

「はい、多いですね。……来ました!」

「!これは……」

「多いわね……」

「でも……やるしかありませんね。」

「そうだな、リリスは下がっていてくれ。」

「そうね、リリスちゃんは下がってて。」

えっと……私も戦えるのですが……今はお言葉に甘えましょうか。  
みなさんがピンチになったら助太刀しましょう。

「わかりました、みなさん気を付けてください。」

「ああ！よし、みんな！一氣にいくぞ！！」

「ええ！」

「はい！」

「了解。」

ロイドさんがみんなを鼓舞します、すごいですね、たった一言でここまでみんなの士気をあげるなんて……

「はあ！！　せい！！！」

「は……　甘いよ。」

前衛はロイドさんとワジさんで魔獣を攻撃していますね、ロイドさんのトンファ―術は大した物ですね、ワジさんの体術もすごいです

……

「そこ！！ やあ！！」

「はあ！！ そこです！！」

後衛はエリイさんとノエルさんですね、エリイさんは射撃とアーツを組み合わせた戦いです、アーツの威力もちろんですが射撃の腕も大したものです。  
ノエルさんも射撃の腕は負けていませんね、さすがは警備隊期待の人ですね。

「しかし……数が多いですね、向こうの魔物もこっちに気づいたようですね。」

さしずめチェインバトルってやつですね。

「くっ！数が多いな……エリイ！いけるか？」

「ええ、いつでもいいわよ！」



うん？あれは……

「ふん！ー！はあ！ー！せい！ー！」

ロイドさんがまず魔獣の集団に3連撃を打ち込み一歩飛び退きましたね。

「「スターブラスト！ー！」」

すごいです……敵の集団が半分減りました……ですがまだ来ますね、助太刀しましょうか。

「はあ……はあ……まだいるのか……」

「え……ええ……あと少しなのだけど。」

「これは……すこしきついかもしれませんがね。」

「そのようだね（あれを使うかな……）」

「みなさんあとは私にまかせてください。」

「え？リリスは戦えるのか？」

「はい、私も戦えると言おうとしたのですがみなさんのお言葉に甘えさせていただきました。」

「そ、そうだったの……でもけっこうな数よ？」

「問題ありませんよ、私は大丈夫です。」

そうです、あの程度の数では私の障害にはなりえません。

「行きます……シン！」

「な！？消えた？」

「一体どこに……」

「あ！上です！」

私は瞬動を使い魔獣の群れの上へと移動します、見慣れてない人には私は瞬間移動したように見えるでしょうね。

「三の舞……………雪月花!!」

私は最初に一番力のありそうな魔獣を上空からの一閃で倒します。そして残りは的確に急所を狙い切り伏せます。

「き……………きれい……………」

「あ……………ああ……………踊っているようだ……………」

「何かの舞台を見ている感じです……………」

「そうだね、本当にきれいだよ……………（一本の刀を使い舞を踊るかのような斬撃……………まさかね……………」

みなさんが茫然としていますね、あと一体ですか。

「これで……………ラストです!」

――シューン――

リリスの一閃を受けた魔獣は力なく倒れた。

「ふう、終わりましたね……うん？みなさんどうしたんですか？？」

みなさんがハッと我に返ったようにこちらにきます。

「い……いや、ちょっと目を奪われたっていうか。」

「ええ……戦いとは思えないほどにきれいな戦い方だったわ……」

「はい……舞を踊っているような感じでしたからね。」

「僕もすこし驚いたよ、本当にきれいだった。」

自分の戦い方をきれいと言ってくれたのは彼らで2番目ですね、アリアさんやエンネアさんにも言われました。

「ふふ、ありがとうございますみなさん。」

「それにしてもリリスはすごく強いんだな、驚いたよ。」

「そうね、本当にすごいわリリスちゃん。」

「あまり褒めないでください、私はまだまだです。  
私に戦いを教えてくれた人にはまだ及びませんから。」

「リリスさんに戦いを教えてくれた人……ですか、とても強そうです……」

「はい、とても強いです。その人は私の憧れであり目標ですから。」

超えられるかはわかりませんがアリアさんは私の目標です。  
どれだけの時間がかかるかはわかりませんがいつかは必ず超えて見  
せます！！

「っと話し込んでいたらもうバス停だな。」

「そうですね、みなさんとはここからです。」

「もうすごし話していたかったけど残念ね、また会いましょうね。リリースちゃん。」

「はい、エリイさんもみなさんもまた会いましょう、それではお気を付けて。」

「またね。」

「またな。」

「ぜひまたお会いしましょう。」

「フフ、また。」

そうしてみなさんは動力車に乗ってマインツトンネルのほうへ行きました。

「……みなさん、本当に気を付けてください、なにか嫌な予感がしますから。」

このリリースの予感は見事に当たることになるのは原作を知っている

人ならわかるはず!!

リリース side end

## オリ主設定2

リリス・プラティエ

レベル70

＋装備＋

武器 炎舞の刀（STR＋330 RNG＋1 戦闘不能20%）  
ルシフェリオン（ATS＋450 小型の球体、ネックレス  
のような形でリリスの首元に付いている、リリスの意思で魔道杖の  
ように変化することができる。）

身体 深紅のジャケット（DEF＋300 ADF＋50 回避率  
＋20% 女性専用装備）

靴 紅のブーツ（DEF＋150 MOV＋2 回避率＋20%  
女性専用装備）

アクセサリー 超・闘魂ベルト（一人の行動が終わるたびにCP増  
加）

グラールロケット（全状態以上無効）

＋クオーツ＋



マスタークォーツ セツナ（戦闘開始時とピンチ時にSTRとSPD増加 風属性）

クォーツ 行動力2 攻撃2 省EP2 回避2 EP2 混乱の刃

＋クラフト＋

一の舞・夜桜 30 大円 一瞬で敵の背後に回り静かな、しかし強力な一閃を放つ。確率50%で「戦闘不能」に

二の舞・雪花 20 単体 無数に敵を切りつけすべての斬撃は的確に敵の急所を切り裂く。技/アーツ駆動解除

三の舞・雪月花 30 中円 目にも止まらぬ速さで敵の頭上に飛び、強力な一撃の斬撃を繰り出す。行動順を遅らせる。

真・麒麟功 30 自己 体内の気を瞬時に練り上げ、一定ターンSTRとSPDを急激に上昇させる。

月下の洗礼 50 中円 CP+50

四の舞・死の演舞 40 単体 敵を死へと誘う剣の舞。確率90%で「戦闘不能」に

＋Sクラフト＋

終の舞・桜花乱舞殺 全体 攻撃 閃光の如く目で追うことのでき

ない剣技、全体の敵を無数に切り付け敵を薙ぎ払う。確率80%で「戦闘不能」に

ルシフェリオン・ブレイカー 直線 攻撃 広大な魔法陣を展開し打ち出す収束砲、前方の敵をすべて一掃する。

ルシフェリオンはやってしまった感があります、まあティオも似たような技あるしなんとかなるでしょ（笑）

もともとリリスは某魔法少女の星光の殲滅者をモデルとしているのでこの技はぜひ入れたかったんですね……

賛否あると思いますがまあ……勘弁してください、ああこんなクラフトもあるんだな〜ってな感じで見てください・w・

## 10話「儂い笑みを浮かべる少女」

リリスはロイドたちと別れた後バスに乗りクロスベル市へと帰ってきた。

「ようやく帰ってきましたクロスベル市です。」

1日ぶりに帰ってきたクロスベル市を見てリリスはつぶやく。

零の至宝の少女との出会い、そして少女を守る特務支援課との出会い、赤い星座との邂逅、かつて1時期ではあるが自分を助けてくれたヨルグマイスターとの再会、蛇の使徒と執行者との思わぬ再会、今まであまり人と関わることをしなかったリリスにとっては非常に濃い1日だったのは言うまでもない。

「ほんとにいろいろあった1日でした……うん？あれは……」

彼女の前から身なりのいい3人組が歩いてきた。

「たく、自治州の警察如きが俺たちに説教とは舐めた真似をしてくれたな！」

「しょうがないさユーリ。だけど所詮あいつらには説教が精一杯なのさ。」

「そうだな、俺たちを裁くことはできないんだ、そこまで怒るなよユーリ。」

「（なるほど、彼らは共和国の人ですか……）」

現在クロスベルでは外国の人を裁くことはできないのだ。だから警察も迂闊に逮捕することはできない、なんとも世知辛い世の中である。

「ほんとですね、規制が変わるようにデーター市長にはがんばってもらいたいものです。」

なんの文に反応したのかはわからないがそれはスルーするでしょう。

「はい、それは気にしてはいけませんよ。」

うん………スルーだだスルー………

「さてと、歓楽街ですか………」

住宅街を抜けリリスが訪れたのは歓楽街、アルカンシエルを見るとロイドとヨルグの言葉が頭をかける。

「（早いうちに会った方がいい……………ですか）」

リリスは今すぐにも最愛の姉に会いたい、しかしまだ心の準備が足りていないのだ。

姉と別れたのは8年、もしかしたら自分のことがわからないかもしれない、ひょっとしたらすでに自分のことは忘れているかもしれない。リリスにとってただそれが怖かった。

「（はあ……………まだなぜいなくなったのかと怒られるほうが気が楽……………ですね……………）」

リリスの頭の中はすでに姉との再会したときのビジョンで一杯である。

だからだろうか、考え事をしていたので気づかなかった。自分に近づく1つの影に……………

——ドーン——

「きゃっ——」

「え？……あ、ごめんなさい！」

非常にレアである、リリスがこんな可愛らしい悲鳴をあげるのはい後ないかもしれない。

「えっと、大丈夫です、ボーっとしてた私が悪いんです。」

「それは私も同じだから、こちらこそごめんなさい。」

両方とも頭を下げる光景とはなんだろうか、これでは埒があかない  
と思いリリスが口を開く。

「ふふ、これでは話しが進みませんよ。」

「あはは、そうだね、でも本当にごめんなさい。」

「もういいですよ、あなたは別……ってあなたは……リーシャ・マオ？」

リリスが今ぶつかったのはクロスベルでは最早有名である。

アルカンシエルで電撃デビューを果たした期待の新人リーシャ・マオその人なのだ。

「うん、そうだよ。あなたの名前も聞いていいかな？」

「私はリリスです、よろしくお願いしますね。リーシャさん。」

「こちらこそよろしくねリリスさん、ていつか呼び捨てでいいよ？ そんなに年も変わらないと思うし……？」

「私も呼び捨てでいいです。私は17ですけど……リーシャは？」

「わかった、でもすごい偶然かな、私も17だよ。」

「同年……ですか……」

「うん？どつかしたの？」

「いえ……（これで同年なんて不公平ではありませんか？）」

リリスがなぜこんなことを思っているのか、それはゲームをやった

ものならわかるはずである。

「ただ……ずいぶん立派なものをお持ちなのだと……決して大きくて羨ましいなと思ったわけではありませんよ？はい。」

いや、本音ダダ漏れである……

「あはは……でもいいもんじゃないよ？肩なんてすぐ凝って痛くなるし……」

「それは私たちにとっては贅沢な悩みですね……」

「あはは……ごめんね……そうだ！こうして出会えたのも何かの縁だしそのアイス屋でなにか食べない？」

そういつてリーシャが指差したのはアルカンシエル前に構えてあるアイスの露店である。

「いいですね、ここのアイスはおいしいと聞いたことがあります。」

「ふふ、それじゃさっそくいきましょ。」



そうして二人はアイスを買って食べた後雑談に花を咲かせていた。

「そうだったの…… 8年ぶりにクロスベルにね。」

「はい、いい時期に帰ってこれたと思ってますよ、たくさんの人たちに出会えましたし、何よりリーシャにも会えましたからね。」

そういつてリリスは満面の笑みでリーシャに言う。

「／／／そ、そうなんだ、私もリリスに会えてうれしいよ。」

リーシャもリリスに笑顔で返す、だがリリスは違和感を覚えた。彼女の浮かべた笑顔が無理のあるように見えたのだ、この違和感はやほど感のいい人か<sup>ロイド</sup>リリスくらいしかわからないだろう。

なぜリリスがわかるのか、簡単なことである。それは8年前にリリスが最愛の姉へと向けていた同じ“夢い”笑顔なのだから。

「リーシャ…… 1つ聞いてもいいですか？」

「うん？ なにかな？」

「リーシャはどうして……そんな儚い笑顔をするんですか？」

「……えっ？」

リリスは問うた、リーシャの顔が驚きに染まる。

「あなたのその笑顔は無理をして笑っているように私は感じました……違いますか？」

リリスは真剣な面持ちでリーシャに問いかける、リーシャも何の冗談かと思ったがあまりにも真剣な顔のリリスを見てその笑みを消して口を開く。

「どうして……どうしてそう思うの？」

リーシャは素直な疑問を口にする。

「簡単なことです、その笑みは8年前に……私が大好きな姉さんの元を離れるときに浮かべていた笑顔ですから……」

リリスはそう言って笑みを浮かべる、まるで過去の自分に問いかけるように。

「お姉さんの元を……？」

「はい、だから思ったんです、あなたの笑みの違和感に。」

「そう……だったんだ……」

リリスとリーシャは直感的に感じただろう。“私たちは似ている”と。

だからこそリリスはリーシャの力になりたいと思い彼女に聞く。

「私に……話してはくれませんか？」

まだ知り合って時間は経っていませんが……私はリーシャの力になりたいんです。」

「どうして……そこまで私にしてくれるの……？」

リーシャの疑問は当然である、どうして今知り合ったばかりの他人にここまでしてくれるのかわからなかった。

「リーシャはきつと……イリア・プラティエに救われたのでしょうか？」

「っ！？」

リーシャは驚いた、まさかそこまで自分のことを言い当てられるとは思わなかったからだ。

「当たり前……ですね。」

「でも……それは理由にならないよ、イリアさんに救われたことが、リリスが私の力になりたいということにはならないはず！」

「いえ、なりますよ。なぜなら私もイリア・プラティエに……“姉さん”に救われたのですから。」

「リリスもイリアさんに？……姉さん……？」

「はい、改めて名乗ります。  
私の名前はリリス、リリス・プラティエです。イリア・プラティエの……妹です。」

## 10話「儂い笑みを浮かべる少女」（後書き）

リーシャは敬語がメインな気がしたけどリリス相手には砕けた話し方に見えました。

ロイドの見せ場をリリスにとられたのはやってしまった感がないわけではない……

5章でリーシャを仲間にするときはリリスメインで行きたいと思っています。

終章をなぜ5章というのかというと、ぶっちゃけそれで終わらすつもりはないです、オリジナルの章を入れてそれを終章にしようかと思っています。

もちろんメインはリリスで進んでいきますので楽しみに！！

## 11話「リリスとリーシャ」

「リリス、リリス・プラティエです……イリア・プラティエの妹です。」

「イリアさんの……妹……？」

リーシャは驚いたであろう、イリアに妹がいたという話を聞いたことがなかったからだ。  
だが不思議とそれが嘘とは思わなかった、心当たりがあったのだ。

「ふふ、いきなりこんなこと言われても信じられませんか？」

リリスが力のない笑みで言う、しかし返ってきた言葉はリリスには予想だにしないものだった。

「いいえ、信じるよ。」

「えっ？」

おそらくイリアは誰にもリリスのことを言っていないだろう、故にアルカンシエルの中でも知ってる人はいない、ならばなぜリーシャは

信じてくれるのか。リリスはそれが気になり聞いた。

「……どうして……信じてくれるんですか？」

「うん、イリアさんはいつも舞台の練習は真剣そのもの。  
見に来てくれるお客さんたちを満足させられるように絶対に手を抜  
かないんだ。」

「……昔から変わってないですね、姉さんは……」

「うん……でもね、いつも練習が終わったあとよく一人で夜空を見  
てるんだ……すこし悲しそうな表情で。」

「夜空を……ですか……」

リリスは昔から夜空を眺めるのが好きだった、それはイリアも同じ  
こと。

昔、リリスがまだイリアの元にいたときはよく二人で夜空を眺めな  
がら話をするのが日課だった。

リリスにとっても、イリアにとってもそれはかけがえのない時間だ  
ったのだ。

「それでね……ある時私は聞いたの、イリアさんが夜空に向かって

……誰かの名前を呟いたのを。」

「っ？」

リリスの心臓が素早く鼓動する。

「リリスの名前を聞いたとき……何かが引つかかったの、どこかで聞いたことある名前だって。」

「……それは……」

「うん、その時イリアさんが呟いた子の名前は……リリス、あなたの名前だよ。」

「……あ……あ……」

リリスは気づけば涙を流していた、姉は自分のことをまだ覚えていてくれたことが嬉しかった。

そしてそれと同時に、自分が知らぬ間に姉を苦しめてしまっていたことが許せなかった。

今のリリスにあるのは嬉しさと後悔が半々といったところか。



「……姉さんは……姉さんはまだ私を……覚えていてくれたんですね……」

「うん、そして今もきつと……リリスに会いたいと思ってるよ。」

「そう……ですね、どうやら心の問えはとれたようです。  
リーシャ、ありがとうございます。あなたのおかげで私は前に進め  
そうです。」

そういつて微笑んだリリスの顔はもはや偽りの笑顔ではなかった。  
そこにあつたのは真正銘リリスの心からの笑顔だった、それにつ  
られリーシャも笑顔になる。

「あ……」

「うん？どうしたの？」

「いえ、今のリーシャの笑顔、違和感がありませんでした。  
やっと見せてくれましたね、あなたの本当の笑顔を。」

リリスは今まで見れなかったリーシャの本当の笑みを見て言った。

「……ふふ……リリスには本当に敵わないよ、うん……こんなふうに心から笑ったのは久しぶりかもしれない。」

「そうですか、……ねえリーシャ……私はあなたに会えてよかったと心から思います。」

「どうしたのいきなり……」

「私は今あなたに救われた気がします、だから……リーシャのことも……聞かせてはくれませんか？」

リリスは確かに今この場でリーシャに救われた、それはリリスの嘘偽りない思いである。  
もしリーシャの話を聞かなかつたら過去を吹っ切れなかつただろうから。

「……うん……私のこと……聞いてくれるかな？  
不思議だけど、リリスには聞いてほしいと思ってる自分がいるの。  
私が今まで誰にも話すことができなかったことを……」

リーシャにあるのは不安だけなのかもしれない。  
今から話すことは彼女が誰にも話したことがないことだからだ。  
リリスはおそらくリーシャのその気持ちを直感的に感じた、だからリリスは優しい口調でリーシャに問いかける。

「聞かせてください、リーシャのことを。さっきも言いましたけど、私はリーシャの力になりたいんです。」

「ふふ、ありがとうリリス。」

「そうだね、まずは……リリスは 銀 を知ってる？」

「はい、たしか東方人街伝説の暗殺者と言われている人ですよね。」

リリスの言った通り 銀 は東方人街伝説の凶手として恐れられている人物である。  
その正体は不死身だの不老不死だの言われているが詳しく知っているものはいない。

「うん、リリスの言うとおり……そして……」

リーシャは一呼吸置いて言う。

「銀の正体は……“私”なの。」

リリスは目を見開く、銀は裏の世界ではとても有名だ、その人物が目の中の少女だというのだから驚くのは必然である。

「そう……でしたか……リーシャがあ……」

「うん、やっぱり驚いちゃったかな。」

「はい、でも不思議とそこまで驚きはしませんでした。なぜかはわかりませんが。」

たしかにリリースは目を見開いて驚いた、しかしそこまで驚愕なことではなかったのだ、リリースの中では。

「ふふ……あ、月……」

「そうですね、暗くなったのに気付かなかったなんて……」

二人はかなり話し込んだのだろう、すでに時計は18時になるといったところだ。

「きれいな満月ですね……そういえばリーシャは 月の姫 を演じていたんですね？これもリーシャの力でしょうか。」

リリスは笑いながら言う。

「ふふ……」

月は、光にして影……

多分それは、私という存在が月に似ているからだと思っの。」

リーシャはも笑いながら話す、リーシャの話は続く。

「本来は陽のあたる場所に出てくるはずのなかった存在……」

「でもリーシャは、姉さんに出会って光を掴むことができたはずで  
す……それは確かでしょう?」

「うん、イリアさんに出会い私は変わることができた、これは否定  
しないよ。」

「だけど私は……私という存在を作った流れは深く底知れないもの  
がある。」

銀 という一子相伝の流れ……父から受け継いだ密やかな道は。」

「なるほど…… 銀 は家系のようなものだったのですね、だから  
不死身とも不老不死とも言われた。正体を知らなければそう言われ  
ても不思議ではありませんね。」

リリースは一つの 銀 についての謎が解けた、不老不死や不死身と言われているような秘密があるのかと思ったが家系で受け継がれているというのなら納得である。

「リーシャが 銀 ということはわかりました……よろしければ……クロスベルに来るまでのあなたのことを聞かせてはくれませんか？私の知らない、リーシャ・マオを。」

リリースの問いにリーシャは迷わずに答える。

「うん。」

リリースは瞳を閉じて……ゆっくりと語り出す。

「気づいた時には私は父と共に在った。」

・  
・  
・  
・  
・

「母の記憶はないかな。」

多分、 銀 の道を私に受け継がせるために父が遠ざけたのだと思うの。」

「だけど私にとってはそれが普通で……過酷な鍛錬も、暗器や符術の修練も淡々とこなしていただけだった。各地を転々としながら、日曜学校に通い、人と接する術もそこで得た。」

「父は厳しくもなく優しくもなく、ただひたすら教えるだけ……それというのも、銀として受け継ぐことが膨大すぎたからかな。それは代々の銀の記憶……どのような状況でどんな工作を行い、どんな標的をどのように仕留めたか……時代を通して同じ存在であるため、その全てのあらましを受け継ぐ必要があったの。」

「全てを受け継いだ時……私は銀 そのものになった。といつても、父が存命である限りは銀 になることはないよ。」

銀 はただ一人……それは変わることがないから。しばらくの間、父の帰りを待ちながら穏やかに過ごす日々が続いた。そして、父が帰ってきたらいつ 銀 を継いでも問題ないように仕事のあらましを教えてもらう……」

「既に表の顔は持っていたけれどそれが私にとっては世界の全てだった。」

「その世界が崩れたのは父が不治の病に倒れてから……代々の銀の中でも卓越した力を持った父だったけど……病魔からは逃れられなかった。」

「さりとて抗うこともせず、延命のための手術も受けず……ある日私を呼んでこう言ったの。」

自分を殺して 銀 を継ぐようにと。」

「できなかった。

およそ、父の言うことに逆らうことのなかった私だけどそれだけでは何故かで出来なかった。

……私は初めて恐くなった。

あれだけ父が丹念に仕上げた 私 が出来損ないだったのではないかと。

死にゆく父を失望させたのではないかと。

……懊悩する私に父はふと苦笑して言ったんだ。

『それもまたお前だ』 『お前の銀はお前が決めるがいい』……そして一月後、父は亡くなった。」

「そして私は 銀 になった。

父の持っていたコネクションを継ぎ、黒衣と内功で体系を誤魔化し

……父の腕には及ばなかったけど滞りなく仕事を再開できた。

『お前の銀はお前が決めるがいい』

父の言葉の意味もわからぬままただ淡々と流されるようにして……」

「そして2年が過ぎ、私は黒月と長期契約を結んだ。

カルバードの西端……貿易都市クロスベルの覇権奪取に協力するという契約を。」

「クロスベルに到着した私は戦いに備え、街の下見をする最中、歓楽街でとある劇場に入った。

そこでは丁度、公開練習というものが行われていて……そこから先



はリリスの知っている通りかな。」

・  
・  
・  
・  
・

「……そうでしたか……その時に姉さんに目を付けられたというわけですね。」

「ふふ、最初は理由をつけて何とか入団を断ろうとしたんだけど……でもイリアさんは凄く強引で……とうとう根負けして入ることになったの。」

「（ふふ、姉さんもほんとに相変わらずですね）」

「体力と偽装には自信があったから、いい隠れ家になると思ったかな。」

「……予想以上に練習がハードで 銀 との両立が大変だったよ。」

「ふふ……ありがとうございます、リーシャ。聞かせてくれて嬉しかったです。」

リリスは嬉しかった、自分のことを信頼してここまで話してくれたのだから。

「ふふ、聞いていて面白い話ではなかったと思うけど……でもこれが……父と祖先から私に受け継がれた“道”……アルカンシエルという光を手に入れたとしても……その“道”を完全に捨てることは多分に私には出来ないと思う。」

「そうですか……」

リリスは何かを思うようにリーシャに言う。

「お前の銀はお前が決めるがいい」

「……………え……………」

「……………銀は全てを受け継ぐ。」

リリスの言葉は続く。

「アルカンシエルという光をあなたが見出してしまった以上……銀もまた、光という側面を受け入れざるを得ないのではないでしょうか?」

「そ、それは……」

「どんなものも時代が変われば在り方も変わります……いえ、変わらざるを得ないんですよ。」

「そうやって人の歴史は受け継がれ、前に進んでいきます。」

「おそらく、そういったことも含めてお父様は言いたかったのではないのでしょうか？」

「……………」

「あなたの行為が許されることではないのかも知れませんが……」

「それでもあなたは、あなたの 銀 を目指せばいいと思いますよ。」

「あるいはここで 銀 という存在を完全に断ち切るというのも一つの道かもしれません。」

「そうだったとしても多分ですが、お父様は気にしないのではないのでしょうか？」

「リスは最高の笑みでリーシャに言う。」

「『それもお前だ』って笑って。」

「……………あ……………」

「…………いいお父様ではないですか。  
普通の家族とはすこし違いますがちゃんとリーシャを愛していた…  
…私はそんな風に思います。」

「…………お父…………さん……………」

リリスの言葉がリーシャの心に染み渡る。

「どう…………して…………  
お父さんが亡くなった時も…………こんな…………  
…………涙なんて…………ぜんぜん零れなかったのに……………」

リーシャの目から涙が零れる、ようやく何かから解放されたように。

「多分ですけど、姉さんたちとの日々であなたは変わったのだと思います。

これから先、あなたがどんな道を進むか分かりませんが…………私でよければ、お父様の代わりにあなたのことを見守らせてください。  
光を掴んだあなたが、どう変わっていくのかが見たいですから。  
あ！もちろん私のことも見てほしいです、私ももう、迷いませんから！」

リリスの眼は強い輝きを持っていた、もう迷わない。  
姉さんも守って見せるし、何よりリーシャのことも見守っていく。

リリスのそんな思いがリーシャを包む。

ーギョッー

「リ……リリス……」

「あなたはもう一人じゃありません。

姉さんもいるし私だっています、必要があるなら頼ってください。  
必ず……力になりますから。」

リーシャのリリスを抱きしめる腕に力が入る。

「リリス、少し胸を借りていいかな？」

「どうぞ、リーシャがスッキリするまでずっとこうしていますから。」

「ありがとう……リリス……」

今このときリリスとリーシャは本当に心の通った親友へとなった。

いや、もしかしたら二人は親友以上の……固い絆で結ばれたのかも  
しれない。

## 11話「リリスとリーシャ」（後書き）

ふう、長かった……

ほぼ終章のロイドのセリフをとりましたがいかがでしたでしょうか。

このまま行くとリーシャはイリアの元を離れないんじゃないかな？とか思うかもしれませんがすでに構造は決まっておりますので期待してください。

というか原作崩壊するかもしれないですけど……まあちょっとだけ変わるかな。

あとなんかガールズラブぽい終わりになってしまいました但那がそんなことはありません。二人は親友です、ただほかの人より仲が良すぎる感じが……」

## 12話「姉妹」

歓楽街のベンチに座っている2人がいた。

「ねえリリス、決心はついた？」

銀としての過去を話した少女、リーシャ・マオと。

「はい、もう大丈夫です。ありがとうございます、リーシャ。」

おなじみ我が主人公リリス・プラティエである。

「ふふ、どういたしまして。」

たぶん今の時間帯だと練習は終わっただくらいかな。」

「もうすぐ夕食時だというのにがんばりますね。」

「そうだね、もうすぐ各国の要人が集まるゼムリア通商会議があるからね。」

アルカンシエルはその要人たちを招いて講演をするからイリアさんも気合が入ってるんだと思う。」



「なるほど、それは気合が入るに決まってますね。  
おそらくその人たちも姉さんなら骨抜きにしようですね、  
もちろんリーシャの演技もですけど。」

「ふふ、でも私はまだただけどイリアさんならそうなくてもおかしくないかな。」

2人してイリア・プラティエを絶賛しまくりである。

「しかし……ゼムリア通商会議ですか、おそらく赤い星座が動きま  
すね。黒月もでしょうけど。」

「そうだね……私もたぶん 銀 として黒月に協力しないとだから  
……」

そうなのだ、リーシャは黒月と契約を結んでいるため赤い星座など  
が動き黒月も動くことになれば否応なくリーシャも戦うことになる。  
そこでリリースは気になることができたので聞く。

「でもそれだと公演はどうするのですか？」

「ああそれは大丈夫だよ、講演のある日は 銀 の仕事は空けてあ

るから。」

「なるほど……でもそれだといひ方は悪いかもしれませんがバレル可能性が高いのではないですか？もしかしたらすでに黒月の幹部あたりなら気づいていてもおかしくありません。」

リリスの言うことは正しい、もし 銀 が仕事を断る日がアルカンシエルの公演日とかぶっていることが知られてしまえば確実にアルカンシエルの関係者だとわかってしまう。

なにより恐ろしいのは正体をネタに何をされるかわからないことだ。

「うん……たぶんだけど……ツアオさん……黒月の人なんだけどね、その人はたぶん私の正体に気づいてると思う……」

「そうですか……もしリーシャの正体を餌に脅しでもしてくるものなら私は黙っていませんよ。OHANASHIしなければいけませんね……」

「ふふ、リリスがその気になったら黒月も簡単に黙っちゃいそうだね。」

二人そろってそんな会話をする、暗い話題はどこへやらである。

「さて、そろそろ行こうリリース。」

「はい、ドキドキしますね。」

二人はアルカンシエルの扉をくぐり中へと入っていった。

リリース    s i d e

受付のほうも変わってないですね、懐かしいです。

「……誰もいないですね。」

受付のほうにはいつも誰かいた気がするのですが今はいませんね。

「きっと舞台のほうかな、講演に向けて団長さんといろいろ話してるんだと思う。」

「そうですね……この扉の向こうに姉さんがいるんですね……」

「そうだよ、イリアさんきつとすごく驚くと思うな。」

ううゝゝ、すごく緊張します。

怒られてしまっただろうか、8年も離れていましたし……あうゝゝ。

「……………」

「リリース？」

「はっ！すみません、すこし思考の海に落ちてたようです。」

「いけません、しっかりしないと。久しぶりに姉さんに会えるんですから……！」

「ふふ、大丈夫。私も傍にいるからね。」

「ありがとうリーシャ………では、いきましよう。」

「うん。」

――ガチャ――

そして私は舞台への扉を開けて足を踏み入れた。

リリース    s i d e    e n d

イリア    s i d e

こんばんわ、イリアよ。

私は今公演に向けて団長達と打ち合わせをしているわ。

「もうすこしここを大きく見せたいのだけどどうかしら？」

「ふむ、できなくはないかもしれないが……間に合うかね。」

「大丈夫よ、私がしっかり見るからいけるわきつと。」

「すごい自信だよな、でもなぜか実現できそうだと思えるところがすごいところかな。」

「できそうじゃないの、やるのよシュリ。」

「わかってるよ。」

そうよ、みんながんばってくれるからきつといいものができるはず。

今までのどの講演をも超える最高の舞台が。

そういつて私が指示を出そうとしたとき入口の扉が開いた。

ーガチャーー

入ってきたのはリーシャと……フードをかぶっていて顔が見えないけど誰かしら……

「リーシャ姉どうしたんだ？今日はリーシャ姉の練習は終わったはずだけ。」

「そうだな、リーシャ君どうしたんだね？それにその子は……」

やっぱりあの後ろの子が気になるのね、ほんとに誰かしら……でも妙な感覚ね、本能的にあの子のことを知ってる気がするわ。

「はい、特に用事はないんですけど。  
彼女がイリアさんに用があるんです、話を聞いてあげてくれませんか？」

私に？ファンかしら……そうね、話を聞くくらいならいいかしらね。

「わかったわ……それで、私に用ってなにかしら？」

「……………」

喋らないわね……人見知りするタイプなのかしら……

「ほら、大丈夫だから。しっかり！」

リーシャがフードの子に小声でなにか言ってるわね、ほんとに誰なのかしら……

……あら、ようやく喋る気になったみたいね。

「……………あ……あの！」

えっ？今の声………忘れるわけがない、8年前と変わらぬ声………も

しかしてこの子は！

イリア    s i d e    e n d

リリス    s i d e

「……………あ……………あの！……………」

声が出ないです……………緊張しすぎて……………どうしよう、とりあえず  
なにか言わないと……………

私が声を出そうとしたとき先に沈黙を破ったのは姉さんでした。

「リリス……………」

「えっ？」

「リリス……………なの……………？」

あ、ダメですもうダメです、名前を呼ばただけで涙が出てきました。  
うまく喋れないですよもう……………



「……………うあ……………」

「ねえ、顔を見せてくれないかしら。あなたの顔を私に見せて。」

もう私は迷わなかった、そう言われた瞬間自分がかぶっていたフードを取った。

「あ……………ああ……………」

ダメですよ姉さん、姉さんが泣いたら私……………止まらなくなっちゃいますよ……………

「ねえ……………さん……………わた……………し……………」

私が喋ろうとした瞬間……………

「リリースー!!」

ーガバッー

「……………」

私は抱きしめられていた。

リリース side end

## 12話「姉妹」(後書き)

短いです、次でイリアとリリスの甘々空間を作ります。

それとプロローグで名前しか出なかったあの人も出ます。  
お楽しみに！！

### 13話「はしゃぐ姉と戸惑う妹」

リリース    s i d e

「あの、姉さん？」

「なに？リリース。」

「どうして私は先ほどからずっと姉さんの膝の上に座っているのでしょうか・・・」

そう、今私は姉さんが住んでいるマンションの部屋で姉さんの膝の上にいる。

周りにはリーシャとシュリ、そして私のもう一人の姉な存在のセシルさんがいる。

みんなに視線を移すがみんな苦笑するだけ……私を助けてくれるものはいないのですか！！

……対する姉さんかというと……

「そんなの決まってるじゃない！！リリースが可愛いからよ！！」

「／／ね、姉さん。恥ずかしいですよ……」

「恥ずかしがってるリリスも可愛いわ。」

「／／うゝゝ、セシルさんゝゝ」

「ごめんね、リリスちゃん。今のイリアは誰にも止められないわ……」

「そんなゝゝゝ、シュリ！リーシャ！」

「リーシャ姉このお皿どうしようか？」

「えっとね、奥から順に並べてくれる？」

「わかった。」

「なっ！？華麗に無視！？助けてくださいよゝゝゝ」

ほんとに誰か助けてください！あまりの恥ずかしさに頭がおかしくなってしまうそうです……。

「リリース〜〜〜」

「ふにゃ〜〜〜〜〜〜／／／」

もう、もう限界です……………

リリース side end

リーシャ side

リリースがイリアさんに抱きしめられて顔を真っ赤にしてる、あ！悲鳴が……………

「リーシャ姉、リリース姉は大丈夫なの？」

「あはは……………きっと大丈夫だと思うよ、それよりもご飯の準備しちやおう。シュリちゃん。」

「うん。」

リリスがイリアさんと再会した後は大変だった。  
何が大変かって二人とも30分くらいずっと抱き合ってたまま泣いて  
て慰めるのが大変だった。

そのあと泣き止んだイリアさんが団長とほかのメンバーにリリスの  
ことを紹介。

イリアさんはリリスのことを止め処なく話すのでみんな顔が引きつ  
つてたのは秘密ね。

まあ8年ぶりに再会できたんだからしょうがないのかも知れないけ  
ど……リリス、ずっと顔真っ赤にしてたね。たしかにあんな紹介さ  
れたら誰でも恥ずかしいよ……あまりに恥ずかしすぎて内容は言え  
ないけど……。

そしてイリアさんの部屋に私とシュリちゃん、イリアさんにリリス  
で来た後にすぐイリアさんはどこかに電話をかけて……少しした  
ら汗を額に浮かべたセシルさんがやってきた。どうやらイリアさん  
とセシルさん、そしてリリスは昔によく3人で遊んだそうだ。

リリスに聞いたらセシルさんにはもう一人の姉のようによくしても  
らったらしい。

セシルさんが来てからが一番大変だった。

イリアさんもセシルさんも両方リリスを自分の膝の上に座らせたが  
ってそれが原因で喧嘩になった。

私はそのときこれは大変なことになったと思い焦ったけどすぐ治ま  
った。簡単なことだ。

リリスが目には涙を貯めさらに上目使いで二人に『お願いです、喧嘩しないでください。』これだけで騒動は治まった……………余談だけどリリス以外の私たちはそのリリスの顔を見たときみんな同じことを思った。「なにこの可愛い生物」と。

そんなこんなで今はみんなでご飯を食べている。

「でもなんか信じられないな、リリス姉が姉な感じがするよ。」

「ちょっとシュリ、それはどういう意味かしら？」

さて、なぜシュリちゃんがリリスのことリリス姉と呼んでいるかというと二人はちょっと話してすぐ仲良くなったからだ。二人ともいい友達ができたと喜んでたっけ。

「ふふ、でも私は今幸せです。またこんな楽しい生活が送れるなんて……………」

ふとリリスがこんなことを言った。

「なにを言ってるのよ、これからずっと送るのよ？この生活を。」



「姉さん、またお世話になってもいいですか？」

「そんなの当たり前、あなたは私の可愛い妹なんだから。」

「／／ありがとうございます、姉さん。」

「ふふ、ほらリリース、あ〜ん。」

「あ、あ〜ん。」

「ーパクッー」

「おいしいです。」

「もうほんとに可愛いわリリース。」

「ちょ／／姉さん！ー！」

「……………甘々な空間……………リリースが可愛いと思ってしまったのは秘密

だからね。

リーシャ    s i d e    e n d

リリース    s i d e

「ふう、大変な目にありました……………」

「ふう、災難だったわねリリースちゃん。」

「あ、セシルさん。」

セシルさんと会えたのも嬉しかったですね。  
昔と同じですごくやさしいのは相変わらず、すべてを包み込むような温かさを持った人です。

「それにしても…………よく帰ってきてくれたわね……………」

「私は……………帰ってきてよかったのでしょうか……………」

私は不安になりそんなことを言った。

その瞬間私はセシルさんに抱きしめられた。

「セシル……さん？」

「あなたが帰ってきてくれたこと、イリアから電話をもらったときほんとにかどうか疑ったわ。

でも今あなたはここにいて、それが今とても嬉しいのよ？私だけじゃなくてイリアももちろんね。」

「……はい……」

「ふふ、もう絶対に勝手にいなくなつてはダメよ？もしいなくなつたら怒るからね。」

「はい、もう絶対にいなくなりません。」

はい、もう絶対に……姉さんたちの傍からいなくなりませんよ。また掴めたこの日常を……必ず守って見せます。

この後姉さんにセシルさんに抱きしめられたことを言ったらなぜかご立腹に。

一緒に風呂入って寝ると言ったら機嫌が直りました……

リリース side end

## 14話「迅雷と赤の戦鬼」

リリス side

久しぶりに姉さんと再会しセシルさんとリーシャ、シュリを交えてご飯を食べた後、すこし時間ができたので私は裏通りのイメルダ店を訪ねることにしました。

「相変わらず怪しさいっぱいの通りですねここは……………」

それも仕方ありません、少し前まではマフィアが根城にしていた建物がありますからね。

「うん？……………あれは……………」

私の前に2人の男女が出てきました。

1人は昨日カジノの前で出会った女の子、シャーリイです。  
もう一人は……………

「なんかランディ兄弛んでたね、今のランディ兄と戦っても楽しくなさそう。」

「フ、そう言うな。」

奴には 闘神 を継いでもらわなければならん、戻ってくれば足りないものは俺が鍛えてやるからな。」

「あはは、そうすれば昔のあのランディ兄に戻るのかな?。」

「ああ、戻ってもらわなければ困るがな。」

まさかここでオルランド親子に遭遇するとは思いませんでした。しかし……あれが 赤の戦鬼 ですか……威圧感がひしひしと伝わってきます。

「……触らぬ物になんとかです、さっさと行きましょう。」

でも思った通り……シャーリイに見つかり声を掛けられてしまいました。

「あはは……あれ?……リリース?。」

……恨みますよ、運命さん。

「……昨日ぶりですね、シャーリイ。」

「うん昨日ぶり、でもこんなところでリリースは何してるの?」

「私はすこしそのイメルダ店に用があって立ち寄ったんですよ。」

「ふうん、そうなんだ。」

私がシャーリイが話していると戦鬼のほうからなにかを感じます。  
軽めですが……殺気ですね……

「……なんですか? 私にはあなたに殺気を当てられる覚えはないのですか?」

「ほう、今の殺気に気づくか……シャーリイ、この娘がお前の言っていたリリースか?」

「うん、そうだよ。」

「どうかなお父さん、リリース……強いでしょ?」

「……ああ、そうだな。おそらく……俺でも戦えばタダでは済まないだろう。」

過大評価しすぎ………とりたいところですが私は負けるつもりはありません、あなた方がこのクロスベルに害するというなら私は…

………

「いきなりそんな評価されても困るのですが………そういえばあなたには名乗っていませんでしたね。

………リリース・プラティエです。よろしくお願いします。」

「シグムント・オルランドだ………だがお前の眼は俺を知っていると云っているようだか？」

「っ！？驚きました、そこまでわかるのですか………」

これは素直に驚きました、眼を見て相手のことがわかる………ですか。単純な人なら私も大抵何を考えているかはわかりますが………表情は崩してないはずなんですけどね。

「まあ慣れのようなものだ、戦場に居続ければ嫌でもわかるようになる。」

「なるほど、さすがは最強の獵兵团　赤い星座　の副団長ですね。」



「フ、しかしお前の実力を認めたのは本当だ。  
さすがは最強の執行者候補 迅雷 ということが。」

まさかここでその名を聞くことになるとは思いませんでした、やはりつながりがあるんですね。

「やはりあちらとつながりがあるんですね……………」

「フ、さあな。

だが仮に奴らと知り合いでなくとも 迅雷 の名は有名だ、遊撃士あたりなら大抵のやつは知ってるだろう。」

そこまで有名なのは知りませんでしたね、元々迅雷の名前を付けたのは使徒の二柱です。あの人……今度あつたらしっかりOHANA SHIしないと……………。

その使徒というと……

「っ……！」

「うん？どうしました？ 深淵」

「いえ、なんでもないわ。ただリリスのお話というワードが聞こえただけよ……」

「……………知りませんよ私は、あなたが知らないところで彼女の迷惑になることでもしたのではないのですか？」

「覚えがないけれどおそらく……………そうなのかしら……………たしかカンパネルラがトラウマになっていたわね……………」

「そういえばそうでしたね、カンパネルラの憔悴しきった顔とリリスのスッキリした顔は今でも鮮明に覚えていますよ。」

「……………一度クロスベルに行ってリリスに謝ろうかしら……………」

「やめてください、これから我々は大切な計画の為に動くのですよ？」

「わかってるわよ、カンパネルラにでも伝えてもらおうかしら。」

「それがいいでしょう、ただ……………」

「ただ……………なんなの？」

「代わりにカンパネルラがお話しを受けるのでは？そうすると恨まれますよ？」

「……………やっぱり謝りに行ったほうがいい気がするわ。」

「せめて計画の後にしてください。」

「……………わかったわ……………」

ひそかに怯えている使徒の二柱であった。

リリス視点へ

うん？今遠くから誰かの怯える声が聞こえた気がします……………誰でしょうか。

「どうした？」

急に黙ったので気になったのかシグムントさんが聞いてきました。

「いえ、なんでもありません……一つ聞いてもいいですか？」

「……………なんだ？」

「あなた方が誰かに雇われてこのクロスベルに来ているのは知っています、その仕事内容は……このクロスベルという街を壊すこと……ですか？」

「フ、悪いがそれは言えんな。」

やはりそうなりますよね、でも……………

「そうですか……………先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

「へえ、名前聞いて思ったけどやっぱりイリアの妹だったんだ。」

「ええ。」

「ふむ、だがそれがなにかあるのか？」

「大いにあります、もし……もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……」

そして私は一呼吸置き……

「私は……あなた方を許さない。」

「……まあ覚えておこうか、そろそろ行くぞシャーリィ。」

「うん……うん。」

「ではまたな 迅雷 よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

「……それじゃあねリリス、また会おうよ。」

「はい、できれば会いたくはありませんがね。」

そう言って2人は暗闇の中へと消えていった。

リリス side end

シグメント side

迅雷 か……………よもやあそこまでとはな。

「恐れたか？シャーリイ。」

横を歩くシャーリイに俺は聞く。

「う……………うん、初めて……………かな。人の殺気にあそこまで恐くなったのは……………」

「そうか。」

たしかにあそこまで濃い殺気を出せる者はそうそういないだろう。  
シャーリイはたしかに 赤い星座 の部隊長で実力はあるが、まだ  
年もそこまで行かぬ子供だ。  
恐れてもしようがないだろうな。

「だが……………戦ってみたいと思っただろう?」

こんなことを聞くのは……………今さらか。

「うん！恐かったけど、シャーリイはリリスと戦いたい、それで銀とも戦いたいかな。」

「フ、そうか。どうやら今回の仕事は退屈せずに済みそうだ。」

「そうだね、早く戦いたいな〜。」

ほんとにな、ランドルフを連れ戻すついでに……………迅雷、お前にも楽しませてもらおうか。

シグメント side end

15話「特務支援課は迅雷を知る」

ロイド side

「ランディ、気にするなよ。」

「ああわかってるさ、心配すんな。」

「ああ……………」

おそらく俺たちの知らないランディの過去が今ランディを苦しめているのだろう。

俺はリーダーとして何もできないのか……………」

「あれは……………リリースじゃないかい？」

ふとワジが前を指差して言う。

「えー！……………ほんとだ、でもなんでリリースがここに？それにあれは……………」



なぜリリスが今こんなところにいるかわからない、そしてそれ以上に……

「お前らあの女の子の知り合いか？……というより……何を話しているんだ？」

「そうだね、普通の子があの人達と話すことはないはずだし……」

二人とも気になってるようだな……

「とりあえず近づいてみよう。」

「おう。」

「ああ。」

俺たちはリリス達に近づき話が聞こえる位置まで来た。  
先に口を開いたのはリリスだ。

「そうですか……先ほど名乗った通り私の名はリリス・プラティエ、イリア・プラティエの妹です。」

なっ！？イリアさんの妹だって？…………聞いたことはなかったけどこれは驚いたな。

「おいおいマジかよ…………イリアさんに妹がいたなんて聞いたことないぞ。」

「そうだね、これは後で彼女にいろいろ聞きたいことかな。」

「そうだな、でも…………リリスが言っていた 太陽 のようなお姉さんってイリアさんのことだったんだな。」

「ああそういえば言ってたね、なるほど。」

リリス達の話は進んでいく。

「大いにあります、もし…………もし姉さんや私の大切な友人たちを傷つけたら……………」

空気が痛いのがわかる…………これがあのリリスなのか？

「私は…………あなた方を許さない。」

「「「!?」」」

リリスの静かなその声は確かに濃密な殺気を纏っていた。

「この殺気は……ほんとにあの子のなのか？」

「……だろうね、でもここまで濃厚なもの……」

やっぱり二人とも思うことは一緒か……話が終わったな。

「ではまたな 迅雷 よ、次に見えるのを楽しみにしているぞ。」

迅雷？聞いたことがないな、リリスのことなのか。

「なあランディ、ワジ。 迅雷 って聞いたことあるか？」

「いや、俺は初耳だな。」

「………僕もないね。」

「そうか……」

二人も聞いたことがないか……

「おっと、リリースって子も行っちゃつぞ？どつするんだ？」

「とりあえず行くぞ、聞きたいこともあるし……」

俺たちはリリースのもとに行った。

ロイド    s i d e    e n d

リリース    s i d e

ふう、話し込みましたね。

さっさと用事と済ませて帰らないと姉さんが怒りそうです……

「イメルダ店はあ s 「リリース」！」「？」

「あなた方は……ロイドさんとワジさんに……えっと……」

「俺と君は初めてだな、ランディ・オルランドだ。よろしくな。」

なるほど、赤い星座の……

「初めまして、リリース……大方さっきの話は聞いていましたね？  
気配がするとは思ってましたので。」

「っ！？気づいていたのか……」

驚いていますね、まあ無理もありませんか……

「はい……改めましてリリース・プラティエです、イリア姉さんの妹です。」

「あ……ああ……」

「ふふ、そんなに困惑しないでください。

こうして名乗ったのは理由があるのですよ。」

「理由？」

ワジさんが聞いてきました。

「ロイドさんは言ってくれましたね？早いうちに姉に会った方がいいと。」

「ああ、マインツ山道で会った時だな。」

「私自身悩んでいたんですが、この街でできた私の大切な親友のおかげで私は姉さんに会うことができました。」

何度思い出しても忘れることはできません、リーシャにはほんとに感謝しています。

「そうか、イリアさんに妹がいたつてのは驚いたけど……リリース、今幸せなんだな？」

そんなの……そんなの当たり前ですよ。

「はい、私は今とても幸せですよ。」

「そうか……………それでリリース、もう一つ聞きたいことがあるんだ。」

聞きたいこと……………話からすると 迅雷 についてですかね。

「さっき 迅雷 という言葉が聞こえたんだけど……………あれはリリースのことなのか？」

やっぱりですか……………此度の計画に結社が関わってくるなら隠すわけにもいきませんね……………

「……………はい、その 迅雷 という名は私の……………身喰らう蛇 執行者としての名です。」

「……………?」

「……………」

ロイドさんとランディさんは驚いています、ワジさんは驚いていませんね……………

「驚きましたか？」

「あ……ああ……まさかここで結社の名前が出るとは思わなかったけどな。」

「そうだな、エステルちゃんたちに聞いて以来だったからなあ。」

あの人たちに関わっていればやはり知っていますよね。

「一つ誤解のないように言えますね、たしかに私の 迅雷 の名は結社での二つ名です。ですが私はあくまで執行者候補だったというだけで結社の一員というわけではありません。」

アリアさんに誘われはしましたがそれだけです、私は結社の一員ではないのですから。

「そうだったのか……」

「はい……おっと、思わず話し込んでしまいました。」

「そうだな……悪かったな、時間とって。」



「いえ、これですこしは私に関してわかっていただけたと思うので私としては有意義な時間でしたよ、今度またみなさんでアルカンシエルに来てください。しっかりおもてなしますよ?」

「はは、それは楽しみだな、イリアさんやリーシャちゃんにも会える、なおかつ今日知り合った美少女のリリスちゃんにも会えるなんて絶対行くしかねえな。」

「美少女って／＼／」

「ああ悪いリリス、ランディはこついうやつだから。」

「そうだね、いつか刺されないように気を付けたほうがいいよ?」

「おいワジ、それは俺じゃなくてロイドだろ?」

「フフ、それもそうか。」

「おいおい、何のことだよ?」

なるほど、かなり鈍感とは思っていましたが本当のようですね……

「「「はあ……………」」」

「なんで溜息をつくんだよ！てかりリスも！？」

「ふふ、ごめんなさい。」

では私はそろそろ用事を済ませたいのでお暇させていただきますね。

」

「ああ、時間とらせて悪かったな。」

「いえ、ではみなさんまた。」

「またな。」

「また会いに行くぜ、リスちゃん。」

「また会おう。」

ほんとに賑やかな人達ですね……………ついに知られちゃいましたか、

私の秘密。

でも……………あのことに比べたらこの程度のことなんてどうでもいいこと……………ですね。

「いつかは知られてしまうのでしょうか、そうになったら私は……………彼らの元に……………姉さんの傍にいられるのでしょうか……………」。

はあ……………今考えても仕方ないですね……………

「今はこの生活を守ることだけを考えましょう、それが今私にできる唯一のことです、そうですね?。」

このリリスの問いかけは誰に対するものなのだろうか。  
だが微かにリリスの首元にかけてあるルシフェリオンが赤く輝いたのだった。

リリス    s i d e    e n d

## 16話「明かされる過去」

リリース side

いけません、思った以上に遅くなってしまいました。  
セシルさんたちが帰ってからだいぶ経ちますね、姉さん怒ってるで  
しょうか……

「えっと……ただいま帰りました……姉さん……」

恐る恐る私は声をかけます。

「……遅かったじゃない、リリース。」

「……怒ってますか？姉さん……」

「……別に怒ってないわよ？リリースの帰りが遅すぎるとか言ってる  
ってないから安心していいわ……」

「……怒ってますよね？完全に……」

「えっと……ごめんなさい姉さん、なんでも言つこと聞くので許してください。」

「……ほんとになんでもいいのね?」

「え……ええ。」

今姉さんの眼がピカンと光った気がします。

……あれ?でもなぜか顔が真剣ですね……一体何を言われるのでしょうか……

「それじゃあねリリース、一つだけ教えてほしいの……」

「教えてほしいこと?なんでしょうか?」

結社のこと?それとも旅をしていた時のことでしょうか……

「……私の所に来る前……リリースはどこにいたの……?」

「……えっ……」

何を……言ってるんですか？姉さんは……

「私があなたを保護する前、リリースはどこで何をしていたの？」

真剣に私に問いかける姉さん、いつか聞かれるとは思ってましたがこんなにはやく聞かれるとは……

「それを聞いて……どうするつもりですか？」

「別にどうもしないわ……ただ一つだけ8年前にあなたに言えなかったことがあるのよ。」

「私に……言えなかったこと？」

なんでしょうか、思い当たることがないです……

「ええ、あなたに言えなかったこと……それはね。」

ふざける空気ではないですね……でも、一体……

「リリースはいつまで……一人で背負うの？」

「っ!？」

「リリースがどんなものを背負ってるのか私は知らない、でもね……  
あなたが一人で抱え込んでいるのを見るのはもう嫌なのよ!」

「……あ……」

「私は……リリースが大好きよ?たとえ血がなくなっていなくても……  
私のたった一人の……可愛い妹なのよ?」

「あ……あ……」

「8年前私は後悔したわ、私がリリースのことをもつとしつかり見れていればリリースはいなくならなかったのかもしれないって……」

「ち……ちが……」

ダメです、声が出ないですよ……

「ねえリリース……もう一度言っわ、私はあなたが大好き……あ

あなたの苦しみを分かち合ってあげたい……………」

「ねえ…………さん……………」

「無理に話してくれ……………とは言わないわ、リリースの心の整理が  
いたときに話してくれれば……………私はそれでいいから。」

姉さんはやさしすぎますよ、こんな私のためにそこまでしなくても  
……………

「ほんとに……………姉さんには敵わないですよ……………」

「リリース……………」

「お話しします……………私のことを……………でもその前に……………」

「どうしたの……………リリース。」

「盗み聞きとは感心しないですよ?……………リーシャ。」

「えっ?」



やっぱり驚いていますね、いつもの姉さんならわかったとは思いますが、今日は仕方ないですか……

「……………ごめんなさい……………その……………」

リーシャがとても暗い表情をしていますね。

「リーシャ……………あなた……………帰ったんじゃ……………」

「すみませんイリアさん、忘れ物をしてしまって……………それで……………入ろうとしたら……………話し声が聞こえて。」

「そうだったの……………」

たしかにあんな話をしていたら聞いてしまいますか……………

「リーシャも……………私の話を聞きたいですか？」

「……………リリースはいいの？イリアさんも……………」

「私は……構いません、姉さんはどうですか？」

「リリスがいいというなら私も構わないわ。」

「わかりました……リーシャも聞いていってください。  
お二人だからこそ……私も話してもいいと思ったのかもしれませんが。」

これは私の正直な気持ちです……でも……不安です。  
私はこの二人に……大好きな二人に拒絶されてしまいそうで……

「リリス、私はずっとあなたの傍にいます、これだけは忘れないでね。」

「姉さん……」

「私もだよ？リリス、ずっと……あなたを見守っていくって約束したから。」

「リーシャ……」

私は…… 幸せものですね…… こんな素敵な人達に知り合うことができたのですから。

「わかりました…… それではお話ししますね……」

「ええ。」

「……………」

さてまずはなにを話しましょうかね……

「まず最初に…… リリスという私の名前は…… 私がつけたものです。」

「どういふこと……?」

姉さんが聞いてきます。

「私に名前はありませんでした…… いえ、一つだけ…… ずっと呼ばれていた名前はありましたね。」

「ずっと……呼ばれていた名前……」

リーシャも聞いてきます。

「はい……被検体157番……これが……私の呼ばれていた名です。」

リリース side end

## 16話「明かされる過去」(後書き)

あと1話か2話で2章に入ります。

## 17話「過去秘密、そして星光の殲滅者」

「被検体157番、これが私がずっと呼ばれていた名前です。」

リリスの口から聞かされた過去の自分の名前、しかしそれはとても人の名前と呼べるものではなかった。

「「っ!？」」

衝撃の発言にイリアとリーシャは驚く、同時に二人の脳内には考えたくない、けれどもそう思わずにはいられないものが思い浮かんだ。

「きっと……二人の考えてる通りですよ。」

「そ……そんな……」

「……………」

イリアは信じたくなかった、だがイリアの頭に浮かんだのは自分がリリスを保護した時のことだ。  
リリスは表に出るような服ではなくなぜそんなものと思ってしま  
うほどボロボロな服を着ていた。

よく見てみればよく病院で患者が来ているような服にそっくりだったようでもある。

その時の事を思い出し、考えたくないことが現実味を増してきたのだ。

片やリーシャは表情を崩さずあまり驚いてないかのように見える。

しかしそれは嘘である、ただ言葉が出ないのだ。

もし自分の考えていることが真実ならばリリースの過去は自分が想像した以上に残酷なものになる。

その真実を聞きたくない自分と、リリースを見守ると誓った自分が相反する。

「D・G教団を……………知っていますね……………？」

「え……………ええ、少し前にキアちゃんを攫おうとした連中のことよね？ 弟君達が街中を逃げてるのを私とリーシャは見たもの。」

「はい、たしか警備隊の人達が薬物で操られていたとも聞きました。」

D・G教団幹部司祭のヨアヒムが起こした事件である。

彼が作り出した薬物 グノース を使い、警備隊を操りキアを攫おうとしたのだ。

しかし、特務支援課と遊撃士によりヨアヒムは倒され事件は解決した。

これが今に語られる教団事件である。

「はい、その事件のことは私も知ってますのでおそらく間違いないでしょう。」

リリースも教団事件のことはすでに調べていた。

クロスベルで起こった出来事はたいていリリースは調べている。

それが教団のこととなるとなおさらだ、警察が解決しなければ自分が赴くと考えていたのだから。

「私は……………」

リリースは一呼吸置き

「私は……………姉さんに拾われる前……………D・G教団にいたんです……………」

「……………」

二人の考えが現実になった、リリースの言葉によって。

「……………そこで私に行われていた、彼らでいう儀式は二つ……………」



「……」

イリアとリーシャのどちらが言葉を発したかはわからない。

「一つは他の子供たちとあまり変わらない……多くの薬による薬物投与。」

薬物投与だけでも充分に下種な行為、だがもう一つあるとリリスは言った。

重たい空気の中、リリスが続きを話す。

「もう一つは……これはおそらく公にはされていないことです、警察でも遊撃士でもおそらく知っているものはいないでしょう。」

そうなのだ、それに関する資料はリリスがすべて逃げるときに処分した。

だから知っているものは誰もいない、すでに調べてあることが警察と遊撃士にとっての真実なのである。

「もう一つは……別の人格の植えつけです……」

「なっ！？そんなことができるわけ……………」

イリアがそんなもの信じられないとばかりにつぶやく。

「はい、常識的に考えてそんなことできるとは思いません、無理矢理に人格を壊すというなら可能ですが。」

「……………なら……………その儀式は失敗……………ということ？」

リーシャが言う。

「……………いえ、成功しています。」

「え……………まさか！？」

イリアが何かに気づいたように言葉に出した。

「姉さんは……………気づいたようですね……………」

「そん……………な……………そんなことって……………」

イリアの目から涙が流れる、自分の考えた最悪の予想がリリスに肯定されたからだ。

「……………」

リーシャはまだ気づいていなかった、そこでリリスが話しを再開する。

「私への人格の植え付けは成功しました……………ふふ、本来の私はこんなに大人しい口調と性格ではありません。  
目上の人にも礼儀を弁えず、口調もひどかったのですよ。」

リリスは昔を思い出してすこし自嘲気味に話す。

「そ……………それじゃ……………今のリリスは……………」

リーシャもついに気づいた。

「はい、今の私は本来の私ではない、作られた人格ということです。」

「あ……………」

リーシャは何も言えなくなってしまった、目の前の自分と年の変わらない少女が作られた存在だというのだから。

「ここで……………私のリリスという名前にたどり着くんです。」

「……………聞かせて……………くれる？」

イリアは声が上手く出てないながらもリリスに聞く。

「はい、私はその儀式のあと……………何度も何度も……………とてつもない破壊衝動に襲われました。  
なんでもいい……………なにかをとてつもなく壊したかったです、  
人でも物でもあらゆるものすべてを……………」

リリスはその瞬間服を脱ぎだした。  
イリアとリーシャは若干顔を赤くするがすぐにその顔は驚愕に染まる。

「そこで私は自分の破壊衝動を抑えるために……………自分を傷つけることにしたんです。」

リリスの胸の下から背中まで数えきれないほどの切り傷がある、おそらく果物ナイフのようなもので切り付けたのであろう。

「姉さん……私は昔一緒にお風呂に入ること何度も拒みましたね、そして入るときはいつもタオルを巻いていた……この傷を見せたくなかったから。」

「っ……………」

イリアは昔何度もリリスをお風呂に一緒に入ろうと誘った、頑なに拒むものだから単なる照れ隠しだと思っていた。だがリリスが時折苦しい表情を浮かべていたのを思い出した、イリアは後悔の念に駆られる。

「この傷を作り衝動を抑える…………でも…………まだ10にも満たない子供がこれを耐えられると思いますか？」

耐えられるわけがない、イリアとリーシャはすぐにそう思った。

「耐えられませんでした、でも私はずっと我慢した……………だけどその時教団の人が私に言ったんです。『今お前が最も親しくしているものを殺せ、そうすればお前をここから出してやる』と。」

「つく！そんなこと………リリース？」

イリアが声を上げようとしたが止まる、なぜならリリースの目から涙が流れていたのだ、なにかを思い出したように。

「私はその言葉を聞いた瞬間頭が真っ白になりました、そして私はその親友を殺したんです。

でも………その時でした、自分がボロボロになりながらその親友……

………リリースはずっと私に声をかけていた。」

「「っ！？」」

「あなたが一番苦しんでるのは知ってる、私はあなたのことが大好きだから。」

「だからあなたに受け取ってほしいの、私の名前を。」

もう殺されてしまったからいけないけど、家族がくれた私の宝物。」

「大好きなあなたに受け取ってほしいの、そしてどうか生きて。」

そうすればきっとあなたを受け止めてくれる大切な存在に会えるわ。」

リリスがリリスに送る言葉。

大切な存在を想い、自らその存在のために命を渡した少女の言葉。

「リリスが死んだあとずっと私は泣きました……でも不思議と私の破壊衝動は起きなくなっただけです、もしかしたら……リリスが私を守ってくれているのかもしれない。」

イリアとリーシャ二人が知ったリリスの名前の秘密。

同時に思った、もう一人のリリスという少女のことを。

「そして私はリリスの名をその身に宿して決意したんです、教団から逃げることを……しかし私は戦いなんてしたことありません、逃げ出そうとしてもすぐ捕まってしまう。」

その時です、私の中に……植えつけた人格の戦いの記憶が流れ込んできたのが。」

「戦いの……記憶？」

「はい、それもそうでしょう。」

私はその人格の人物そのものと言っても過言ではないのですから。」

「……………」

「そして私はその記憶をもとに……私がいた教団のロツジを破壊しました。」

イリアとリーシャは驚く、戦いの記憶というものが流れ込んできたとしても9歳の少女がそんなことできるわけがない、そう思った。

「ふふ、やはり信じられない話ですよね……………ルシフェリオン。」

リリスが首元にかけられた赤い球体、ルシフェリオンの名を呼んだ。その瞬間赤い光に包まれ姿を現したのは魔道杖のようなものだったのだ。

「それは……………杖なのかしら……………リ……………リリス？」

イリアはリリスの首にかけられた赤い球体が形を変えたのに驚いたが、なによりリリスの顔を見た瞬間言葉を失った。

今のリリスは髪の毛が黒から濃い栗色へと変わり、真紅の瞳は陰りのない蒼色へとなっていた。

しかし二人はなによりリリスの目に恐れた、まるで何にも興味を示さない冷酷な瞳に見えたのだ。



「これが……私のその時の姿であり流れ込んできた記憶の持ち主  
……………」

リリスはまるで表情を変えずその蒼色の目で二人を写しながら言う。

「 星光の殲滅者 です。」

## 17話「過去秘密、そして星光の殲滅者」(後書き)

やっとルシフェリオンの装備出せた！

なぜ星光の殲滅者の技が使えるかをこういう形でしてみました。  
タグ欄にほんのすこしなのは入るかもってのはこれですね。

なのはのキャラが入ってくることはありません。  
あくまでリリスが星の記憶を持っているというのと技が使えるという  
ことだけです。あと1話で2章入ります。

## 18話「私はリス」

教団ロッジの入り口から一人の少女が出てきた。

魔道杖のようなものを手に持ち、ボロボロの服に身を包んだ少女だ。

「これで……………すべてを無に……………」

ロッジに杖を構えると少女に赤色の光が集まる。

「集え明星、全てを焼き消す焰となれ……………ルシフェリオン・ブレ  
イカー……！」

少女から放たれる赤色と黒色の混ざったような収束砲がロッジを飲み込み。

煙が晴れたとき残ってるものはなにもなかった。

リス      s i d e

ロッジを破壊した時のことを話したあとに齎されたのは静寂だった。

「怖い……………ですか？」

今の私の話しに言葉を失った二人に声をかける。  
私は異端です、もし二人が拒むなら私は…………

「……………たしかに怖いと思っただわ、でも……………でもリリスが私の妹  
ということに変わりはないわ。」

「え……………」

私には姉さんの言葉が信じられなかった。  
こんな私を見てそんな言葉が出てくるとは思わなかったからだ。

「リリスが話してくれた過去はたしかに壮絶なものだった、でも……  
……………だからこそ私は今リリスの傍にいたいという思いは前よりも強  
くなっただわ。」

「どう……………して……………わた……………し……………は……………」

「気持ち悪い……………なんて言うとも思っただの？だとしたら心外ね、  
リリスは世界で一番可愛い私の妹なのよ？」

もう涙が止まらない、私は作られた存在なのに、人を殺したのに、  
どうして……

「作られた存在だとか人を殺したとか、たしかにリリースにとって  
は忘れることのできないことだと思う……けど、リリースはその殺し  
てしまった親友の為に生きることを決めたんだよね？ならそれは…  
…とても強くて……立派なことだと私は思うよ。」

リリースもどうして……私はそんな存在じゃないのに……

「ねえリリース……私たちはリリースにとって……大切な存在にはな  
れないのかしら？」

「えっ？」

そんなこと…

「私はリリースの全てを受け止めるわ、だって……リリースは……私に  
とって大切な存在なんだもの。」

姉さん、そんなこと言われたら私は……

「私もリリスのことを受け止めるよ、私にとってもリリスは大切な存在で……ずっと傍にいたいと思う親友なんだから。」

姉さんとリーシャの言葉に私は我慢ができなくなった。  
私の蒼色の瞳から涙が落ちる。

「私にとっても……二人は大切な存在です……当たり前じゃないですか、私だって二人のことが好きです。好きで好きでしょうがないくらいに好きです。  
でも……だからこそ怖かった！この話をして二人に拒絶されることが！私は……私は……」

私はすべてを吐き出した、自分の心の中にあつたこと全てを……  
そしてその瞬間

――ガバツ！――

私は二人に抱きしめられていた。

「ふふ、やっと言ってくれたわね、私もリリスが好きよ？大好き。」

「私もだよ、私もリリスが大好き。」

もう涙が我慢できなくなった、だから私は二人に言う。

「姉さんにリーシャ……すこし……服を……汚してしまうかもしれない」

「いいわよ、好きなだけ泣いて。」

「我慢しなくていいから。」

「あ……………あ……………」

私は二人の腕を抱きしめながら声を我慢せずに泣いた。

・ ・ ・  
「もう……………大丈夫です、ありがとうございます。姉さん、リーシャ。」

私は二人から離れた、きっと私の今の顔はとても赤くなっているでしょうね。

「ふふ、私はもうすこし抱きしめていたかったけどね。」

「ね、姉さん／＼／」

「私もだね、リリース可愛かったし。」

「リーシャまで／＼／うゝゝゝ」

二人とも私をからかって楽しんでいますね……………恥ずかしさで顔が熱いです。

「リリース……………この先きつと大変なことはたくさんあると思うの……………そうになったら絶対私たちを頼るのよ？あなたは一人じゃないんだからね。」

先ほどの空気をなくし姉さんは真剣な顔で私に言う。

「そうだよ、ずっと私たちが傍にいるから……………リリースの力になるからね。」



リーシャも真剣な顔で私に言う。

「……………わかりました……………私はもう……………大切な存在を手に入れたいたんですね。」

こんな傍にいたのに私は気づくことができなかった、守ると決意したけどここまで確固たるものではなかった。今では思います、話してよかったと……………心から。

「そうだ！、今日は3人で一緒に寝ない??」

「あ、いいですね。私は賛成です。」

「え、ちよつと二人とも!??」

「なによ、リリースは私たちと一緒に寝るのは嫌なのかしら?」

その言い方は反則ですよ……

「そんなわけありませんよ、わかりました。一緒に寝ましょう／＼」

「ふふ、それじゃリリスが真ん中だね。」

「うう、恥ずかしいですね……姉さん、リーシャ。」

私は二人に向かって人生最高ではないのかと自分で言いたくなってしまう笑顔で言う。

「ありがとう。」

少し時間がたつとそこには安らかに眠るリリスの姿と、その両サイドにお互いリリスの腕を抱きしめながら寄り添って寝るイリアとリーシャの姿があった。

リリス    s i d e    e n d

イリア    s i d e

あの後私たちはベッドに入りリリスはすぐに寝てしまった、きっと疲れたんでしょうね。

リリスが話してくれた過去は確かに壮絶なものだった。

今までリリスがずっと溜めこんでいたのに気づけなかった自分自身にすこし腹がたってしまった。

でもだからこそ……この先私はリリスのことを見守り続けていくわ、もしまた何かを溜めこんだら吐き出すまで問い詰めるまでよ！

「ふふ、おやすみなさい…………私の愛しいリリス。」

あ！そうそう、リリスがあの後私の傍からいなくなって旅をしていた時のことも聞いたわ。

そのときに出てきた戦いを教えてくれたお姉さんのような存在の人にすこしばかり嫉妬してしまったのは内緒よ！！

イリア    s i d e    e n d

リーシャ    s i d e

リリスの話を聞いて私のリリスに対する思いはさらに強くなった。

私がクロスベルに来て誰にも話したことのないことをリリスに聞いてもらい、私を受け入れてくれたリリス。

そして今リリスの過去を聞いて私は新たに思った、リリスを絶対に守っていくって。

私はリリースに救われた、だから今度は私があなたを救う番。  
私にできることがどれくらいあるのかはわからないけど、必ずリリースの力になるから！

「おやすみ……………リリース、私の大好きな人……………」

あ！そうだった、リリースの旅の話を私も聞いた。  
その時の話しに出てきた戦いを教えてくれた人に嫉妬したのは内緒だよ？

リーシャ      s i d e      e n d

く予兆く新たなる日々く      E N D

## 18話「私はリリス」(後書き)

リリスは愛されキャラです。

なので若干百合っぽい表現が出てしまいましたがその辺はスルーだ！  
でもけっこう簡単に終わらせてしまったかも。

早く2章に入りたいという気持ちが入ってしまったかな。

さて2章ではいよいよリリスとシグムントが激突します。  
どういう結末になるのか、ご期待あれ！

## ブローグ

姉さんとリーシャに過去のことを話してから数日が経った。

あのあと私は特務支援課に行ったりしてキーアを含めたみなさんと交流し私の作ったお菓子を食べてもらったりした。みんなに満足してもらいすごく嬉しかった。

その中でみんな私のことを喜んでくれた。きつとロイドさんたちから聞いたのだろう、あれから時々ではあるがアルカンシエルのほうにも顔を出してくれる。

リーシャのお友達サンサンと一緒に服を買いにいたりもしたし、リースさんと一緒に露店巡りなどもした。

リースさんには私の過去を話した、リースさんも私の力になると言ってくれてとても嬉しかった。けどリーシャとリースさんが会ったときお互い火花みたいなのを散らしていたのは何なのだろう。

あと赤い星座のシャーリイと一緒にアイスを食べた。

まさか彼女とアイスの好みが一緒だったのは意外だった、もしかしたら彼女とは気があうかもしれない。

さて通商会議を目前に控えた今日この頃、アルカンシエルは講演に

向けて忙しい。

そして各国の要人が集まるといふことで警察のほうも色々忙しい。  
うだ。

さて、私も準備を進めよう。

必ず何かが起こるはずだから。

## 19話「公演に向けて」

リリース side

みなさんおはようございますリリースです、私は今アルカンシエルの劇場にいます。

講演を間近に控えた姉さんとリーシャのお手伝いをしています。

シユリは残念ながら今回の公演には出ません、でももうすぐシユリが出る舞台も考えていると姉さんが言ってたので近いうちにシユリが出演する舞台も見れそうですね。

さて、そろそろ休憩ですね、タオルと飲み物を持っていきましょう。

「姉さんにリーシャ、お疲れ様です。飲み物とタオルですよ。」

「あら、ありがとうリリース。」

「わざわざ用意してくれたんだ、ありがとうリリース。」

「いいいえ、私にできることはこれくらいしかありませんから。」

私はアルカンシエルの舞台に立って演技なんてそんな大それたこと



できそうにないですし……

「うーん、リリースも舞台に立って踊ってくれるともっといいものができそうなのだけれど……」

「姉さん、何回も言いますけど私には……」

この前からずっと誘われてしまいます、そのたびに断っているのですが姉さんがあまりに残念そうな顔をするのでちょっと複雑です。

「でも私だってリリースと一緒に舞台を踊りたいんだけどな。」

リーシャも私と踊りたいと言ってくれます、本当に嬉しいんですけど……ごめんなさい。

するとそこに。

「二人とも、リリース君が困ってるじゃないか。

まあ……私自身もリリース君、それにシュリ君が加わることで更なる舞台が出来上がるのではないか、と思っているのだがね。」

「団長さんまで!？」

うっ、団長さんにもそのように言われているのは光栄なことなのですが………やっぱりごめんなさい。

「ははは、まあ強要はしないよ。

リリース君がもしやりたいと思ったなら声をかけてくれたまえ。」

「わかりました………満足できる答えは返せないとは思いますがど  
………」

なんか申し訳ないですね………うん？足音が5つ………これは………

「おや………」

団長さんが気づいたようですね

「あら、弟君たちじゃない。」

「どうも、お邪魔しています。」

そうです、現れたのは特務支援課の5人でした。

「皆さん、こんにちわ。」

ふふ、ランディさんもついに復帰されたんですね。」

そういえば姉さんとリーシャも彼らと知り合いでしたね。  
私も挨拶しておきましょうか。」

「みなさん先日ぶりですね、こんにちわ。」

「リリースちゃんこんにちわ、先日のお菓子おいしかったわ、ありがとう。」

「そうですね、ほんとにおいしかったです、ありがとうございました。」

「そう言ってもらえると作った甲斐がありましたよ。」

私は先日特務支援課を訪れる際にお菓子を作って持って行ったのだ。  
キアはもちろんみなさん喜んでくれてうれしかったです。

「いや、それにしてもイリアさんとリーシャちゃんの衣装姿……  
マジで何度見てもイイッスね。」

ふとランディさんが言います、たしかに綺麗ですよ、同性の私が  
らみてもそう思ってしまう。

「ふふ、どうもありがとう。」

「改めて言われると少し恥ずかしいですけど……」

何度も舞台に立っているのに今さら恥ずかしいなんて……

「それに、リリスちゃんも今日は普段と違う服だからいつそう可  
愛いぜ。」

おや、次は私ですか。

嬉しいですけどたしかに間近で言われるとすこし照れちゃいますね。

「ありがとうございます、ランディさん。」

実はこの服、この前買い物に行ったとき買ったんですよ。」

そして私はその場でクルッと回ります。

「あ！白い」「ランディさん？」ひいひい。」

あれ、ランディさんが怖がっています、どうしたのでしょうか。

ランディさんの目線の先にいるのはおそらく私の後ろにいるリーシヤですよ……

私が振り向くと……

「どうしたの？リリース。」

素晴らしい笑顔でした……なにか黒い物が引つ込むようなのが見えたのですが気のせいですかね。

「フフ、確かにランディの視線はいやらしいからね。怒るのもしようがないさ。」

うわ、ワジさん度直球ですね……まあ私もそう思いましたけど。でも誰が怒ったんでしょうか……うーん、謎ですね。

「何だと、ワジ。」

俺はいたって純粋な気持ちで「はいはい、わかったからそのくらいにしてくれるかしら。」……

エリイさんがランディさんの発言を一刀両断……一時の静寂

「あ、あはは……」

ノエルさんの乾いた笑いがまあ私も同じ立場ならそうなります……

「騒がしくてすみません。

ところで、今って練習中だったんですよね？」

「まあね。

明日の夜の舞台に向けて調整していたところよ。」

「ふふ、明日はお客さんがお客さんだけに緊張もしますけど。」

「ああ、まさか各国首脳の方々が観劇にいらしてくれるなんてね。」

やはりリーシャも団長さんも緊張しているようです、私はすこしでもいいものができるようにしっかりお手伝い頑張らなくちゃですね！

「首脳が……」

「そういえば、今朝の対策会議でも議題に挙がっていたわね。」

なるほど、やはり警察のほうでもそのような話になっているのですね。

「フフ、何しろせっかくクロスベル招待するんだ。  
アルカンシエルの舞台は最高の持て成しだろうからね。」

「ま、そう考えると、あつて然るべき趣向ってわけか。」

「でも、確かにそれは緊張しますよね。」

「ええ、他の団員の方たちもどこかしら落ち着かなさそうなんですけど……といっても、イリアさんはいつもと変わらないんですけど。」

「そうですね、だって姉さんは……」

「んー、だっていちいち気にしてもしょうがないじゃない。  
客席に誰が座っていようと、とにかくベストを尽くすだけだし。」

「ほら思った通りです。」

「それが姉さんですよ、全然不安にならないですよ。」

「まったく君は……いつも呆れるほど頼もしいね。  
今度のリニョーアル公演発案といい、その気力には毎度ながら感心するよ。」

団長さんの言うことももつともです。

「リニョーアル公演……」

「そういえば……今度『金の太陽、銀の月』をリニョーアルされる  
んでしたね。」

「ああ、世間では既にもっぱらの噂だね。  
何でも大胆なアレンジが加えられるそうだけど？」

そうですね、街中を歩いているとそういう話をしている人を見かける  
ことがありました。

「ええ、そうなのよ。  
一度完成したものに手を加えるのはある意味、挑戦だったんだけど……  
脚本、演出の観点からもより完成度を高められそうな目処がよ  
うやく付いてね。」



姉さんが部屋で唸ってましたねそういえば、ようやくいいものができそうって言って私を抱きしめてきたのをよく覚えています。

「はい、そして今度の一般公演が終わったら、約1ヶ月その特訓に集中させてもらう予定なんです。

「なるほど……アレンジといっても相当力が入っているみたいですね。」

「はい、イリアさんはリリスの出演も考えているんですが、リリスが頑なに拒むものですから。」

ここでその話題を持ってくるんですが……

「私は舞なんてできませんよ、まあ剣舞ならできなくもないとは思いますが……」

そうですね、一度アリアさんたちと旅をしていた時に暇だったので頭の中に浮かぶリズムに従って踊ってみたのですが、すごくきれいな剣舞と言われました。

「へえーあありリスで剣舞といえばマインツ山道の魔獣と戦った時  
すごかったな。」

「えっ？……あああるときですね。」

そつえばありました、人形工房から帰るときでしたね。

「そうね、あときは魔獣と戦うのを忘れてリスちゃんの戦いに  
魅入ってしまうくらいなもの。」

あまり褒めないで下さいよ、なんか姉さんの目が光った感じがしま  
す。

「へえーリリース、詳しく聞きたいんだけど。」

これは……逃げませんね……

「……わかりました、あとでお見せしますよ……」

「フフ、じゃああとでね。」

「俺達も気になるなそりゃ、まあしかし『金の太陽、銀の月』は、アルカンシエルの舞台の中でも特に完成度が高いつて評判だが……あれがさらによくなるなんて、どんな代物になるか想像できねえなあ。」

そうですね、ランディさんの言うとおりです、私も想像できないですよ……でもきつとすごいものができるのでしょね。

「ああ、本当だな。」

「フフ、舞台に生きていくと決めた以上は、常に最高のものを求めていかないね。」

観に来てくれるお客さんに最高の時間を過ごして貰えるような、素晴らしい舞台を作り上げること……それがアルカンシエルの、あたしたちアーティストの最大の使命なんだから。」

使命……ですか、私には……まだわからないです……

「舞台にかけては右に出る者がいないというか……流石はイリアさんですね。」

当たり前です！舞台において姉さんの右に出る人なんていないですよ！はい。

「うーん、リニョーアル公演が楽しみになってきました!」

「フフ、正式発表が近いうちにあるから待っていてちょうだい。

以前の公演を見てくれた人でも楽しんでもらえる出来になるはずよ。それに配役にちょっとしたサプライズもあるし……きっと驚いて貰えると思うわ。」

ふむ、そんなものがあるのですか……知りませんでした。

「サプライズですか……はは、じゃあ是非それも楽しみにさせてもらいますね。」

「ほんとに楽しみね……ロイド?そろそろ行かないと……」

エリイさんがロイドさんに言います、そうでしたね彼らは仕事でした……

「お、ほんとだ、そろそろ行くとするか。それじゃみなさん失礼しました。」

「ええまたいらっしやい。」

「みなさんまたいらしてください。」

「ええ、また来させてもらいます。」

「リスちゃんもまたね、今度ゆっくりお話ししましょう。」

「その時は私も一緒にしたいですね、お話したいことは私もありますし。」

「はい、その時はお菓子を腕によりをかけて愛情を込めて作るのでまた食べてくださいね。」

「がんばりますよ私は!!」

「あ／／愛情ですか……」

「わかったわ／／楽しみにしてるわね／／」

「うん？二人とも顔が赤いんですけどどうしたのでしょうか……」

「むっ！」

あれ、リーシャがちょっと睨んできます……私なにかしたでしょうか。

姉さんはすこし笑っていますし、ワジさんとランディさんも笑っていますね。

「うん？みんなどうしたんだ？」

「さあ？どうしたのでしょうか……」

「」「似たもの同士……」「」

姉さんとワジさん、ランディさんの声がかぶりました。

「」「？？」

私とロイドさんは二人そろって何のことが最後までわかりませんでした……

それからしばらくして特務支援課のみなさんは仕事に戻り……

「さあーリリス、あなたの剣舞を見せてもらいましょうか。」

あ、忘れてました…………仕方ないですね…………

「あまり期待しないでくださいね？」

そして私は剣舞を披露した後に姉さんとリーシャ、そして団長さんから是非舞台に出てくれと更に言われるようになったのは言つまでもない。

リリス    s i d e    e n d

## 19話「公演に向けて」（後書き）

なんかガールズラブ要素いれてもいいんじゃないかな？とか思ってきた。  
まあやらないですけどね！！

でもすると個人的にヒロインはリーシャとフランは確実かな。  
あとまさかの展開でアリアンロードとマリアベル……は無理がある  
か・w・



## 20話「不安な思い」

リリス side

さてさて、みなさんこんにちわりリスです。

前回姉さんたちに剣舞を披露してなんとか誘いを断りながら時はす  
でにお昼です。

姉さんとリーシャも休憩に入りました、私は何をしてるかって？リ  
ーシャを探しています。

なにか悩んでいたようにも見えたので……

「リーシャは……あ！いました。」

前にリーシャと初めて話したアルカンシエル前のベンチに座ってい  
ました。

「リーシャ、隣座ってもいいですか？」

おそらく通商会議のことでしょうが聞いてみましょう。

リリス side end

リーシャ     s i d e

「はあ。」

ダメだな、さつきから溜息しか出ない。

明日の夜は大事な公演があるから集中しないといけないのに……  
その次の日は銀として黒月に協力しなければならない。  
私が悩んでいるその時だった。

「リーシャ、隣座ってもいいですか？」

私の大切な親友リリースがそこにいた。

「リリース？うん、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

何しに来たんだろう、リリースがこうやって静かに横に来るときは大抵私が悩んでる時だった気がする。

「どうしたの？私になにか用事があったかな？」

私はリリースに聞く。

「はい、用事………というか話をしてみたかったですよ、リーシヤが何か悩んでるように見えたので。」

「……………そっか。」

あはは、やっぱりリリースはすごいな。

よく私を見てくれてる、すごく嬉しい……………でも、私ってそんなにわかりやすいのかな。

「ふふ、なんでわかったのかな？って顔ですね。」

「わかるかな？」

「そうですね、確固たる確信があったわけではありませんが………なぜかリーシヤのことだからわかってしまったんですよ。」

「私の……………ことだから？」

「はい、思えばクロスベルに来て姉さんの次に接しているのはリーシャです。それが大きな理由とは思いますが、何よりリーシャは私にとって大切な人ですからね。」

「え？／／／」

大切な人って………リリスはそんな気持ちで言ってるわけじゃないんだろうけどそんな笑顔でいうなんて反則だよ／／／

「だが………大丈夫ですか？顔が赤いようですけど。」

「な／／／なんでもないよ！／／／」

「？？？わかりました。」

ああダメだ、顔が赤くなってるのが自分でも分かるよ／／／

「それで………やはり悩みがあるんですね？」

さっきとは打って変わって真剣な表情のリリス。

「うん……実はね。」

そして私はリリースに通商会議での銀の仕事を話した。

「なるほど……やはり黒月が動くのですね……」

「うん、だから私も行かなきゃいけないんだ。」

「そうですか、敵は赤い星座………というわけではないですね？」

そこまで調べ上げてるんだリリースは………

「うん、………ねえリリース？どうしてあなたはそんなにたくさん  
ことに詳しいの？」

つい私は気になり聞いてみた。

「え？ああそうですね、たしかに疑問を持たれても不思議ではあり  
ませんね。」

「うん。」

「簡単に言えば私はマインツ山道人形工房のマイスターと知り合いなのですよ、そこから私は定期的に情報を送ってもらっています。」

「人形工房ってあの……………」

なるほど、私もあそこに以前調べるために入ろうとしたが入れなかった。でもそれならリリースがたくさんのことに詳しいことが納得できる。

「はい、マイスター……………ヨルグさんが言っていましたよ？以前東方正人街の暗殺者が潜入しようとしていたって。」

「あはは……………」

すこし恥ずかしいよ……………

「それで……………話は戻しますが、敵は要人を狙うテロリストと見て間違いないですね？」

「うん、おそらくだけど帝国と共和国それぞれ二つのテロリストを

黒月と赤い星座で対処するんだと思うよ。」

でもイレギュラーはつきものだからそうとは限らないけど。

「なるほど、黒月のほうは相手を殺すまではいかないでしょうけどもう一方は……………」

リリスの思ってる通りおそらくそちらは…………

「うん、赤い星座はおそらく……………殺すと思う。」

「……………そうですか。」

リリスが何か考え込んで……………

「ねえリリス、何か危ないことしようとしてる?」

リリスの一瞬ビクッと反応した。

「それはリーシャも同じでしょう……………そうですね、たしかにテロは許される行為ではありませんが殺すこともないでしょう、彼らも

何かの為に戦うのですから。」

たしかにそうだけど……でもそれじゃありリスは。

「でも……そんなことしたらリスは赤い星座と戦うことになるかもしれないよ?」

そうだ、多額のミラをもらって行動を起こすのだから殺すのを阻止するとなるとおそらく戦うことになるのは明白。

「……そうですね、おそらく……赤の戦鬼とも戦うことになるかもしれませんが。」

「っ!?!」

赤の戦鬼　　といえは獵兵団の中じゃ最強と言われてる人だ、そんな人と戦うなんて危険すぎる。

「ダメだよりリス!そんなことしたらリスは!」

ダメだ、リスがある程度強いのはこうしていてもわかる。けど!



「私が死ぬと……そう思いますか？」

「っ……………」

「大丈夫ですよ、私を信じてください。

私は死ぬわけにはいかないんですから、姉さんとリーシャ、そして私を支えてくれる人達のためにも……………だから大丈夫です。」

リリスの目は嘘を言っていない、それでも……………やっぱり私は心配してしまう。

「でも……………」

「心配性ですねリーシャは……………えい！」

「ーギョッー」

「え！？リリス！？」

いきなりリリスが抱き着いてきちゃったよ／＼／

「ふふ、リーシャは温かいですね。こうしてるとすごく安心します。」

「えっと／＼／＼……リリス？」

「私を信じてくださいリーシャ、私は……大丈夫ですから！」

あ……不思議、こうして改めてリリスの言葉を聞くとほんとに大丈夫な気がしてしまうから。

「……わかった、でも一つだけ約束して。」

「わかりました、为什么呢うか。」

「絶対に無茶しないで、怪我したら……なんでも私の言うことを一つ聞いてもらうから。」

なんでも……はすこし悪戯が過ぎたかな……

「ふふ、わかりました。」

でもそれはお互い様です、リーシャのほうも怪我したら私の言うこ

とを一つ聞いてもらいますからね?」

「あはは、うん、わかった。」

これは私も怪我するわけにはいなくなっちゃったな。

「あ、そろそろ休憩が終わるね、私は戻るよ。」

「はい、午後からの稽古がんばってくださいね。」

「うん。」

リリスの声を背に私は稽古へと戻っていった。

リーシャ     s i d e     e n d

リリス     s i d e

「ふふ、本当に心配性なんですからリーシャは………」

そうですね、 赤の戦鬼 はたしかに強敵です。  
おそらく無傷で勝利なんてのは無理でしょう。

「はあ、これは約束………覚悟しないとですね。」

さてと、私は自由ですし行政区を通じてオルキスタワーの視察でも  
行きましようかね。

リリス    s i d e    e n d

## 20話「不安な思い」（後書き）

さてさて、行政区とオルキスタワーに行くということでフランとマリアベルとのフラグが立った！！

## 21話「クロイス家の令嬢」

リリス   s i d e

私は今オルキスタワーに向かうため行政区にいます。

「見たところ入り口はこれだけなのでしょうが……………」

テロリストが攻撃をしかけてくるとしたら入り口からの突破……………  
は無理ですね。

会議場は35階あたりのはずですし……………

「だとすれば考えられるのは飛行艇ですか……………」

飛行艇で来るとするならば屋上に着艦し侵入するのが定石ですが…

……………

おそらく要人たちの護衛には特務支援課に一課、そして風の剣聖が  
出てくるはずですよ。

いかに数が多くても突破はほぼ不可能に近い……………

「やめましょう、私が相手をするのはあくまで赤い星座、そちらの  
ほうは警察にでもまかせるとしましょうかね……………」

おっ、あそこを曲がればオルキスタワーですね……………あれは……………

私の目の前に警察の服を着た女の子が歩いています。

まだ若いですね、私と同じくらいの子です。

「まあロイドさんたちも充分若い方ですから不思議なことではありませんね。」

でもすこし変ですねあの子……………なんかフラフラしてるようなっ!?

その瞬間女の子が倒れそうになりました、私は瞬動を使い女の子を抱きかかえます。

あれ?この光景前にもあつたきがしますね……………

「間に合いましたね……………大丈夫ですか?」

「えっ?」

驚いていますね……………すごいデジャブです……………

「……………」

うん？なんか女の子にじっと見られていますね、どうしたのでしょうか。

「えっと………どうしましたか？」

「あ／＼すみませんボーっとしてしまっ／＼／」

「構いませんよ、ところでどこも怪我とかしてないですよね？」

「はい、大丈夫です、ありがとうございました。」

どこも怪我してないのですね、それはよかったです。

「それを聞いて安心しました、立てますか？」

「あ！すみません、ずっと支えてもらっ／＼／」

「ふふ、謝ってばかりですねあなたは。」

「うう／＼／＼ごめんなさい／／／」



なんか可愛い子ですね……………それに……………どことなく誰かに面影が似てるような気がします。

「おそらく貧血でしょう、働きづめでは大切なときにそうなってしまいますよ？こまめにしっかり休憩を取ることをおススメします。」

「はい、ここの所あまり休んでいなかったもので……………」

あ、シュンとしてしまいました……………不謹慎ですが……………可愛いです！！

「なんとかかい……………いえいえ、では私は先を急ぐのでこれで失礼しますね。」

思わず声に出してしまうところでした……………

「あ、はい、本当にありがとうございました！」

私はその声を背にその場を離れた。

「あ！名前を聞くのを忘れました……………」

失敗です…………でもまた会えるでしょう。

リリース side end

フラン side

「あ、はい、本当にありがとうございました！」

私は今日素敵な出会いをしてしまいました。

貧血で倒れそうになった時私を助けてくれた女の人、すごく綺麗な方でした。

短い黒髪がとても綺麗で真紅の瞳はとても見ていて吸い込まれそうでした…………

「…………あ！名前を聞くのを忘れちゃいました…………」

あうゝ私のバカ！どうして名前を聞くのを忘れてしまったのでしょうか…………

「でも素敵な出会いだったのに変わりはないです！お姉ちゃんに話してみようかな」

そうだ、お姉ちゃんにも話してみよう、もしかしたら知ってるかもしれないし。

このフ란の考えがリリースとの再会を加速させるのはまた別のお話し。

フ란 side end

リリース side

行政区で女の子を助けた後私はオルキスタワー建設現場に来ています。

「まだ天幕が張ってあつて見えませんが……… 壮大な光景ですね。」

IBCの建物よりさらに高く相当なミラをつぎ込んだのでしょうか。防弾ガラスやいろんな設備にお金がかかっていそうです………

そこに私の背後から声がかかりました。

「おや、珍しいですね、こんなところにあなたのような女の子がいるなんて。」

私が振り向くと…………

袁紹 g

「あんな無能な塊のお嬢様と一緒にしないでください！」

oh…………… 思ったただけなのにキレのいい突込みが帰ってきました……………  
…………… というかなんでそのネタをあなたが知っているのです？……………  
まあ私が知ってるのも問題なんですけどね。

「…………… ナイスな突込みいただきました！さすがです。」

「なにがさすがなのかわかりませんが素直にいただきますわ。」

こういうノリのいい人は嫌いではありません私は。

「それで…………… あなたはどうしてこのような場所に？」

彼女が私に聞いてきます。

「はい、もうすぐ通商会議が行われるということで、その会場がどんなものかと興味がありましたので。」

「……そうでしたの、あなたは……そういえば名前を聞いていませんでしたわね。」

言われてみればそうでした、今度は自己紹介できますね。

「そうですね、リリス・プラティエです、よろしくお願いします。」

「いいお名前ですわね……プラティエというと……」

「はい、イリア姉さんの妹です、義理ですけど。」

やっぱりみんな驚くのでしょうか、イリア姉さんに妹がいるなんて公にされてないことだからでしょうかね。

「そうでしたの……」

「やっぱり驚きますか？」

「ええほんのすこしだけです……次は私が名乗りましょうか。  
マリアベル・クロイスですね。以後よろしくお願いしますね？リリスさん。」

「（この人がクロイス家の……）」

これがキアを取り戻すために戦い、すべてが終わった後、絶望の中にいた私を救い出してくれた一人の女性、マリアベルさんとの出会いです。

リリス    s i d e    e n d

## 21話「クロイス家の令嬢」(後書き)

最後のほうに若干終章のネタバレっぽいのを含ませました。

気づくのが遅かったのですがダグラスさんと異名がかぶってるのが  
発覚いたしました……

なので今さらなんですけど二つ名を改名しようかと……

まあ考えるのがめんどくさいので 星光 でいい気がしました……

どうでしょうか……

## 22話「見通す瞳」

リリス side

みなさんこんにちわリリスです。  
今私は何をしているかというと……

「まあそうですね！」

――ナデナデー――

「はい、あの時はその親友に感謝しました。」

「リリスさんはいい友に恵まれているんですね。」

――ナデナデー――

「あゝ、マリアベルさん？」

「なんです？」



ーナデナデーー

「どうして私の頭をずっと撫でているのでしょうか……………」

そうなんです、先ほどからお話をしているんですがずっと頭を撫でられています……………」

「……………」ご迷惑……………」でしたか？」

ううゝそんな声で言わないで下さいよ、どこかの歌姫さんのような声なのでキュンとしちゃいます。

「……………」ご迷惑……………」ではないです。」

弱いな私。

「ふふふ、なら問題はありませんわ。」

「でもなぜ撫でるか理由は聞いてみたいですけど。」

「そうですね、強いて言うなら……」

「強いて言うなら？」

「リリスさんが可愛いからですね。」

「か／＼／かわいい……ですか／＼／」

うっ／＼、面と向かって言われると恥ずかしいですね、今の私は顔真っ赤ですねきつと。

「ウッフ、照れている姿も可愛いですわ！」

「……マリアベルさんってすこし意地悪ですよ。」

なんか姉さんと同じ感じがします……

「意地悪ですか……リリスさんだけかもしれないですよ？」

「ほんつとに意地悪です！」

私だけって……あれですか？マリアベルさんってDSですね。

「しかし……………」

うん？雰囲気が変わった……………？

「本当にあの方たちの言うとおりの人でしたわね。」

「っ！？」

あの方たちって……………

「幼いながらあの 剣帝 を超える強さを兼ね備えた少女、会って  
みたかったですよ？」

つながっているのは分かってましたが私のことまで知っていたとは  
予想外ですね。

「私のことを知ってるということは……………私があなたたちの計画の  
ことを知っているということもすでに掴んでいますね？」

知らないわけではないでしょうが一応聞いておきましょう。

「ええ、鋼の聖女 からある程度は聞かさせていただきました。」

「あの人から………ですか、それで………どうしますか、計画を知った私を消しますか？」

戦いが避けられないならしょうがないですけど………

「いえ、そのようなことはしません、私はあなたのことが気に入りましたもの。」

………はっ？

「気に入ったって………」

「そのままの意味ですわ、知り合ってますしですが、私はあなたのことを知りたいと思っています。」

「………警戒していた自分が馬鹿みたいです。」

戦闘も止む無しと思っていたのですが……そんなこと言われては興ざめです。

「フフ、できればあなたとは別の場所で会いたかったですわ。」

「私もです、私自身マリABELさんが敵じゃなくて……味方だったらって思っています。」

本当にそう思ってしまうと、どことなくマリABELさんに抱かれて頭を撫でられているとき、姉さんと同じような感覚だったから。

「ならばあなたもこちら側へ来ませんか？」

「それはできませんよ、私はキーアを救いたいと思ってるんですから。」

魅力的なお誘い……かはわかりませんができませんね。

「それは残念ですわね、でもたまには友人として会いに来てはくれないでしょうか？お話ししたいことがたくさんあります。」

「それなら大歓迎ですよ、事を起こした後でも会いにいきますよ。」

「ウフフ、それは嬉しいですね、楽しみにしていますわ。」

「はい、では私はそろそろ戻りますね。」

「わかりました、今日はお話できて楽しかったですわ、またお会いしましょうね。」

「こちらこそです、それではまた。」

ほんとに………どうして敵なのでしょう、運命とは残酷ですね。

リリース side end

マリアベル side

「リリースさん、不思議な方でしたわね。」

使徒の方からリリースさんのことを聞いていたので会ってみたいと思っていました。

第一印象としては非常に可愛らしい方でした、そして噂に聞く強さも兼ね備えています。

あの方があそこまで言っていたのが理解できましたね、離してしまふとすぐに消えてしまふかもしれない儚い存在……

「リリスさん、あなたは幸福なヒロインと悲劇のヒロイン、どちらを選びますか？」

おそらく誰もが幸福を求めるでしょう、しかし……リリスさんはきつと大切な者たちのためなら喜んで悲劇の道を選ぶのでしょうか。

「私がリリスさんを抱きしめたとき、一度だけ警戒心を解いて身を委ねてくれました、私のことも信頼してくれているのでしょうか。」

そうだとすれば嬉しいですね、私自身先ほどリリスさんに言ったことは嘘ではありません、もっとリリスさんのことが知りたいですね。

そして……

「守ってあげたいですね……くれぐれも気を付けてくださいリリスさん。」

あなたの中に眠る闇の力を狙う者が…… ゆっくりそして静かに……  
…ですが着実にあなたに近づいています。」

彼らが動き出すのはおそらく 碧き零の計画 の終了後。

結社のほうでは 幻焰計画 のために帝国に行かなくてはなりません  
んが、おそらく 鋼の聖女 はリリスさんを優先するのでしょうか、  
無論私もですが。

「リリスさん、あなたは一人ではありませんわ、数多の絆があなたの  
力となり、そしてあなたを守ってくれるでしょう。」

このマリアベルの言葉は誰の耳にも届くことはなかった、しかし彼  
女のリリスを想う気持ちは嘘偽りないものだろう。  
なぜならその時の彼女の顔は愛おしい何かを守ろうとする決意のあ  
る表情だったからだ。

マリアベル    s i d e    e n d



## 23話「レン」

リリス   s i d e

オルキスタワーの視察も終わりアルカンシエルに帰ってきました。

「ただいまもどりました。」

「あら、おかえりなさいリリス。」

私を出迎えてくれたのは姉さんです、リーシャの姿が見えませんか。

「ただいまです姉さん、リーシャの姿が見えないのですが……………」

「リーシャは外せない用事があるそうよ、今日はもう夜まで帰ってこないって言ってたわ。」

「用事……………ですか、わかりました。」

なんの用事がある程度予測はできますけど……………なにかあったのでしょうか。

「あ、そうそうリス、さっきあなた宛てに電話があったわよ、声からしてまだ幼い女の子みたいけど……………」

「私に電話ですか、誰でしょうか……………」

幼い女の子……………思いつくのは一人しかいないのですけど……………

ーブルルルルルー

「あら、さっきの子かもしれないわね。」

そういつて姉さんが電話に出ます。

「はいもしもし、ああ丁度よかったわ、今帰ってきたのよ。」

どうやら例の女の子のようですね。

「ちょっとまってね、リスにお電話よ。」

私の予想が正しければおそらく。

「今変わりました、リリースです。」

「久しぶりねお姉ちゃん、レンよ。」

思った通りでした、まさかレンのほうから電話をしてくれるなんて嬉しいですね。

「ほんとに久しぶりですね、元気でしたか？レン。」

「ええ、レンは元気よ、お姉ちゃんこそ元気かしら？」

「私も元気ですよ、それにしてもよく私がアルカンシェルにいるとわかりましたね。」

これが疑問でした、誰かに聞いたのでしょうか。

「昨日マイスターと話す機会があったからその時に聞いたのよ。よかったわねお姉ちゃん、やっと家族の元に帰れたのね。」

「ありがとうございますレン、それならあなただってそうでしょう？」

「やっぱり知っていたのね、レンの本当の家族はレンを大切に思ってくれていたわ、そして今の家族もレンのことを大切に思ってくれている……家族ってこういうもののね。」

「ふふ、そうですよ……今のあなたのお姉さんには会ったことはありませんが、ヨシユアは元気にしていますか？」

たしか……エステルでしたっけ、あの 剣聖 の娘だという、彼女とは面識がありませんけどヨシユアなら昔に何度か会ったことがありますから気になります。

「ヨシユアは元気よ、レンの鍛錬に付き合ってくれるしね。」

執行者二人の鍛錬ですか……なんかすごそうですね……

「そうですか、ヨシユアのほつもお元気そうで何よりですよ。」

「フフ、あ！そういえばエステルがお姉ちゃんに一度会って話したいと言ってたわ、レンとヨシユアがお姉ちゃんの話したら一度会いたいって言い出しちゃって。」

「何の話をしたのか気になりますけど機会があればぜひ会いたいですね。」

あのレンが心を開いた人物です、非常に興味がありますね。

「それにしても……………」

「どうしたのかしら？お姉ちゃん」

「それです、まだ私のことをお姉ちゃんと呼んでくれるのですね。」

私が初めてレンに会ったのはアリアさんに連れられて結社の人達に会いに行った時でした。

お互いに教団の被害者ということで惹かれあうものでもあったのでしょうね、私はレンのことを本当の妹のように接していました。何度か一緒に寝たりして……………その時のレンは本当に可愛かったです。その時からですね、私のことをお姉ちゃんと呼ぶようになったのは。

「当たり前じゃない、エステルも今はレンのお姉さんみたいな存在だけれど……………お姉ちゃんはいつまでもレンのお姉ちゃんなんだから。」

「ふふ、そうですね。私もレンのようなすごく可愛い妹がいるなら嬉しいですよ。」

「……………／／／」

「レン？」

どうしたのでしょうか、どこか具合でも悪くなったんじゃない……

「い／／／いきなり可愛いなんて言われたから／／／」

「ああ、それはごめんなさい、でも本当のことを言っただけです。」

嘘偽りない私の気持ちです、だって本当にレンは可愛いんですもの。

「も／／／もう……………お姉ちゃんに言われるといつも胸がドキドキするんだから……………」

「え？すみません、最後の方が聞こえませんでした。」

「な／／なんでもないわ／／……それよりお姉ちゃん。」

「……………なんでしょうか？」

真剣な声に変わりましたね……………

「もし今回のことでお姉ちゃん一人でどうにもできない状況になったら……………絶対にレンを頼ってね？」

まったくこの子は……………

「わかりました、その時はぜひ頼らせてもらいますね。」

「約束よ、お姉ちゃんはいつも一人で背負いこんじゃう悪い癖があるんだから。」

「あはは、自分でも悪いとは思っているんですけどね、それが結局周りを巻き込んでしまうのに。」

その結果が私が姉さんを困らせてしまいました、姉さんにも頼ってほしいと言われましたからね。

「フフ、それがお姉ちゃんのいいところでもあるんだけどね、周りを巻き込まないようにする、お姉ちゃんは優しいから。」

「自分では優しいかどうかわかりませんけどね。」

私って優しいでしょうか、リーシャにも言われましたけど自分ではよくわからないです。

「フフ、そろそろご飯の準備をしないといけないわ、すこし名残惜しいけど今日はここまでね。」

「そうですか、いつか私もレンの料理を食べてみたいですわね。」

「お姉ちゃんの料理のほうがレンは食べたいわ、すごくおいしいもの。」

「それはありがとうございます、もしクロスベルに来ることがあればいつでも訪ねてきてください、ご馳走しますから。」

「今から楽しみだわ、きつと楽しいお茶会になりそうね、それじゃあねお姉ちゃんまたお話ししましょう。」



「はい、またお話ししましょうねレン。」

長電話してしまいましたね、久しぶりにレンと話せて嬉しかった証拠でしょうか。

「終わったわね、随分仲のいい子なのね。」

そこにずっとそこにいたのか姉さんが話しかけてきました。

「はい、旅の時に会った私の妹のような子です、凄く可愛いので姉さんも気に入ると思います。」

「そう、それは楽しみね、ぜひその時は紹介してちょうだいね。」

「はい。」

姉さんならいきなり抱き着きそうですね、私もレンに会えるのが待ち遠しいです。

リリス    s i d e    e n d

レン side

今日は久しぶりにお姉ちゃんと話せてすごく嬉しかったわ。  
会える日がとても楽しみね。

「お姉ちゃん……………か……………」

思えばお姉ちゃんと会ったとき私はどうも思ってたなかった。  
家族のことなんてどうでもいいと言って切り捨てた私をお姉ちゃん  
が抱きしめたんだったわね。

「あの時はすごく安心して……………すごく温かくて……………すごく救わ  
れた気がした。」

あの時からレンはお姉ちゃんのことを好きになっちゃったのね。

「……………電話で言わなかったけど、奴らはもうすぐ動き出すわよ、お  
姉ちゃん。」

お姉ちゃんの中にある力を使い扉を開く、お姉ちゃんはその儀式に  
関する資料をすべて処分したって言ってたけど……………どこで調べ上  
げたのかしら。

「お姉ちゃんはレンをあの時救ってくれた、レンに温もりをくれた。」

そうだ、だから今度は。

「だから今度はレンがお姉ちゃんを支えて、そして守るんだから。」

絶対にこの幸せを壊させはしない、あなたたちの思い通りにはさせないから……………

……………  
…………… D・G 教団 ……………

レン side end

## 23話「レン」(後書き)

お姉ちゃんというレンがすごく可愛い気がする。

閑話「また会いたい」

ロイド side

「今日も疲れたな、さっそくフランに報告しようか。」

「そうね、さっそく端末で報告しましょう。」

俺たちは端末を開きフランに報告をする。

少しすると画面にフランが出てきた。

「みなさんお疲れ様です、たしかに報告受けました!」

相変わらず元気な子だな。

「ふう、これで今日の依頼は終わりか……………フラン?どうしたんだ?」

俺はふとフランが何かを言いたそうにしているのに気づき聞いてみた。

「実は……………今日ちょっと素敵な出会いをしてしまった……………」

「す、素敵な出会い!？」

ノエル、反応しすぎだろ……………まあ姉として気になるのはわからないけど。

「おお、ついにフランちゃんにも春がきたのか？相手はどんなやつだ？」

「えっと……………えへへ／＼／／／」

「……………これは……………」

「完全に惚れてるね。」

ワジが答えた瞬間ノエルが震えたな……………

「そ、それで……………どんな男性なの？フラン。」

「ノエルさん、動揺しすぎよ……………」

エリイも同じことを思ってたか、まあ俺もかなり気になってはいるんだが。

「男性？……………違うよお姉ちゃん、女の人だよ。」

「……………女？」

「……………まあフランちゃんのことだからそんなことだろうとは思っただけ……………」

ははは……………まあフランの好みはノエルだったからな。

「それでフラン、どんな人だったの？」

ノエルがすごくホツとしているな、そんなに不安だったのか。

「えっとね、短い綺麗な黒髪で……………燃えるような真紅の瞳で……………優しく包み込んでくれるような話しかただったよ。」

……え？それって……

「ねえロイド、なんとなくだけど当てはまる人を私は知ってるのだけど。」

「お嬢奇遇だな、俺もだ。」

「みんなもかい？実を言うと僕もだよ。」

「みんな思うことは一緒か、ノエルは？」

「はい、たしかにあの子なら今のフランの言った特徴にかなり当てはまりますね。」

「え？もしかしてお姉ちゃんたち知り合いなの？」

フランがすごく目をキラキラさせて聞いてくるな、まあ隠す必要もないし。

「そうだな、きっとフランの会った子はリリス・プラティエ、イリアさんの妹だよ。」



「え！？イリアさんに妹がいたんですか？」

「ああ、といつても義理の妹だけだな。」

「そうだったんですか……………また会いたいんですけど……………」

なんか以前の依頼を思い出すな、あの時はフランに会いたいって人からだったけど。

「なら今度リリスを連れてフランの所に行ってみようか？もちろんリリスの都合が合えばだけど。」

「え？いいんですか？」

「そうね、きっとリリスちゃんなら会ってくれるわよ。」

「そうですね、リリスさんはとても優しい方ですから、だから大丈夫よフラン。きっとすぐ会えるわ。」

「ありがとうお姉ちゃん！私楽しみにしてるね。」

「ふふ、わかった。」

「ふう、お姉ちゃんたちに聞いてみてよかった……それじゃあみなさん、私はこれで失礼しますね。」

「ああ、約束は守るよ、またなフラン。」

「はい、ロイドさんもみなさんも本日はお疲れ様でした。またの報告をお待ちしてますね。」

フランとの通信が切れて俺たちは顔を見合わせる。

「まさかここでリリスの名前が出てくるとは思わなかったな。」

「はい、まさかりリスさんがフランの気になっている人だなんて……」

「しかしリリスちゃんはモテるな、まああの容姿なら仕方ないか。」

「そうだね、あの子はきつと異性のみならず同性も惹きつける魅力

を持っているのかもね。」

「そうね、私が見た限りだとリーシャさんは確実ね。」

「そうだな、俺がリリスちゃんのパンツを偶然見たときリーシャちゃんの背中に修羅を見たぜ。」

「それはお前が悪いだろうランディ。」

まあ俺はリリスの下着を見たわけではないけどたしかにリーシャのあの時の顔は怖かったな……

「さて、いつリリスに言うかな。」

「そうね、もうすぐ通商会議があるから……終わった後くらいになりそうね。」

「そうだな、フランには悪いけどもうすこし待ってもらおうか。」

さて、今は目の前のことに集中するとするか、明日はいよいよ要人たちが一堂に会する。

何も起きなければいいけど……俺たちは俺たちの全力を尽くすだけだ。

ロイド      s i d e      e n d

## 24話「1日の終わり」

リリース side

「姉さん、ご飯作りましたよ。」

「いつもありがとうリリース。」

「いえいえ、さっそくいただきますしょう。」

時はすでに夜、公演を明日の夜に控えているということもあって今日は早くに練習がおわりました。

「やっぱりおいしいわね、リリースの作るご飯は。」

「ふふ、ありがとうございます姉さん。」

いつもおいしいと言ってくれますがすごく嬉しいですね。

「姉さん明日はがんばってくださいね、応援していますから!」

「ええ、きつと見に来てくれた人が満足できるような素晴らしい公演にしてみせるわ。」

ふふ、これなら私が心配する必要はないですね。

「そういえばリリースは明日1日お休みだったわね。」

「はい、すこし街中を見て回ろうかと思います。」

「そう、変な人に付いていつてはダメよ、リリースは可愛いんだから。」

「そんな子供じゃないんですから大丈夫ですよ。」

姉さんにとって私はいつまでたっても子供なのでしょうが……

「ふふ、ごめんなさいね、でも心配なのよ。」

「わかってます、心配はかけないようにするので明日は公演に集中してください姉さん。」

「そうね、じゃあ一つだけお願いあるんだけどいいかしら。」

「なんでしょうか。」

「お願いですか……一体なんでしょうか。」

「明日私が公演がんばれるように一緒に寝てほしいのよ。」

「一緒にですか、それくらいなら別にお願いでなくともいいんですけど。」

「フフ、いいじゃないの。それでどうかしら？」

「わかりました、今日は姉さんと一緒に寝ます。」

「ありがとうリリス、これで私は明日がんばれるわ。」

「ふふ、これくらいでがんばれるならいつでも一緒に寝てあげますよ。」

私も姉さんと一緒に寝るのは嫌ではありませんからね、むしろ一緒に寝たいというか……

「そう？なら毎日一緒に寝ようかしら………」

「うん？最後のほう聞こえなかったんですがなにか言いました？」

「なんでもないわ、じゃあ私はお風呂入るから。」

「はい、すでにお湯は沸いてるので入ってください。」

「なにからなにまで悪いわね、リリスはいいお嫁さんになるわよ。」

「ふふ、私なんかをもらってくれる人がいるでしょうか。」

「まあリリスがよくても私が認めなかったらリリスはあげないけどね。」

もう、姉さんったら………

「それじゃ入ってくるわ。」



「はい、じゅつくり。」

さて、ついに明日は公演ですね。

明日の夜までの予定はないですけどなにしましょうかね。

オルキスタワーのほうはたぶん入れないでしょうし………まあ明日になって考えましょう。

「さて、ベッドのほうの掃除をしておきましょうか。」

その後イリアがお風呂から上がった後すぐに二人はベッドに入った。  
イリアのセクハラがリリスに炸裂したのは言うまでもない。

リリス     s i d e     e n d

## 24話「1日の終わり」(後書き)

うん、ベッドでの甘々書いた方がよかったかなあ。

## 25話「模擬戦」

イリアと一緒に寝た翌日。

アルモリカ村にリリスと特務支援課がいた。

なぜリリスが彼らと一緒にアルモリカ村にいるか、それを説明するのはすこし時間を遡らなければならない。

――少し前――

「アルモリカ村で遊撃士との模擬戦………ですか。」

「ああ、もしかしてリリスも興味あるのか？」

イリアと一緒に寝た次の日、リリスは朝から自由だったので街の中を歩いていた。

そこでふとロイドたち特務支援課の乗る動力車が通りかかったので少し雑談をしていたのだ。

そこでこの模擬戦の話が出てきたのである。

「はい、聞くところによるとその遊撃士のお二人はかなりの腕と聞かれています。個人的には興味がありますね。」

リリスは強い人物には興味を示す、決して戦闘狂というわけではな

い。

「それならリリースちゃんも一緒に行くか？見学するってのも別に問題はないと思うが。」

そこでランディが意見を出す。

「見学ですか……でも仕事でしょう？よろしいのですか？」

「いいんじゃないかしら、リリースちゃんが戦うというわけではないのだし。」

「そうだな、じゃあリリースがよければいいぞ。」

特務支援課のメンバーは特に断ることもなくリリースに同行を促す。

「わかりました、それではぜひ一緒にさせていただきますね。」

リリースも同意しこうしてリリースを含めた特務支援課はアルモリカ村に向かっていった。

――キンクリー――

「さて着きましたよアルモリカ村です、いやはや動力車とは便利なものですね。」

「そうだな、俺たちもこれが支給されてかなり助かってるよ。でもリリース？誰に向かって言ったんだ？」

「特に意味はないですよ、単にこの小説を読んでくださるみなさんに私たちが今どこにいるのかを伝えなくてはと思いまして。」

おい！その発言は危険すぎる、じゃなくてすぎるというよりダメだよ！！

「あら？今なんか聞こえた気がするのだけど……………」

「奇遇だね、僕もなんか聞こえたよ。発言が危険すぎるのかどうか。」

もうダメ、これ以上その発言に突っ込んでではダメよ！！

「ささ、みなさん気になるのもわかりますが行くとしましようか。」

「おっと、そうだな。たしか宿舎にいるって話だったな。」

「ええ、じゃあさっそくいきましょう。」

ああゝ危なかったもうすこしでライフが0n……………じゃなくて！  
こうしてリリース達は遊撃士の待つ宿舎の扉を開き中へと入った。

――カランカラーン――

宿舎の中には人がたくさんいるが中でも異彩を放つ二人がいた。  
そしてその二人が特務支援課の来訪に気づき声をかけてきた。

「おや、来たね。」

A級遊撃士のリンと

「ティオちゃん！……………はまだいないんだ。」

同じくA級遊撃士のエオリアである。ただこの人……………

「はあ、テンション下がるなあ。」

ティオ大好きっ子なのである。

エオリアを除く皆の顔が引きつる中ロイドが口を開く。

「な、何かすみません。」

「いや……こちらこそすまない。」

ロイドとリンがお互いに頭を下げる。リリスはすこしおもしろいな  
と思いこの光景を楽しむ。

「（今日初めて会いましたが思ってた人達と違いますね）」

リリスはそんなことを思いながら二人を観察する、ここでリリスの  
視線に気づいたリンが言葉を発する。

「そういえばその子は誰だい？」

「ああこの子は俺たちの模擬戦を見学したいというので連れてきた  
んです。いけませんでしたか？」

「いや、そんなことはないよ。なんとも可愛らしい子じゃないか。」

ずっと黙ってるわけにもいかないと思いリリスが言う。

「初めましてですね、リリス・プラティエです。よろしくお願いします。」

「初めまして、遊撃士のリンだ、よろしく。」

「……………」

「エオリア？」

急に黙り込んだエオリアをどうしたのかとリンが問いかける。

「か……………」

「……………か？」「……………」



エオリアを除く全員の声が重なる。

「かわいい~~~~~!!」

——ブブブブ、ギュー——

「ふえ？」

何が起こったか説明しよう、エオリアが見えないほどの速さでリリスに抱き着いたのだ。

「ん~~~~、リリスちゃん可愛いわ~~~~」

「ちょ、ちょっと!?!そこはノノひゃう!」

「可愛すぎよリリスちゃん、つぐ」なにをやってるんだ!お前は!」

——ドーン——

「もうっ痛いじゃないのリン、いきなり何するのよ。」

見えないほどの速さでリリスに抱き着いたエオリアにこれまた見えないほどの速さでリンの拳がエオリアの頭に炸裂した。

「彼女が困ってるだろ。」

「／／／」

リリスは顔を真っ赤にして俯いている。

「ああごめんなさいね、つい自分を抑えられなくなっちゃって……」

「いえ／／／かまいません、エオリアさん？」

「ええ、同じく遊撃士のエオリアよ、よろしくねリリスちゃん！」

「あ……………はい、よろしくです、エオリアさん。」

リリスが満面の笑顔でエオリアに返す。

「／／／」

するとエオリアの顔が赤く染まる、そしてその後ろでリリスの笑顔を見たリンも若干顔を赤くした。

「うん？どうしたんですか？」

「な／／／なんでもない／／／」

「え／／／なんでもないの！気にしないで！／／／」

「は、はあ。」

リリスは何のことかわからないようである。

一部始終を見ていた特務支援課の面々は苦笑いである。

「あちゃー、こりやまた犠牲者が出ちゃったな。」

「フフ、そうだね、あの子の笑顔は一種の凶器だね。」

「フランが目を奪われたのも頷けますね。」

「そうね、現にあの笑顔には私たちも魅せられてしまったのよね。」

「あはは……まあ打ち解けられたようでよかったのかな。」

上からランディ、ワジ、ノエル、エリイ、ロイドの順である。

「あ／＼目的を忘れるところだったな／＼」

ふと目的を思い出したのか慌ててリンが切り出す。

「あはは……そうですね、依頼の内容を聞かせてもらっていいですか？」

「なに、簡単なことだ、あんたたちと私たちが手合せを行う。」

「手合せということは……実践形式で戦うわけですね。」

「でも、どうしてまた今になってそんな依頼を？」

「そりゃあ、ちょっと前だとヒヨッコ過ぎたからじゃない？」

いつの間にか復活したのかエオリアが言う、エオリア……………なんともスッパリ物を言う子である。

「確かに返す言葉もありますが……………」

「ええ、胸に突き刺さるわね。」

「はは、まあいいじゃないか。その代り今はもうアンタたちの実力を認めてるんだ。それこそ私たちが肌で感じておきたいと思うほどにね。」

特務支援課は教団事件、いや数々の事件を解決していく中で確かな成長を重ねた、遊撃士の二人も特務支援課の成長を認めているのだ。

「ちょうど私とリンの空き時間が重なることも分かって今しかないと思ったの。スコットとヴェンツェルには悪いんだけどね。」

「あはは、あの二人までいたらさらにとんでもないことになりそうですね。でも確かに、こんな機会滅多にないですね。」

「おうよ！ぜひ胸をお借りしたいッス。」

「胸を借りたいか……ランディが言つと別の意味にも取れそうだけれど。」

さすがランディとでも言つのだろうか、まったく信用されていない。

「？それってどういつ……」

ここに一人分かってらっしやらない子がいました。

「あ。」

どうやら気づいたようだ、その瞬間ノエルの顔が赤く染まる。

「ワジ君……これ以上引つ搔き回さないでくれる？」

エリイがジト目でワジを見る。

「はは、どうやらリリースだけでなく新しい面子も楽しませてくれそ

うだ。」

「うんうん、見たところ二人とも相当できるみたいだし。」

どうやら遊撃士の二人にの御眼鏡に二人の新メンバーは叶ったよう  
だ。

「そ、相当かどうかはさすがに自信ないですが……」

「フフ、まあ光栄な話だね。」

「で、どうする。受けてくれるかい？」

「ええ……できればそのつもりですけど。場所はとうするんですか  
？」

「ああ、それなりに広くて生活の邪魔にならないってことで村の入  
り口を考えている。村長の許可も取ってあるからいつでも使ってい  
いとのことだ。既に準備ができてるならすぐにでも始めたいが……」

「装備や買い物は大丈夫？準備が必要だったら持つけど。」

「そうですね……」

ロイドは少し考えそして

「準備はできているのでさっそく移動してもいいですか？お二人との手合せ、正式に受けさせてもらいます。」

「ふふ、そうこなくっちゃ。」

「それじゃさっそく訓練開始ね！」

——同移動中——

ロイドたちとリンたちが向かい合う、そこでひとたびロイドたちの戦いを見ようと村の人も見学にきたようだ。

「それにしても……結構ギャラリーがいるんですね。」

「ああ、どうやら話が広まってしまったようだ。」



ギャラリーはギャラリーで盛り上がっているようである。

「村長さんまで見に来てるんですね。」

「っていつかこの話は村長さんにしかしてないんだけどね。」

リリスの問いにエオリアも続く。

「フフ、さすがは田舎と言うべきか。」

「ああ、情報の周りが恐ろしく早えな。」

「あはは、また違った意味で緊張しそうです。」

「ふふ、まあたまにはこんなのもいいじゃないか。」

上からワジ、ランディ、ノエル、リンである。

「さて、さっそく手合せと行きたいところだけど。まずは形式を決めないとね。」

「うーん、パターンはいろいろあると思うんだけど……」じつはやっぱりツーマンセルでしょ。」

どうやら2対2の戦いをするようだ。

「ああ、私もそれで行きたいと思ってる。そちらは大丈夫かい？」

リンが問いかける。

「ええ、お二人の依頼ですし、問題はありませんが……誰が出るかはこちらで決めてもいいんですか？」

「ああまかせるよ。ただしロイド、アンタだけは確定で頼む。」

リンがロイドだけはとロイドに確定を促す。

「え？」

「はは、そんなに驚くことじゃないだろう。」

「私たちは別に個人の身体能力を見たいわけじゃないんだ。ロイドを中心とした特務支援課の結束力……それを見せてもらいたいのだ。」

「そうそう、なのに肝心のリーダーがいないんじゃない意味がないでしょう?」

「は、はあ……」

「くそっ、ロイドのやつ……!こんな素敵なお姉さんからこうも求められるとは……!」

ランディがよくわからない嫉妬をロイドに向ける。

「フフ、なるほどね、これが噂の弟貴族というやつか。」

「弟貴族……ああなるほどです。うまいですねワジさん。」

「フフ、ありがとうリス。」

妙な連帯感のある二人である。

「何だか不当なコメントが聞こえた気がするけど……まあいいや。とりあえず了解です。」

「それじゃあロイドは誰をパートナーの選ぶの？」

「ああ、そうだな。」

「別に私でも構いませんよ？お二人との手合せには私も興味ありますし。」

「いやいや、リリスは支援課じゃないから。」

「うう、ダメですか……」

「「「「「「「（なにこの可愛い生物！！）」「」「」「」」

リリスが落ち込んだ姿をみて一同の思ったことがつながつた瞬間だった。

「……………エリィ、頼めるか？」

「ふふ、もちろんよ。」

どうやらロイドはエリィと組むようだ、そしてツーマンセルの戦いが始まる。

「それじゃ、行くよ！」

――リリース見学中――

結果的に言えばツーマンセルの戦いは支援課側の勝利で終わった。そしてその後に支援課メンバー全員と本気を出したリンとエオリアとの戦いが行われた、惜しいところまで行った特務支援課だがあと一步のところで敗北してしまった。

「みなさん凄かったですよ、お疲れ様でした。」

「ありがとうなリリースちゃん、でもこの5人相手にして勝っちゃうなんてやっぱりさすがだな。」

「まあ私たちもあぶなかったけどな。」

「そうね、もうすこし粘られちゃうと危なかったかもしれないわ。」

そしてエオリアはロイドたちに回復アーツを使う。

ー水属性アーツ、ラ・ティアオールー

「あ……」

「さっきまでのダメージがなくなっただわ。」

「1日にエオリアさんの回復アーツに2度もお目にかかれるなんて天にも昇る気持ちッス。」

「フフ、ありがとうランディ君、ならもう一度かかってみる?」

「いや、遠慮しとくッス。」

「フフ、今度は別の意味で天に昇っちゃうかもね。」

「ワ、ワジ君……」

「はあ、緊張感に欠けるといっかなんというか。」

「……………」

「リン？どうしたの？」

リンがずっと考え込んでいることに気づきエオリアが声をかける。

「ああ、なあリリース、私とサシで戦ってくれないか？」

「えっ！？」

リンの発言にリリースが驚く、いや驚いたのはリリースだけではない、特務支援課もだ。

「ふふ、リリースちゃん、私からもお願いするわ。こうなったリンは止められないから。」

リリースは少し考え込んだ後に、

「……はい、わかりました。」

リリスはリンと戦うことを決めた。



## 26話「リリスVSリン」

「なあ、リリス、私とサシで戦ってくれないか？」

リンからリリスへの挑戦状、リリスは考える仕草をしたあと

「……………はい、わかりました。」

「ふふ、ありがとう。」

リリスが勝負を受けてくれたことにリンは安堵する。

「さっそく始めたいと思うけど、そっちは準備いいかい？」

「はい、いつでも。」

二人が構える。

リンは拳を構え、リリスは腰に差した刀を抜きリンに向き直る。

二人の間に齎される静寂、そんな中、二人には聞こえない音量で特務支援課とエオリアが会話をしていた。

「おいおい、まさかこんなことになるとはな……リリスちゃん大丈夫か？」

ランディの心配は尤もだ、リンはA級遊撃士である、その肩書は伊達ではない。

「そうね、大丈夫かしら……」

エリイが……いや、特務支援課の全員が不安な眼差しをリリスに向ける。

そこでエオリアが彼らに問いかける。

「フフ、みんなはリリスちゃんが心配かしら？」

「はい、リリスが強いのは認めます、前に俺たちを助けてくれたから。それに……」

ロイドが続きを言おうとしたときにエオリアが口をはさむ。

「彼女が元 身喰らう蛇 の執行者候補だから？」

「っ！？はい、知ってたんですね？」

「ええ、リンも気づいていると思うわね、リリスちゃんの容姿が聞いていた特徴と似ていたから。」

「そうだったんですか……………」

ロイドたちはエオリア達がリリスの事を知っていたことに驚いた、そこで彼女に聞きたい疑問ができた。ロイドたちはリリスに執行者候補だったことは既に聞いている、しかし、迅雷がどういうものかを知らないのだ。エオリア達が知っているということはけっこう有名なのでは？とロイドは考えた。

「エオリアさん、リリスちゃんは……………迅雷 という名は有名なんですか？」

エリィがおそらく皆が聞きたかったことを代弁して言う。

「ええ、おそらく遊撃士の中で迅雷の名を知らないものはあまりいないんじゃないかしら。」

「え？そんなに有名だったんですか？」

ノエルが驚きながら聞く。

「あ！始まるようね。」

エリイが気づいたように言う、その声につられて皆の目が二人へと向いた。

「さて、いくよー！」

「っ！」

最初にリンが動く、目にも止まらぬ速さでリンが接近しその拳がリリースを捉えた、誰もが決まったと思った。しかし……

「なっ！？」

リンの拳がリリースに当たる瞬間、リリースがぶれた、いや消えたのだ。

「どこ」「後ろですよ。」「！？」

おそらく誰も目で追うことができなかったであろう、リンの後ろに

回ったリリスが刀を構え

「一の舞、夜桜。」

「ちっ！！」

リリスのクラフトがリンに決まった、しかし……

「…………驚きました、まさか気を纏って威力を軽減するなんて。」

「いや、けっこうギリギリだったさ、もうすこし反応が遅れてたら綺麗にもらっただろうね。」

リンの気を纏った防御にリリスが素直な感想を述べた、それに対しリンも若干ではあるが嬉しそうにして言葉を返す。

「まだまだ始まったばかりだ、龍神功！！」

「っ！？」

リリスがリンの急激な気の高まりに驚く、その隙をリンは逃さなか

った。

「驚いている暇はないよ？菩薩掌！！はあ！！」

油断していたリリスの懷にリンが飛び込みクラフトを放つ、見事にリリスの腹にリンの拳が炸裂した。

「うぁ……………」

リリスが声にならない小さな悲鳴を上げる。  
それを見た特務支援課のエリィとノエルが声を上げる。

「「リリスちゃん（さん）」」

「大丈夫よ、よく見て。」

「「え！？」」

エオリアの声を聞き二人は再び目を戻す、そこには……………

——ズドン！！——

「え！？うそ……………」

「一体……………なにが……………」

そこには後方に吹き飛ばされたリンと無傷でリンを見下ろすリリスの姿があった。

「一体……………なにが起きたんだ？リンさんの攻撃がリリスに当たったところまでは見えただけだよ。」

「ああ、砂煙で見えなかったな、そしたらいきなりリンさんが吹き飛ばされていた……………わからねえ。」

エリィとノエルだけでなくほかのメンバーも何が起きたかわからないようだ。

そこでリンが立ち上がり今起きたことを説明するかのようにつ。

「今のは……………分身だね、まさか入れ替わったことに気づかなかったなんて……………」

「ふふ、正解です、でもリンさんのほうも攻撃を当てたとき違和感に気づきましたよね。」

「ああ、ほんのすこしだけだな。」

そうなのだ、あのときリリースはリンが龍神功を発動したときはすでに分身と入れ替わっていたのだ。  
そしてリンのクラフトがリリースに直撃したとき背後に回っていたリリースが斬撃を放った、それが今に至る。

「それにしても……………やっぱり強いな、さすがは 迅雷 ってわけか。」

リンの言葉にリリースがすこし目を見開く。

「知ってたんですね。」

「ああ、特徴である程度予測していたんだが戦って確信を持てたところだな。」

「なるほど……………」



「それに……………」

リンが言葉を一旦止める、次の言葉に特務支援課に衝撃が走る。

「リリース……………あんたまだ本気じゃないだろ？」

「……………！？」

「……………どうしてそう思うんですか？」

「なに、簡単なことだよ、もしあの 迅雷 が本気なら私はあんなに攻撃する暇なんてないはずだ。」

「……………」

リンの言葉を聞いてリリースは黙り、特務支援課は信じられないといった感じで二人の会話を聞いていた。

「嘘だろ、リリースが本気じゃないなんて……………」

「一体何者なんだよリリスちゃんは……………」

「リリスちゃん……………」

「なんか……………信じられないです……………」

「……………」

特務支援課のメンバーは各々の反応を示す。

「フフ、みんなは 迅雷 についてあまり知らないのよね。」

言葉を失っていく支援課にエオリアが問う。

「はい。」

皆を代表してロイドが答える。

「 迅雷 というのはね……………どうやら私が言う必要もないようね。」

「えっ!？」

エオリアが二人のほうを向いたので皆をそちらを向く。

「なありリス、あんたの本気を見せてくれないか?……………あの 剣帝 を超えるとされたあんたの力をさ。」

そのリンの言葉にロイドは何かを思い出したのか

「 剣帝 ってたしかエステルとヨシユアの話して聞いた……………」

「ええ、リベル・アークで戦った人のことよね。」

「ああ、たしかエステルちゃんたちが束になっても苦戦したって話しだったな。」

剣帝 との戦い、それはリベルを混乱に陥れた結社との戦いで一つの決着となった戦いだった。エステルとヨシユア、そしてその仲間たちは 剣帝 を追い詰めるまでいったが倒すまではいかなかった。ヨシユアが自分の過去に決着をつけるため、 剣帝 に戦いを挑み、刀を吹き飛ばしてやっとの思いで勝利したのだ。

「そう、 迅雷 というのはね、あの 剣帝 を超えるとされた最強の執行者候補の名なの。」

「最強の……………執行者候補……………」

「リリスちゃん……………」

「複雑かしら？でもね、これまでと何も変わらずそのままのあなたたちでリリスちゃんに接してあげるといいと思うわ、もちろん私もリリスちゃんをたくさん愛でるけどね。」

強き力を持つ者は孤独なものが多い、それを踏まえてエオリアは皆に言ったのだ、リリスはどこまでいってもリリス、普通の女の子ということを。

「そうね、リリスちゃんはリリスちゃんだもの、これからもなににも変わらないわね。」

「そうですね、何も変わらないです。」

エリィとノエルの言葉にロイドたちもそうだという思いのようだ。

「ふふ、それでいいの、さて、そろそろ続きが始まるみたいね。」

リンの言葉にリリスはすこし考え込んだ、そして。

「わかりました……………、全力を出してくれた相手に手を抜くなんて失礼ですね。」

「ふふ、やっとその気になってくれたようだね。」

「はい、ここからは……………全力でお相手します。」

リリスの周囲の空気が変わる。

「え？リリスちゃんの目が……………」

エリイがリリスの変化に気づいた。

「目が……………蒼色になった……………」

対峙していたリンもその変化に驚く。

「私の全力全開……………迅雷と言われた私の力……………お見せしましょう。」

ついにリリスがその力の片鱗を見せる。

## 27話「圧倒、そして優しさ」

「迅雷 と言われた私の力……………お見せしましょう。」

その小さな呟き、しかしその場にいるすべての者に届くほど透き通った声だった。

「はは……………空気が痛いよ、だけど……………」

リンの掠れた声が響く、続けてリンが言葉を発する。

「こんなにワクワクするのは久しぶりだ。」

「……………」

リンが歓喜の言葉を発する、片やリリスは感情を写さないその瞳でリンを見ながら言葉を発さない。

さきほどリンの言った空気が痛いという言葉、それは特務支援課も思っていたことだ。

「空気が痛い……………か、分かる気がするな。」

「ああ、明らかにリリスちゃんの周りだけ空気が違うな。」

ロイドとランディが言う。

「再開するみたいね。」

エリイのその言葉に皆が視線を戻す。

「さてそろそろ再開しようか、いつでもいいよ。」

「わかりました………では、いきます！」

その瞬間リリスの体が消えた。

「っ！？」

リンがリリスの姿を探すが見つからない、そこで太陽の光が遮られた。

「上か！！」



リンが上空のリリースに気づく、リリースは刀を構えてクラフトを発動する。

「三の舞、雪月花。」

リリースから放たれる斬撃がリンを襲う。

「ちっ！」

リンがギリギリのところではリリースの攻撃をかわし、反撃に移ろうとした、しかし……

「反撃する暇など与えませんか？」

「くっ！」

反撃に移ろうとしたリンにいつの間にか背後に回っていたリリースから斬撃がせまる。

「（嘘だろ？まったく目で追うことができない！）はあ！！！」

「（気を纏い先ほどのように威力を軽減ですか…………ふふ、この攻撃がさっきの攻撃と同等ならある程度耐えられるかもしれないが……………」

リンの纏う気の鎧にリリスの剣が当たる、誰もが相殺できると思っただろう、だがリリスの剣は止まることなく…………

「なっ!?!」

「（威力は先ほどと非ではありませんよ!）」

リリスの攻撃は止まることなく、リンを薙ぎ払った。

「ぐはっ……………」

「……………」

リンが倒れこむ、リリスはそれを無言で見つめる。

一方特務支援課のほうもリリスの力を目の当たりにし言葉を失う。

「リンさんが……こんな……一方的に……」

その途切れ途切れの言葉は誰がいったのかはわからなかった。

「（リン、まだあきらめていないのね。）」

そんな中エオリアだけはまだリンが立ち上がるのを信じていた、いや……信じていたというより確信していたのだろう。

「う……はあ……はあ……」

エオリアの思った通りリンは立ち上がった、だがその姿はとても苦しそうで、とても勝負を続けられるような状態ではなかった。

「まだ……だ、まだ……終わっていない。」

リンが立ち上がったことにロイドたちが驚く。

「リンさん……あんなにボロボロなのに……」

そんな中リリスがリンに向かって刀を構える。

「なっ！？リリスちゃんまだやるつもりなのか？」

「そんな……もう勝負はついてるようなものなのに………」

ロイドとランディ、そしてノエルはリリスがやりすぎだと思っているのだろう、しかし、エリイだけは違った。

「大丈夫よ、みんな。私たちの知ってるリリスちゃんはどんな人だった？」

「え？」

エリイの言葉にロイドはわからないのか聞き返す。

「………あーリリスさんはすごく優しい人………でしたね。」

ノエルがそう言った瞬間、皆の顔の緊張が解ける。

「見守りましょう、そして信じましょう。」

リリスちゃんを……その言葉を聞いたロイドたちはゆっくり二人へと向き直る。

「はぁ……………はぁ……………」

右腕で脇腹を抑えながら、震える足でリンはリリスを見据える。

「……………ふふ、私が会う人は……………みんな強い人ばかりですね。」

リリスが少し微笑み、その瞬間リリスの姿が消えた。

「リンさん、私はあなただから……………本気を出せたんだと思います、もしよかったら……………また私と手合せしてくれると嬉しいです。」

「……………ああ……………私からもお願いするよ。」

背後からかけられた言葉にリンが返す。

「ありがとうございます、……………終幕、桜。」

静かに発動されるリリスのクラフト、しかし派手な音も、衝撃もなにもなかった。

「あ……………（何かに包まれるような感覚……………はは、こんな気持ちいい負け方……………初めてだな）」

リンは倒れる最中に意識を失う、そのまま倒れるかと思ったがリンの体が地面に着くことはなかった。

ーギューー

リリスがリンの体を抱き上げる、そしていつのまにか瞳の色も蒼から真紅へと戻っていた。

「本当に……………あなたとの戦いは心滾るものでした、でも今は……………」

リリスがリンの頭を自分の膝の上に持っていく。

「しっかり休んでください、リンさん。」

リンを膝枕し、慈愛に満ちた表情をして頭を撫でるリリスのその姿は、まさに女神のようだったと特務支援課は語ったそうである。

「リリスちゃん！！私にも膝枕〜！！」

……………羨ましいのはわかるけど空気を読んでください、エオリアさん……………

## 27話「圧倒、そして優しさ」(後書き)

ラストは設定に入れてないクラフト入れました。

まあここだけで使うだけであって今後は出ないと思われます。



## 28話「猫を捕まえる！」

リリス side

みなさんこんにちわりリスです。

前回のリンさんとの模擬戦を終えて今私たちはアルモリカ村の宿舎にいます。

「本当に心滾る戦いでした、ありがとうございます、リンさん。」

「あ／／ああ／／／」

「?どうしたんですかリンさん、どこか具合でも……」

リンさんの顔が赤いです、風でしょうか。

「いや／／なんでもないんだ、うん／／／」

「そう……ですか。」

「ふふ、リンったらリリスちゃんに膝枕されてたのが恥ずかしいのよ。」

「エオリア！／／／」

ああなるほど、たしかに膝枕されていたのは恥ずかしかったかもしれませんが、私も姉さんにされたときすごく恥ずかしかったので……

……

「それはすみませんでした、あのまま寝かせるわけにはいかなかったので膝枕したのですけど………」

「いや、リリスが悪いわけじゃないんだ、………まあなんだ／／／  
………ありがとう／／／」

「あ………はい！」

お礼を言われると嬉しいですねやはり、してよかったです。

「じ〜〜〜〜〜」。

「うん？どつしたんです？エオリアさん。」

さつきからエオリアさんがずっと見てきます、どうしたのでしょうか。

「リンばかりズルいな、リンの可愛いところを見れたのはいいけど、私も膝枕してほしい!!」

「ふふ、今度してあげますよ。」

「今がいいんだけど、我儘は言わないよ、約束だからね!!」

「はい。」

うーん、膝枕くらいいつでもいいんですけど一瞬リンさんが怖い顔をしたので今は止めときます。  
やっぱり膝枕したことを怒っているのでしょうか……

「なんか俺たち空気だな……」

「そ……そうね……」

あ！特務支援課のみなさんをすっかり忘れていました。

「ああすまなかつたな、改めて今日のお礼を言わせてくれ、ありがとう。」

「私からもお礼を言わせてね、リリスちゃんに会わせてくれてすごく嬉しかったわ。」

あれ？それ模擬戦と関係ないんじゃないや……

「おいエオリア、違うだろ、模擬戦だ。」

「ああごめんなさいね、私たちにとってもいい訓練になったわ、本当ありがとう。」

「は……ははは、こちらこそありがとうございました、いい経験になりました。」

ロイドさん……なんかごめんなさい。

「ふふ……ロイド？そろそろ私たちも戻らないと。」

「そうだな、たしかサニータちゃんの依頼が残ってたな。」

「まだ依頼が残ってたんですね、なんかすみません、時間とらせてしまつて。」

まだ依頼が残つてると知つてたなら模擬戦断りもできたんですけどね。

「いや、リリスは悪くないよ、というより俺たちもいいものが見れてよかったと思つてくらいだ。」

「そうですね、リリスさんのカッコいいところが見れたので良かったです。」

「かわいらしさを兼ね備え、なおかつ強さも持つ、リリスちゃん最高だぜ！」

「……私の戦いを見たら大抵の人は恐れるんですけどね、やっぱりみなさんと知り合えてよかったですよ、本当に。」

「ふふ、みなさんありがとうございます。」

「さて、クロスベルに戻るか。」

こうして私たちはリンさんたちに別れのあいさつをしてクロスベルへと戻りました。

私は動力車でアルカンシエル前まで送ってもらい、ロイドさんたちは東通へと向かっていきました。

アルカンシエルに着いた私、は久しぶりの戦いで疲れたのか眠たくなり、リーシャの演技の練習を見ながら寝てしまいました。

リリース    s i d e    e n d

リーシャ    s i d e

リリースが帰ってきてから私はすぐ演技の練習を始めた。  
リリースは疲れたのかすぐ眠ってしまった。

「リリースの寝顔………かわいいな。」

ずっとこの寝顔を見ていたい、そう思っていた矢先。  
外の方からあわただしい声が聞こえてきた。

「なんだろう、行ってみようか。」

私は劇場を出て受付のほうに行ってみると団長さんとランディさん、新メンバーのノエルさんがいた。

「お二人ともどうしたんですか？」

「お、リーシャちゃん。」

「お邪魔しています、リーシャさん。」

二人から話を聞くとどうやら子猫が迷い込んだようだ  
二人と話していると後ろから声が聞こえた。

「あれ？あのお姉さんは……………」

「リーシャ？」

現れたのはロイドさんと赤い髪を持つ女の子だった。  
二人がこちらに向かってくる。

「やっぱり、リーシャじゃないか。アーティストは全員休憩中だったんじゃないのか？」

「あ、ロイドさん。実はすこし納得できなかった部分があったので自分なりに復習していたんです。それより……子猫が入り込んだそうですね?」

「ああ、そうなんだけど……ってあれ?俺たち逃げた子猫を追ってここに戻ってきたんだけど……」

ロイドさんたちは子猫を追ってここに来たようだ、でも子猫は見なかったような……

「なんだ、そうなのか?」

「少なくともこちらには来ていないと思いますけど……」

どうやら私が出る前からいた二人も見えていないらしい、そこにロイドさんたちは別の扉からエリイさんとワジさんが出てきた。

「やあ、みんなお揃いだね。」

「そうみたいね、それにリーシャさんまで。」



「ワジにエリィ……その様子だと見ていないようだな。」

皆があつまり情報交換をする。  
ロイドさんがまず口を開いた。

「すると、俺たちが見失ってから誰もマリーを見ていないのか。」

「玄関は閉じてもらったし……やっぱりこのホール付近が怪しいんじゃないかしら？」

「ふむ、どこかの陰に隠れてる可能性がありそうだな。」

「そうですね、一度全員で捜してみましようか。」

「ま、それしかなさそうだね。」

どうやらこれからの行動が決まったようだ、ここでふと私は一つの視線に気づく。

「えっと……？あの、こちらの女の子は？」

「ああその子は「あはは、お姉さん凄いな。さっきから狙ってるのにゼンゼン隙がないんだもん！」」

ロイドさんの話しに途中に入り込んできてそんなことを言い出した、もしかしてこの子は銀のことをしってるのかと私はすこし焦る。

「え、え……？」

「そいつは俺の不肖の従妹だな。あんま気にしないでやってくれ。」

「ランディさんの……」

この子が……もしかして……

「シャーリイ・オルランド！シャーリイって呼んでね！いや〜お姉さんのことはアルカンシエルの舞台で見たけど。こうして近くで見るとまた破壊力はカクベツだね〜！いいな〜、おつきくてうらやましいよ。」

こんな人が集まっけるとここでそんなこと言わなくてもノノノ私は戦いとは別のなにか危険な感じがして何歩か下がる。

「えっと、それって……」

「既に私は一度被害に遭ってるから。」

エリィさんが顔を赤くしながら言う、そんな中彼女がこちらにジワジワと近づく。

「あはは、いいじゃん。減るもんじゃないんだし。これも何かの縁って事で………」

もうすこしで触れられる、そんなときに劇場のほうからリリスの声が聞こえた。

「な、なんですか？ひゃう！な、舐めないでください！ひゃあ！／／」

いきなり聞こえてきたリリスの驚いた声………なんかすこし／／／

「……………え？なに……………今の声。」

「リリスの声！」

「え？リリスがいるの？最近会ってなかったし行ってみよう！」

そういつてシャーリイが劇場に向かう。

「私も行きます、もしかしたら子猫がいたのかもしれないし。」

「そうだな、みんなはここで待っていてくれ、俺も行ってくる。」

そうして私たち3人は扉をくぐった。そこには……

「くすぐったいですよ、あ！そこは舐めないでください／＼／」

子猫がリリスのほっぺを舐めていた。

「リリス！」

「ふえ？リーシャ！この子猫どうにかしてください／＼。」

「あはは、リリス子猫に好かれてるね／＼。」

「そうみたいだな、ってこんなことしてる場合じゃない、リリースじ  
っとしていてくれ。」

「はい。」

私たちはゆっくりリリースに近づく、しかし子猫は私たちに気づいた  
のか。

「にゃー！」

「「「あ！」「」」

子猫は走りだし舞台のシャンデリアに飛び乗ってしまった、そして  
なぜか上へと上昇する。

「なんで、誰が舞台スイッチを……………」

「いのくらいー！」

そいつってシャーリイが走りだしシャンデリアの上に飛び乗る。

「え……!」

ロイドさんは今の動きに驚いている。

「にゃ、にゃ〜ん!」

「なにも取って食おうってわけじゃないんだからさあ。いい加減安心しなよねー。ほーら、こいつはどうだ」

シャーリィはマリーの喉をくすぐっている。  
するとすぐに大人しくなった。

「どうやら子猫は落ち着いたようですね。」

「ああそうだな、あぶない!」

あのままじゃあの子が落ちる、身体能力は大したものだけど猫を抱えたままじゃ……そう思った時私の体が反射的に動いていた。

「……っ……!」

落ちてくる猫を私はジャンプしてキャッチする。

「わお、ナイスキャッチ！」

「すごいです、リーシャ。」

いつの間にか近くに来ていたリリスも声をかけてきた。

「ふう……どうやら何とかなったみたいだな。」

本当にどうなるかと思った、子猫のほうも怪我がなくてよかったかな。

そして猫をロイドさんに渡し私たちはみんなを送るために受付に出る。

「アハハ、ありがとう お姉さんには助けられちゃったね。」

「ああ、俺からもお礼を言わせてもらおうよ。」

二人が私にお礼を言うてくる、体が勝手に動いただけだし正直に言おう。

リーシャ「いえ、とつさに体が動いたものですから。それに私が出しゃばらなくてシャーリイさんだったら子猫を助けていたと思います。」

「そ、そうなのか……？」

シャーリイ「へえ、わかるんだ？たしかにあのタイミングなら飛び込んだら助けられたけど……とりあえず、お姉さんのジャンプとダイナミックな胸の動きが見られたから満足かな。」

ま、またこの子は／／／

「ふふ。」

うう、リリースには笑われちゃうし……………／／／

「シャーリイ、お前な……………」



「ご愁傷様、リーシャさん。」

「あ、あはは……」

気にしない方がいいか……

「さて、そろそろ俺たちは失礼します、今日のご協力ありがとうございました。」

どうやらみなさん帰るようですな。

「ふふ、どうかお氣をつけて。」

みなさんが外に出ていく中シャーリイだけが残った。

「あ、ねえねえお姉さん。お姉さんのことリーシャって呼んでもいいかな？」

いきなり彼女がそんなことを言い出した。

「あ……、ええ。もちろん構いませんよ。」

「ふふ、ありがとリーシャ。それじゃあリリスもまったね〜。」

「はい、また。」

そう言い残しシャーリイは出て行った。

「（ランディさんの従妹……あれが噂の 血染めのシャーリイ……）」

私が一人で考え込んでいると……

「ふふ、彼女が気になりますか？リーシャ。」

リリスが微笑みながら聞いてきた。

「うん、少しね。」

「そうですね、でも今は気にしてもしようがないですよ、今は公演のことを考えましょう。リーシャの演技すごく期待しているんですから。」

そういつてリリースは私の手を握る。

「あ………うん、ありがとうリリース、私の演技………見てくれるかな？」

私はそんなことを聞いてみる。

「ふふ、当たり前じゃないですか。大好きなリーシャの演技を見ない理由なんてどこにあるんです？」

ああ、やっぱり私はリリースが大好きだ、いつも私が不安になっていると私のほしい言葉をかけてくれる。

「それじゃあしつかりがんばらないとね、リリースにも、そして見てくれる人たちのためにも。」

この後私はリリースのサポートのもと練習に打ち込んだ、けれど昨日黒月から来た情報が気になっていた、何者かがジオフロントで何かをしているという。

私はそれをリリースに話し、リリースも気になったのかついてきてくれると言った。

なんとか公演に間に合えばいいけど………

リ  
ー  
シ  
ャ

s  
i  
d  
e  
  
e  
n  
d

## 29話「初めての共闘、そして出会い」

日が暮れ夜の静けさが出てきた住宅街を一人の少女が歩いていた。

「えっと、たしかジオフロントの入り口はこの辺でしたよね……………」

短い黒髪を持ち真紅の瞳の少女、リリスである。

「リーシャはすぐ来ると言っていましたけど……………」

リーシャから何者かがジオフロント内でなにかをしているという情報聞き、リリス自身気になったのでリーシャに付いていくことにしたのだ。

「うゝ、すこし冷えますね、リーシャまd「おまたせリリス。」」

リリスの言葉に重ねてリーシャが到着したようだ、リリスは声が出た方向に向く。

「リーシャ、待ってます……………」

「……どうしたの？リリス。」

声のした方向に向いたリリスの前に現れたのは漆黒の外装に身を包んだ人物だった。

「え？リーシャ??」

リリスはその人物がリーシャだと信じられないのか疑問を並べる。

「あ、うん、これが私の銀としての姿だよ。」

「そうですか……ただ一言言わせてもらえば……その姿で普段のリーシャの言動ははつきり言って似合いませんね……」

それもそうであろう、気と内功で体型を変えているのかとても女性には見えない、そして顔を仮面で隠し、いかにも怪しい雰囲気を出すこの人物が音色を変えず、普段のリーシャのように喋るのだから。

「う……それを言われると……これでいいか？」

リーシャが銀の姿に合わせて声を変える。

「なんかかつこよくなりましたね、リーシャは声優にでもなれるのではないですか?。」

声を変えたリーシャの声を聴き、リリスがそう呟く。

「そんなものになる気はない、とつとと行くぞ、時間が惜しい。」

「なんかいきなり突き放した言い方ですね……………」

リリスが少し落ち込む素振りを見せる。

「え? ああリリスごめんね、そんなつもりじゃないの!。」

リリスが落ち込むのを見てリーシャが取り乱す、音色を変えず銀のままの声でこんなことを言う。

「……………ふふふ。」

「……………リ・リ・ス?。」

噴出してしまったリリスをリーシャが若干ドスの聞いた声を出しながら距離を詰める。

「ふふ、ごめんなさい、リーシャの反応が面白かったのでつい……ではいきましょうか、早く終わらないといけませんからね。」

「もう……そうだな、あまりここでモタモタするわけにはいかない。進もう。」

「はい、…………ふふ。」

「リリス……!」

まだ幼さの残る美少女と漆黒の外装に身を包んだ者がそういうやりとりをする、それがシュールな光景なのと言うまでもないだろう。

——ジオフロント内部——

「なるほど、扉はけっこうありますが迷うことはないようですな、誰かが先に進んで行ったようです。」



「そうらしいな、私たち以外にも暗躍する存在に気づいたものがあるというわけか。」

ジオフロント内部を二人が進む、するとその前に魔獣が数匹出てきた。

「どうやら静かに進めるといっわけではないようですね……手早く片付けましょう、銀さん。」

「ああ、よからう。」

なぜリリスがリーシャのことを銀さんと呼んでいるのか、それはジオフロント内に入ってすぐ二人が話し合って決めたからだ。

銀のことを直にリーシャと呼ぶわけにはいけない、まして銀と呼び捨てにするのはなぜかリリスが嫌だというものだからさんをつけて銀さんと呼ぶことにしたのだ。

文面だけみれば某少年ジャンプのあの人が思い浮かぶのは作者の気のせいだと思いたい。

「それでは、行きます!」

リリスが魔獣の群れに突っ込みクラフトを発動する。  
ちなみに配置はというと前に魔物が4体、その後ろに3体控えているという図である。

「一の舞、夜桜!!」

リリスのクラフトを受けた4体の魔獣が怯む、その隙をリーシャは見逃さなかった。

「来い!!」

リーシャが隠された暗器を魔獣に向かって投げ、魔獣を絡め捕り自身に引き付ける。

「せい!!」

引き寄せられたすべての魔獣にリーシャの剣の一閃が放たれる、攻撃を受けた魔獣は力なく倒れた。

「なるほど、数々の暗器を駆使し敵を確実に仕留める……これが銀の戦い方ですか。」

初めて見た銀の暗殺術にリリスは素直な感想を言った。

「ああ、だが今は話をしている時ではない！残りも殲滅するぞ。」

「ふふ、わかっていますよ、銀さん、いけますね？」

「フ、当たり前だ。」

リーシャがそう言った瞬間、リリスとリーシャが左右に動く。

「この一撃で終わらせます！」

「合わせろ！リリス！」

二人が左右から魔獣へと突進しほぼ同時に強力な一閃を放つ。

「幻桜迅龍撃！！」

リリスとリーシャのコンビクラフトが魔獣に決まる、煙が晴れたころにはすでに魔物の姿は消えていた。

「ふう、終わりましたね、怪我はありませんでしたか？」

「フ、誰に言っている。」

「ふふ、そうですね、心配は無用でした。」

二人で会話をしながら奥へ進んでいると一人の少女がリリスの目に入った。

「おや……誰か……いますね。」

「うん？……あれは……」

「知り合いですか？……あぶない！！」

今まさにその少女の死角から魔獣が攻撃しようとしていた。

リリスの叫びが少女に届いたのかこちらを振り向く、しかし魔獣には気づかない。

「まずいです……あのままじゃあな」まかせろ。「え？」

リリスが動こうとしたが先にリーシャが動いた、リーシャは懷から札のついた苦無を取り出し魔獣に向かって投げる。

「爆雷符！」

苦無は魔獣に直撃し小規模な爆発を起こした後魔獣は倒れた。

「あ…………えっと…………」

少女が魔獣の倒れたほうとリリスたちを交互に見ながらオドオドしている。

「ふふ、危ないところでしたね、大丈夫でしたか？」

リリスが少女を安心させるように優しい口調で話す。

「あ、はい、助けてくださってありがとうございます。」

「いえいえ、というよりあなたを助けたのは彼ですよ？」

リリスはそう言いリーシャの方を向く。

「そうですね……………お久しぶりですね、銀さん。」

「そうだな、ウルスラ病院での時以来だったか。」

「お知り合いだったんですね……………ところであなたは……………」

リリスはこの少女がリーシャと知り合いということに驚いたが名前を知らないで先に聞くことにした。

「あ、そうですね、ティオ・プラトーです。よろしくです。」

「ティオさんですね、私はリリス・プラティエです、よろしく願いします。」

リリスもティオに続き名前を言う。

「……………プラティエというと……………もしかして……………」

「思ってる通りかと、私はイリア姉さんの義理の妹です。」

またしても驚いたか、とリリスは思う。

「すこし驚きました、あのイリアさんに妹さんがいたなんて……………」

「まあ私は最近クロスベルに来たのでそう思われても仕方ないんですけどね。」

「なるほどです、……………つと、こんなところで話し込んでわけにはいきませんでした。」

「そうだな、時間が惜しい、先に進むぞ。」

「そうですね、ティオさんもこの奥に用事があるようですね、よければ一緒に行きませんか？」

リリスはティオが一人で進んで行くには少し大変だろうと思い共に行動するよう促す。

「そうですね、私一人だとさっきみたいなことにもなりそうですね、お言葉に甘えさせていただきます。」

「ふふ、わかりました、しっかりお守りしますよ、ティオさん。」

リリスが満面の笑みでティオに言う。

「／／／わかりました／／／」

「…………おい、いつまでそうしてるつもりだ。」

若干怒ったような声でリーシャが二人に向かって言う。

「???そうですね、行きましようか。」

「はい／／／」

リーシャが怒ってるようにリリスは感じたが深くは考えなかった、ティオの手を握り奥に向かって歩き出す、ティオは最初は動揺していたがその手を強く握り返した、握り返してきたことをリリスが気づくと嬉しくなったのかティオに向かって軽く微笑む。ティオは顔を赤くしたがすぐ笑顔になった、しかしそれを見てリーシャが少し不機嫌になりはしたが羨ましいとも思ったのは言うまでもないだろう。

リリスとティオは自分たちのことをお互いに話した。  
ティオが特務支援課のメンバーだったこと、リリスがロイドたちと



知り合っていたことをたくさん話した。この話しているとき二人は口に出さず思っていることがあった。

「（この子（人）はもしかして……………」

おそらくお互い教団にいたという過去もあり、引き寄せられる何かがあったのだろう、だが二人がお互いの過去を知るのはまだ先になる。

リリスとリーシャ、そしてティオは奥へと向かっていく。

リリスは思いもしなかった、まさかこの騒動を巻き起こした張本人が自分のよく知るあの人だということに。

「ところで……………お二人は一体どういう関係で？」

「聞くの遅いですね（だろ）」「」

### 30話「蛇の陰、道化師の暗躍」

リリース side

みなさんこんばんわリリースです。

今私は漆黒の外装に身を包んで銀の姿をしているリーシャと、ジオフロントを進んでいる中で知り合ったティオさんと一緒に進んでいます。

「あ、目的地はここです。」

「ここ………ですか、なんか様子がおかしくないですか？」

ティオさんがここだと指定した場所明らかにおかしい、火事が起きているのか煙が出ている。

「ふむ、なにかあったとみるべきか………」

「そうですね、見た限り扉が何らかの形でロックされてるみたいですね。」

ロックですか、ハッキングの類でしょうか。

「何者かのハッキング……でしょうか？」

私はティオさん聞いてみる。

「はい、おそらくは……よいしょ。」

そういつてティオさんが取り出したのは小型のノートパソコンです。

「これでなにが起きているのかを調べます。」

「なるほど。」

うわぁ、ティオさんキーボード打つの速いですね、これもやはり後天的な情報処理能力なのでしょう。

「見つけました……これは。」

「え、これって……」

画面に映ったのは特務支援課の誰かとハッキングをした何者かが戦っているぼむつとの対戦画面でした。

「ロバート主任が開発したゲームですね、おそらく勝てば出してやるとか言われたのでしょうか。」

ありそうですね、ていうか相手のこのシルエットって……

「あの人だったんですね……………」

「うん？　なんか言ったか？」

「いえ、なんでもないですよ。」

これはおそらくカンパネルラさんの仕業でしょうが今は黙っておきましょうか。

「あ！、ロイドさんが勝ったようですね。」

ほんとですね、ロイドさんが接戦ながらも勝利を収めました。その時ハッキング者であるう人の声が聞こえてきた。

「やれやれ、ちょっと手を抜きすぎたかな。」

「……なんとも能天気な声ですね……」

「あはは……」

はい、これはもうしょうがないですよ、あの人はいつもこんな喋り方ですし。

「でも、このまま黙っているわけにもいきませんね。」

「どうするんです？」

「はい、今からこちらからアクセスをかけてこの戦いに横やりを入れて私が代わりに戦います。」

「なるほど、ティオさんなら勝てますねきっと、がんばってください。」

「……………はい／＼／」

あれすこし顔が赤くなってしまいました、さっき手をつないだ時も赤くなっていましたけど風邪とかじゃないですよね……………

「……………」

リーシャのほうからなにか視線を感じますがなんでしょう、怖いです……………

さて、今はティオさんの戦いを見守るとしましょうか。

リリース    s i d e    e n d

ロイド    s i d e

ふう、なんとか一勝を勝ち取ることができた。

「なかなかやるね、じゃあ次は本気を出させてもらおうよ。」

「くっ！」

くそ、早く終わらせないとこの部屋ももう持ちそうにない、俺が2回戦目に取り掛かるうとしたとき。

「いい加減にしてください。」

「!？」

「あ……！」

「この声は……！」

「ここから先は私が相手します。覚悟してください。」

間違いない、ティオの声だ！

ティオが俺の代わりに戦ってくれた、勝敗はティオの圧勝だ、てかティオのやつ強すぎる！

「や、やった……！」

そんなことを思いながらも俺の口からは安堵の言葉が出た。

「くっ……そろそろヤベエぞ!？」

そつだな、喜んでいる場合じゃない、早くここから脱出しないと!

「ウフフ、お見事。一応お仲間みただし約束どおり出してあげるよ。それじゃあ、またね」

結局こいつの正体もわからないまま終わるのか………そんなとき予想外の人物の声が聞こえてきた。

「まってください、一言言わせてもらってもいいですか?」

この声は………リリース?

「この声ってリリースちゃん?」

「どうしてリリースさんが?」

みんなも疑問に思ってる、そこで返事が返ってきた。

「なんだい?」



「いえ、ただ……ポムツと、弱いんですね。」

「……………うるさいよ！、しょうがないんだよ、僕もそんなにやりこんでるわけじゃないしね。まあそんなこと話してる場合じゃないでしょ、今度こそ、またね。」

意外と相手も子供っぽいやつなのかもしれない……………  
ここで通信が切れた、扉が開いたみたいだ。

「開いた……！」

「急げ、爆発するぞ！」

「はいっ！」

俺たちは扉に向かい走る、くそ、間に合ってくれ！  
そして俺たち全員は外にでる。

「伏せろっ……！」

「くっくっくっ！」「くっく」

「ードガー——ン！——」

激しい爆発が響く。

どうやらみんな無事みたいだな。

「はあはあ……」

「つたく、危機一髪だな……」

「し、死ぬかと思いました。」

「クッ……一体何者だ……！？」

みんなも相当疲れているみたいだな、ダドリーさんは犯人の事を考えているようだ、さすがは捜査一課のエースだな、そんなとき聞きたかった俺たちの仲間の声が聞こえた。

「よかった、ご無事みたいですな。」

やっぱり、

「ティオ！」

「や、やっぱりティオちゃんだったの！」

「おいおい、一体どうなってんだ！？」

みんなティオだと思っていただけで驚いている。

ティオはすこし微笑み俺に手を出してくれた、俺はその手をつかみ立ち上がる。

「実は今日の午後、クロスベル行き国際定期船に乗ったんです。色々、大変そうだったので何とか帰国を早めてもらいました。」

「そうだったのか……」

いや、ほんとに助かった、ティオが来てくれなかったからどうなったかわからなかったからな。

「ハハ……まさにドンピシャじゃねえか。」

「じゃあ課長さんから話を聞いてここに来たんだ？」

「ええ、エニグマで連絡したらこちらに向かったと聞いたので。それで空港から直接来ました。」

「ふふ、本当に助かったわ。」

「ありがとう、ティオちゃん！」

みんながお礼を言う。

「いえ、間に合ってよかったです。それにしても厄介な相手だったみたいですね。なんとか割り込みをかけて撃退することができましたが……」

「割り込みって、ああそれか。」

ティオの向こうに小型のパソコンが見えた。

「ええ、ロイドさんたちが閉じ込められたと分かったので予備回線から介入しました。どうやら相当な腕前のハッカーだったようです

ね。」

「ああ、そうみたいだな。」

「一体何者だったんだ？それにリリースは……あれ？リリースはどこに……」

「フン、どうやらとくに離脱されてしまったようだが……」

そこでダドリーさんが何かに気づいたように言う。

「そういえばプラトー、一人でここまで追ってきたのか？」

あ、それは俺も気になっていたことだ。

「あ、いえ……たまたま居合わせたのでここまで同行させてもらいました。」

「へ……」

俺がすこし抜けた声を出したあとよく知った二人が出てきた。

ロイド    s i d e    e n d

リリース    s i d e

「いえ、たまたま居合わせたので同行させてもらいました。」

おや、言われてしまいましたね、逃げると怪しまれそうですし、出ていきますか。

「どうやら出ていかないといけないみたいですよ。」

「ああ、しかしとんだ場面に居合わせたみたいだな。」

そして私たち二人はみなさんの前に出ます、みなさんの顔がどんどん驚きに変わっていきますね。

「リリース……それにあなたは……！」

「あ、あの時の……！」

「銀……！」

おやおや、どうやらなにか因縁めいた感じのようですね。

「……取り逃がしたか。どこのネズミかは知らんが相当、抜け目がないようだな。」

抜け目がないですか………たしかにその通りですね、あの人は神出鬼没が服を着て歩いているようなものですからね。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ここにいたハッカーは黒月の関係者なのか！？」

ロイドさんが聞いてきます、まったく違いますね、まあ知らなくても仕方ないでしょうけど。

「いや、縁もゆかりもない者だ、おそらく赤い星座とも関係があるわけではないだろう。」

リーシャも結社についてある程度知っているのでしょうか………いえ、おそらく知らないでしょう。

「なに!？」

「なんでアンタにそんなことがわかるってんだ？」

「フフ、黒月と赤い星座は既にお互い監視体制に入っている。少なくとも、そのハッカーとやらはどちらにも属していないはずだ。どうやら通商会議に何か思惑があるようだが。」

「……!」

ロイドさんが何かに気づいたようです、なにか見つけたのでしょうか。

「端末に映っていたオルキスタワの図面……」

「なるほど、まさに明日の会議の場所だね。」

そついうことですか、テロリストたちだけではそこまでできないとは思っていましたが、そこであなたが手を貸すんですね、まあよく動く駒程度にしか思っていないと思いますけど。



「……………会うのはこれが初めてか。クロスベル警察、捜査課、アレックス・ダドリーだ。」

この人が噂の……

「フフ……噂はかねがね。通商会議の警備では色々苦勞しているよ  
うだな?」

リーシャ……挑発ですか?

「フン、とこそその組織を始め、怪しげな連中がいるものでな。どう  
やらそちらの動きに色々と通じているようだし……」

おや、リーシャの方に銃を向けましたね。

「ここは一つ、警察までご同行願って話を聞かせてもらおうか?」

「ダドリーさん……」

「おいおい……マジかよ?」

みなさん驚いていますね、というよりもそんな簡単に逮捕できる世の中ならクロスベルがこんなことになってならないですよ……

「フフ、何の容疑で？クロスベルの刑事法に抵触した覚えはないのだが。」

「なに、任意の事情聴取だ。後ろめたい事がないならぜひ来ていただこうか！」

そういつてダドリーさんがリーシャに向かっていきます、無駄ですね、なぜなら今のリーシャは……

リーフォォーナー

「フン……」

分身ですから。

「……いつの間に。」

「へえ、符術を使った分け身ってやつか。」

「……今宵はこれでさらばだ。また近いうちに会えそうな気がするがな。」

そういつてリーシャはいなくなりました、私のことは置いてくれと言ってあるので先に帰らせました、私といるとリーシャがもしかしたら疑われることもあるかもしれないですからね。

「ロイドさん、付近をサーチしますか？」

「いや……その必要はないだろう。」

「とりあえず支援課に戻って話し合う必要がありますですね。」

「ああ、不本意だが仕方あるまい……だがその前に。」

ダドリーさんの視線が私を射抜く。

「君は……まあいい、戻って色々と聞かせてもらおうか。」

「それはできませんね、私はこれから大切な用事があるので。」

「なんだと……」

ふむ……すこし助言だけして消えますか。

「先ほど 銀 さんが言った通りあのハッカーは 黒月 と 赤い 星座 ではありません。」

「なぜお前にそんなことがわかる？」

「さあ、どうでしょうね、ただ一つ言わせてもらつとすれば……」

「？」

ダドリーさんだけでなくほかのみなさんも私の言葉を待っていますね。

「 黒月 と 赤い星座 の2つの勢力だけを警戒しては……  
……」

そこで私は一呼吸置き……



### 31話「2日目の終わり」

リリス side

「はぁはぁ、すこし遅くなってしまいましたね……」

舞台袖でしょうか、行ってみましょう。

「えっと……あ！いました、姉さん、リーシャ。」

二人が私に振り向く。

「あ！リリス、遅いじゃないの！」

「遅かったね、心配したんだよ？」

「すみませんでした、でもなんとか始まるまでに戻ってこれましたよ。」

それだけはよかったです、始まってから戻っては後で何言われるかわかったものではないですから。

「まあ、始まる前に戻ってくれてよかったわ。さてさて充電よ。」

ーギョッー

「ふえ／＼もう……姉さん。」

私も姉さんを抱きしめ返す。

「ふふ、これでいつも以上に頑張れるわ！見ててね、リリース。」

「はい。」

ふふ、こんなことしなくても姉さんならいつでも絶好調でしょうに……

「リリース……」

リーシャも私に何か言いたいことでも……ああなるほど。

ーギューッー

「あ／＼リリース。」

「ふふ、リーシャも充電です、がんばってください。」

「うん、ありがとうリリース。」

リーシャも笑顔になりました、やっぱりリーシャには笑顔が一番ですよ。

「それでは二人とも、もうすぐ始まりますよ、頑張ってくださいね！」

「ええ（うん）」

こうして二人は舞台に立つ。

舞台に立つ二人は本当に綺麗だった。

見る人すべてを魅了するとこのことなのでしょうね。



「姉さんが力強い太陽なら、リーシャは静かに輝く美しい月ですね。」

二人の姿を見ながら私を本当にそう思います。

この二人は本当に綺麗で……汚れた私なんかが傍にいて……本当にいいのかな。

「ダメです、こんなことを考えるのは私の悪い癖です、私はずっとそばにいますよ、絶対に。」

そうだ、私はもう迷わない。絶対に守って見せる。

その時私は強く誓った、絶対にこの二人を守ると。

この日リリースは二人を、そして関わった自分を大切に思ってくれる人達を守るという誓いを立てた、だがこの強い思いが、最愛の姉、そしてリリースが関わったすべての人たちとの絆を断ち切らせる原因になるということをリリースは知る由もなかった。

リリース side end

?? side

「ふむ、奴は今クロスベルにいるようだな。」

暗い広い部屋でフードを被った女がいた、そしてその横にも二人が付き添っている。

「では……もう？」

左に寄り添う小柄の少女が言う。

「いや、まだ私たちは動かない、クロイス家の者どもの計画が終わってからだ。」

「……了解しました、しかし、よくこのようなことを再現できましたね、あれに関する資料はすべて157番が処分したのではなかったのですか？」

そう言った瞬間フードを被った女が笑いながら言う。

「ああ、たしかにあの時奴はロッジと共に全てを焼き払った。だがな。」

「？」

女が服の下から冊子を取り出す。

「あそこにあつた資料はすべてフェイク、つまり偽物だ。」

「！？なぜ……まさかあなるということがわかってたとしても言うのですか？」

「ああ、あの時私はあそこにいた人間を一人洗脳し、奴に言わせたのさ、大切な人を殺せとな。」

「はい、それは私もしています。ですがそれがなにを……」

「なに、簡単なことさ、あの時奴の心の支えが死ぬことで奴の心は完全に星光の殲滅者と同化する、それが狙いだっただよ。」

「そのためだけにあの子の前であそこにとらわれていた全ての子供を殺し、なおかつ友人を殺させ、そしてロッジを破壊させたと。」

「フフ、その通りだよ、あの時の映像はお前も見ただろ？あの威力はまさしく闇の力の一部だ。」

「なるほど……」

「フフ、精々今は束の間の幸せを味わえ、リリス・プラティエ。」

女はフードを外し、更に声を上げて言う。

「時が来れば……そうだな、まずはお前の姉の命を刈りましょう。そしてそのつぎは……ククク、アハハハハハハ！」

女の狂った声が部屋中に反響する。

その笑い声を聞きながら小柄な少女は後ろを振り向く、そこには二つのカプセルがあった。その中にはそれぞれリリスと年が変わらないであろう少女達がいた。

片方は緑色の髪を腰くらいまで伸ばした少女、もう片方は青色の髪を首ほどまでに伸ばした少女だ。

「（ごめんなさいね、リリス。私は結局あなたを救うことはできなかったのかもしれないわ。）」

少女が一滴の涙を流す、この涙は誰を想って流しているのだろうか。

「フフフ、さて、次の実験に移るとするか、行くぞ、“リリース”！」

「……………はい。」

?? side end

### 32話「月の僧院」

リリス   s i d e

今日はついにゼムリア通商会議、街の中もあわただしくなってきました。

おそらくすべてが動き出すのは昼過ぎくらいでしょうしそれまで何をしましょうか……

「うーん……おや？あれは……」

私の前に映った人影、シスター服を着ています、あちらも私に気づいたようですね。

「おはようです、リースさん、どうかしたんですか？」

「おはようございます、リリスさん、特にどういふこともないのですが……」

なにか事情がありそうなので私は聞いてみることにしました。

――少女説明中――

「なるほど……マインツに向かう途中の月の僧院で怪しい動きが……」

月の僧院……出向いたことはないですけど、たしか教団と関わりがあった場所ですね……

「はい、なのですこし様子を見に行こうかと。」

「ふむ、もしかしてリースさん一人で行くつもりだったんですか？」

「ええ、今のこの地には私が頼れる人は……いるのはいるのですが立場をお願いするわけにもいかないもので。」

「そうでしたか……」

うーん、聞くところによればリースさんは聖杯騎士団の従騎士らしいので実力はあるようです、ですが何が起こるかわからないので一人で行かせるのはすこし心配ですね。

「ならリースさん、私も一緒に行ってもいいですか？」

「え？でも私事に巻き込んでしまっわけには……」

「大切な友人をそんな怪しいところに行かせてしまうのは心配なんです、リースさんの実力がある程度あるのはわかります、それでも私は一緒に行きたいですよ。」

リースさんが心配、それももちろんありますが、何よりすこし興味がありますからね。

「……わかりました、ではリリースさん、ご一緒に付いてきてもらえますか？」

「ふふ、喜んで」

こうして私とリースさんは二人で月の僧院の調査へと出かけていきました。

――少女移動中――

「さて、着きましたね……なんか嫌な感じがします。」



「そうですね、上位三属性の気配がここからでも感じ取れます。」

上位三属性ですか……それだけでも怪しいですね、ですがここは一度特務支援課の方たちが鐘の音を止めたと聞いたのですが……なにかの実験のために再度ここを？……今の時点ではあまりわかりませんね。

「こうしていても始まりませんね、行きましようか。」

「そうですね、参りましよう。……これは。」

「うん？ああ、行き止まりですね、立ち入り禁止と書いてありますね。」

「ですがここまで来て戻るわけには行きませんから……よいしょつと。」

そういつてリースさんは障害物を通り越して向こう側にいきます……リースさんって意外と思い切りがいいんですね……

「さて……私もいきましようか。」

二人で橋を進んで行くと入口へと到着する、扉を開けて入ろうとするが……

「あれ……鍵がかかっているようですね。」

「ふむ……ではあちらから入りましょうか。」

リースさんが指を差したさきにはもう一つ扉があります、若干ではありますが扉が開いてますね、あそこからなら入れそうです。

「たしかに鍵はかかっていないみたいですね、行きましょう。」

こうして私たちはやっと僧院の中に入ることができました。

「気配が……けっこうありますね。」

「はい、それに上位三属性の反応をかなり感じます。」

「前に話してくれた影の国みたいな感じですか？」

「そうですね、たしかに似ているとは思いますが。」

「なるほど……では少し警戒していきましょうか、何があるかわかりませんし。」

私たちは僧院の中を進んで行く、すると少しして魔獣が数体出てきました。

「私としては楽に進みたかったですけどそうもいかないみたいですね。」

「そのようですね、来ます！」

私は刀を構え、リースさんは法剣を構えます。

「早々に終わらせますよ！はあ！！！」

前方にいた2体の魔獣を斬撃で怯ませる、そして

「アーツ、ゴールドハイロウ！！！」

リースさんが空属性のアーツを放つ、効果抜群のようですね、魔獣

が消えていきます。

「すごい威力のアーツです、さてと、残りは一体。」

私は残りの魔獣の元へと向かいクラフトを発動する。

「二の舞、雪花!!」

すべての斬撃が敵の急所を貫く、そして魔獣は倒れる、だが……

「? なにか喋ってる……………これは呪詛?」

なにかの声が聞こえる、不気味な何かが、その瞬間私の足元の空間が割れた。

「えっ?」

「いけない! A - リフレックス!!」

私はリースさんのアーツでできた魔法障壁の守りによりその攻撃を受けずに済んだ…………

「今の一体……」

「今のはおそらく、倒されると同時に発動する即死能力を持つアーツでしょう。」

「なるほど……」

今リースさんの助けがなかったらと思うとゾツとする、リースさんがいなければ私は間違いなく死んでいたのだから。

「助かりましたリースさん、もしリースさんがいなければ私は……」

「いえ、リリースさんを助けることができ私自身ホツとしています。でもつぎからh「グウー」……ノノノ」

えっと………今のはもしかして………

「リースさん………もしかしてお腹がすいているのですか？」

「……すみません、何分急いでいて朝はなにも食べていなかった  
ので……」

それはそれは……あ！そういえば朝作ったマフィンを持ってました。

「よろしければ今マフィンがあるので一緒に食べましょうか。」

「！……いえ、しかし……」

「ふふ、遠慮しないでください、二つあるので二人で食べましょう。」

「……ありがとうございます、この恩はいつか必ず。」

そこまでしてくれなくてもいいのですけどね……

私たちは二人でマフィンを食べた後先に進み始めた、リースさんが  
マフィンをすごく幸せそうに食べていた姿はすごく可愛かった。

ある程度進んで行くと大きな広間に私たちは出た。

「……」

「どうやらあの階段を上った先が鐘の場所のようですね」

私たちが動こうとした瞬間

ーゴーンゴーンー

いきなり響いてきた鐘の音が私たちの耳に届く。

「鐘の音!？」

「急激な上位三属性の上昇です、なにか来ます!!」

私たちの前に魔法陣が展開され、現れたのは大型の悪魔だった。

「これは……悪魔？」

「はい!それかなり上位のもののようにです!」

上位の悪魔ですか……それなりに力もありそうですね。

「ですが立ち止まるわけにはいきません！参ります！！」

「行きましょう！！」

私たちはそれを合図に悪魔へと向かっていく。

「はあ！！」

私は悪魔を切り付ける、しかし

――カン！！――

「硬いですね…………ちっ！！」

予想外の硬さにすこし驚いた私に悪魔が殴ろうと腕を突き出す、それを私は後ろに飛び退きかわす。

「ガリオンタワー！！」

飛び退いた私を確認したのかリースさんがアーツを放つ。



「ナイスなタイミングですね、けっこう効いているようです。」

リースさんのアーツは悪魔にかなりのダメージを与えたようです、ですがまだまだ元気ですね。

「……どうやら常時回復が働いているようです、一気に終わらせないとダメのようです。」

常時回復ですか、厄介ですねまったく。

「ならより威力の大きな攻撃でいきますか、ルシフェリオン！」

私はルシフェリオンの名を呼び杖を呼び出す。

「それが……あの話に出てきた………リースさんの力。」

「生半可なものではダメ………なら！」

ルシフェリオン・ブレイカーは時間がかかるのでこの場では無理です。ならあれですね。

「ブラスト・ファイヤー!!」

小型の収束砲が悪魔へと直撃する、体勢を崩し悪魔は倒れる。

「よし！行きましようリースさん！」

「はい！」

私たちは二人並び前方に魔法陣を展開して詠唱を開始する。

「集え星光の輝き、全てを浄化する蒼天の光となれ。」

膨大な力が集まるのがわかります、とても温かいなにかが、さあ、これで終わらせましょう。

「セイクリッド・ブレイカー!!」

強大な砲撃が悪魔を包む、煙が晴れたときすでに悪魔の気配はなかった。

「ふう………なんとかおわかりましたね、怪我はないですか？リースさん。」

「私は大丈夫です、リリースさんのほうこそご無事ですか？」

「私も大丈夫です、心配してくれてありがとうございます、リリースさん。」

「いえ／＼それなら私も安心です／＼」

おや、顔が赤いですね、前もこんなことがあったような……

「こほん／＼さて、早く鐘の音を止めましょう。」

「わかりました。」

私たちは悪魔が現れないか最善の注意を払いながら階段を上がっていく。

すると一つの嫌な波動を放つ鐘がありました。

「これが原因の鐘ですか。」

「はい、クロスベルの中央広場にあるものを変わらないもののようなのですが。」

たしかに似ていますね、何か関係があるのでしょうか、そういえば星見の塔の上にも鐘があるというのを聞いたことがあります。

「クロスベル……月の僧院……星見の塔……あれ？」

そういつて私はクロスベル全土を写す地図を広げる。

「どうかしたんですか？リリスさん。」

「いえ、ただ……これを見てください。」

私はそう言いクロスベルと月の僧院、そして星見の塔を直線で結んでみる。

「これは！？」

「思った通りです、クロスベル市を囲むように鐘の二つの場所があ

ります。」

「……………待ってください、そういえばミシユラムにもこれに似た鐘があると聞いたことがあります、なんでもアトラクション用のもののようなのですが。」

「ミシユラムですか、ではそれも見ないでみましょうか。」

そうして私はミシユラムからも直線を引いてみる

「これもクロスベルを囲むようにあるのですね、あと一つ場所が開いているみたいですがこちらはたしか古戦場があったはずですがあそこに鐘があるとは聞いたことがないですけど。」

たしかにそうですね、でも

「人為的に鐘をあそこに移動させれば……………どうでしょうか。」

「……………たしかにそうすれば四つの鐘でクロスベルが囲まれることになりますね。」

「はい、これが何を意味するのかまったくわかりませんが、リ

「リスさん……これは何かの偶然なのでしょうか。」

「わかりません、ですがこうして考えてみると何か意図があるように思っていますね。」

「一体これは何なのでしょう、何か意味があって鐘が設置されているのか、それとも何も意味がなく置かれているのか……」

「今はまだ考えても仕方ないですね、早く鐘を止めてしまいましょうか。」

「そうですね、ただ止めるだけではダメです、ここは私に任せてください。」

「？わかりました。」

私が少し離れるとリスさんが詠唱を始めた、なにか術でしょうか、少し光ったと思ったら鐘から波動が消えて音も止んだ。

「リスさん、今は……」

「今のは教会に伝わる魔の力を封じ込める法術です。」

「なるほど、たしかにあの嫌な空気も消えたようですね、これおしまいでしょうか。」

「そうですね、もうここはこれで大丈夫でしょう、ただ……先ほどリリースさんが言った鐘の配置がすこし気がかかりますけど……」

「ふふ、それは私なのですが今はまだ何もわかりません、そろそろ戻りましょうか、教会まで付き添います。」

「ありがとうございます、リリースさん。それではお言葉に甘えさせていただきますね。」

こうして私たちは僧院での異変を解決し、リースさんを教会まで送っていくことにした。

リリース    s i d e    e n d

カンパネルラ    s i d e

「聖杯騎士のお嬢さん……そしてリリースか。昨日のことといいやつてくれるじゃないか。」

特務支援課の諸君が来るかと思ったけどリリスだったのは少し予想外だったかな、でもまあそれでも彼らが今回の計画のキーパーソンなのは変わらないだろうね。

「それにしても……………」

なにより驚いたのはリリスだね、まさかそこまで気づいてくるなんて。

「レーヴエを超える力と凄まじい洞察力、あの人がここまで入れ込むのも分かる気がするなあ、もちろん僕もだし、そして 盟主 もね。」

最初リリスを欠けた使徒の代わりに、という意見があそころはあった、でも 鋼の聖女 が使徒ではなく自身の傍に置く執行者にとあまりに強く言うものだから誰も何も言わなかった、結局リリスは僕たちの元には来ないで家族の元を選んだだけだね。

……………ねえリリス、どうしてあの人はあそこまで言って自分の傍に置きたかったと思う？

「それはね……………君を守るためだよ。」



リリスは 鋼の聖女 や僕たちに過去のことを話そうとはしなかったけど、レンを見る彼女を見ていたら皆ある予想ができた、もしかしたらリリスもレンと同じく教団の被害者なのではないかって。

そして調べてみると、かなり苦労したけどリリスが教団に攫われたという事実があった、そして……

「リリス、君に行われた儀式のことね。」

そしてさらに調べた結果、その儀式を進めていた黒幕がまだに見つかっていないということもその時にわかったことだったね。だから僕たちは考えたのさ、奴らはまたいつかりリスを求め動き出すんじゃないかってね。そしてそれは予想通り、もうすぐ奴らは動き出すということを知った、でも残念ながらどんなふうに行動を起こすかが僕たちの情報網をもってしても知ることはできなかった。

「リリス、君は優しすぎる、大切な者のためなら喜んで自分の身を捧げてしまうほどに……でもね、これだけは思っていてほしいな、君がいなくなれば……悲しむ人が多いということをね。」

いつもふざけているかのように見えるカンパネルラだが今この時だけは誰かを想う表情をしていた。

「さて、僕の方もそろそろ戻ろっかな、今日は駒が動き出す日だからね。」

一旦曇った表情をしていたがすぐに無邪気な子供のように笑みを浮かべて姿を消した。

カンパネルラ      s i d e      e n d

### 32話「月の僧院」(後書き)

作者「なんか人の心配をするカンパネルラってらしくないよね。」

カンパネルラ「酷いな、僕だって心配くらいするさ。」

作者「それってリリスの事が好きだからとか？」

カンパネルラ「どうかな、でもまあなぜ僕がリリスの事をそんな風に心配してしまうのかは過去にあるんだけど……」

作者「まあ四章であることが起こりリリスはしばらく物語にはまったく出てこなくなるからそこでリリスの過去話を入れようとおもってるんだ。」

カンパネルラ「へえ、てかいいのそれ、けっかしネタバレじゃない？」

作者「まあそこはご愛嬌で、じゃあ今日はこの辺で」

カンパネルラ「しょうがないな、それじゃあみんな、またね」

### 33話「闇の創生計画」

リリス side

リースさんを教会まで送っていき私は今行政区のあたりをうろろろとしています。  
こうしている私ってオルキスタワーの警備をしている人からしたら不審人物ですね……

「さて、時刻は10時……通商会議が始まるまでまだ時間がありますね。」

通商会議は昼からですし何をしましょうか。  
なんかあれですね、暇を持て余す子供みたいです……とそんなとき。

ートウルルルルー

「うん？誰からでしょう……」

突然私のエニグマに電話がかかってきました。

「はい、どなたでしょうか？」

「こんにちわですわ、リリースさん。」

あ、この声は……

「……おかしいですね、マリABELさんに番号を教えたはずはないんですが……」

「うふふ、それは気にしてはダメですわ、それよりリリースさん、これからお昼までお暇ですか？」

「そうですね、ちょうど暇を持て余していたところです。」

「それはよかったですわ、これからリリースさんとお話したいと思っていますでしたの、余興も兼ねていますが……」

「余興？」

余興………なにか怪しい聞こえですが今から行動を起こすというのも妙ですし……

「それはこちらに來られてから話しましょう、よろしいですね？」

「……………わかりました、IBCでいいのですか？」

「ええ、受付にはすでに言っております、リリースさんなら顔パスで入れますわ。」

そこまで私ってマリアベルさんに信用でもされているのでしょうか

……………

いいえ、マリアベルはリリースに確かな好意を持っています。

この後私はマリアベルさんとの電話を終えた後、IBCへと向かった。

受付に行く前に私に気づいたのか受付の人が駆け寄ってきたのには驚いた、顔パスってこんな感じなのですね……………

——少女移動中——

「ようこそお越しくださいましたリリースさん、ささこちらへ。」

「お……………おじゃまします。」

私はマリアベルさんが指定した場所、つまりマリアベルさんの隣の隣なんですが……別に向い合せてもよくないですか？

「ささ、リリースさん。」

「えっと、向かいでは……」

私は無理だなと思いつつも提案してみる、がんばれ私！

「私の隣は嫌なんですの……？」

「……喜んでお隣に座らせていただきます。」

数十秒前の私の予想は正しかったです、普段Sっ気のあるマリアベルさんが涙目で上目使いですよ？これがどれほどの破壊力を持っているかわかりますか！？それに普段の髪型はサイドをクルクルにした感じなんです、なぜか今日は解いてウェーブをかけた感じですし……とりあえず言いたいことは普段とは違うということですね。

「ふふ、久しぶりのリリースさんですわ。」

そういつて隣に座った私に抱き着くマリABELさん。

「久しぶりって……昨日お会いしましたよね……」

「雰囲気は大事なのですわ!」

「……………そうですか。」

そういうもののなかでしようか、昔姉さんも1日明けの時似たようなことを言っていた気がします。  
そこでふと思い出したのかマリABELさんが話す。

「あ、そうでしたわ、先ほど電話で話した余興というのは宝探しですの。」

「宝探し?」

「ええ、リリースさんならご存知でしょうが…………… 怪盗紳士 ですわ。」

ああなるほど、宝探しってそういうことですか、そういえば私って



昔一度泣かされたことがあるんでした……

「なるほどです、あの人もよくやりますね、私も昔大切な物を隠されて泣いてしまった記憶があります。」

「……………」

「マリアベルさん？」

「……………いえいえなんでもありませんわ、ただ……………こんなに可愛いリリスさんを泣かしてしまったあの怪盗をこの依頼が終わったら私の城にご招待なんて思っていないせんわ。」

「……………城ってなんですか、てか怖いですよマリアベルさん、黒いオーラが見えます……………」

「ま、まあ見つけることもできたからいいですよ、あの時はアリアさんとエンネアさんたちと一緒に探してアリアさんが見つけたから……………」

あの時はほんとに大変でした、どこを探しても見つからずそれを見かねたのかアリアさんたちまで探すのを手伝ってくれて……………ていうかあの時の騎士甲冑を纏った4人が椅子の下とかを探すのはシユ

「ルな光景でしたね……」

「あの 鋼の聖女 が宝探し……見てみたいですね……」

「あはは……（ウトウト）」

「あら、眠いのですか？ リリスさん。」

「はい、実は今朝からすこし遠出をしまして……それでしょうか、疲れているようです。」

朝から月の僧院まで行って戦闘したのですから当然ですかね……

「本当はもっとお話したかったのですが……そうですね、リリスさん私が肩をお貸ししますのですこし眠られてはいかがでしょう？」

「え……でもご迷惑ですよ。」

「構いません、リリスさんも寝不足なんて理由で体が動かないなんて困るでしょう？」

む、たしかにそうですね………それでは。

「ではマリアベルさん、すこし肩をお借りします。」

「ふふ、どうぞ。」

こうして私はマリアベルさんに寄りかかり自分でも信じられないくらい早く眠ってしまった。

リリス   s i d e   e n d

マリアベル   s i d e

「おや、もう眠ってしまったんですね。」

リリスさんが私に寄りかかりすこしするとリリスさんは眠っていましたわ。

規則正しいリズムを刻む可愛い寝息が聞こえてきます。

「ふふ、本当に可愛らしいですね、リリスさん。」

そういつて私はリスさんの髪をかき上げて顔を覗く。  
まったく警戒していないのか安らかに眠っていますね。

「今日はいよいよ通商会議、私たちの計画への第一歩。」

ふふ、精々お父様には道化を演じてもらわねばなりませんわね……  
…そして行く行くは。

「リスさんとも戦うことになるのでしょね……………」

リスさんは御子を守ろうとしています、きっと昔の自分のように  
小さな子供が利用されるのが許されないでしょう。

「碧き零の計画　そして…………　闇の創生」

闇の創生　私が教団にいとされていた御子連れ出す際に知っ  
た教団の一部の者で行われていた計画。

その内容は散りばめられた3つの闇と呼ばれるかけらを一つにする  
ことでなんらかの扉を開く、それがなにかはわかりませんでしたか

…………

「すでに二つはあちらの手に在り…………　そしてもう一つは……………」

そう言い私は視線を落とすと安らかに眠るリリスさん、彼女の中にそれはある。

「私がこんなこと言う資格はないのかもしれませんが………本当に運命とは残酷なものですな。」

それまでに私なりにいろいろ調べましようかね、彼らも協力してくれるそうですし………  
そう私が考えていると

「マリABEL様、特務支援課の方々が戻られたようです。」

おや、どうやら依頼は終えたようですわね。

「わかりました、こちらに来るようにと。」

「かしこまりました。」

さて、彼らが来たらあまり騒がないように釘を刺さないですわね、リリスさんの可愛い寝顔をもつすこし眺めたいですから。

「さて、本当に人形は傷がついていないのでしょうか？ 怪盗紳士」。

まあ私の人形が無事でもリリスさんのことでしっかりOHANAS  
HIしないといけませんわね。

マリアベル     s i d e     e n d

### 33話「闇の創生計画」(後書き)

アリアンロード達を巻き込んだ宝探しは過去編として後に掲載します。

### 34話「守る者と奪う者」

リリス side

さて、時はすでに昼になろうとしています。

私はマリアベルさんとのお話の途中に寝てしまい特務支援課のみなさんが人形を返しに来たとき目が覚めました、なぜか首を締め上げられているロイドさんがいたのですがあれは何だったんでしょうか。

マリアベルさんはとてもいい笑顔で「ロイドさん、よくも私の癒しの時間を奪ってくださいましたわね？」なんて言っただけ黒いオーラを醸し出していました。

「さて、楽しい時間を過ごせたのもよかったですが重要なのはこれからですね。」

私がそう言い空を見るとなんらかの合図が見えた、きっと会議が始まったのでしよう。

「まだ何かが動く気配はなし……………おや、あれは……………」

私が視線を動かすと赤い鎧を纏った集団を見つけた、もしかしくなくとも赤い星座です。



ちなみに今私がいるのは旧市街です。

「ここで一体……………」

すると彼らは建物に立てかけてあるドラム缶をどけていきます。しばらくするとそこから一つの扉が見えてきました。彼らが扉に入っていたのを確認すると私はその扉に近づく。

「ジオフロント……………C区画。」

なるほど、まさかこんなところに入り口があるとは盲点でした。オルキスタワーの地下にジオフロントC区画があるのは聞いていましたが入る方法は知りませんでしたからね、彼らには感謝です。

「さて、私も行きましょうか。」

そう言いリリスは扉をくぐりジオフロントへと足を踏み入れた。

リリス    s i d e    e n d

アリオス    s i d e

今俺は通商会議に出席している要人たちの護衛をしている。  
データー市長もなにかと苦しい表情をしながら彼らの話を聞いている。

「（まったく……うまく道化を演じるものだな。）」

苦しい表情をしているがこの会議がどのように転んだとしても一つの結果にしかたどり着かないのだから。

まあ今しばらくはここを……フ、来たか。それでは今は俺も仕事をしようか。

そして俺は刀を抜き放ち叫ぶ。

「方々！下がられよ！！」

アリオスの言葉が響いた瞬間、会議室は銃声に包まれた。

アリオス    s i d e    e n d

リリス    s i d e

「一体どこまで行くのでしょうか……」

私は赤い星座に気づかれないように後を付けている。

ちなみに私がジオフロントに入ってからかなりの時間が経っています。

今の時間帯は特務支援課が帝国兵との戦いを終え、装甲車と戦っている時です。

「？足音が複数こちらに近づいている？」

私がそちらに目を向ける帝国兵がこちら側に複数近づいてきていた。

リリース side end

?? side

「なぜだ……なぜ貴様らがここにいる!!」

帝国兵の先頭を走っていたもの、皆をまとめる隊長といったところか、その人物が目の前に現れた集団に向かって叫ぶ。

「すまん、俺たちがここにいる理由はお前らも分かっているだろう?。」

圧倒的な威圧感を放つ男がその問いに答える。

「赤の戦鬼 シグムント・オルランド……まさか奴が貴様らと手を組んでいるとな。」

帝国兵が苦虫をかみしめたような表情をする、彼らの前に現れた集団とは赤い星座だったのだ。

帝国兵たちテロリストは赤い星座がクロスベルにしていることを知らなかった、さらに言えばオズボーンが赤い星座と手を組んでいたというのも予想外だったのだろう。

「フ、いろいろと言いたいことはあるかもしれないがこれもビジネスでな、悪いが消えてもらおうか。」

シグムントが手を挙げると一緒に付いてきていたシャーリィと兵たちが帝国兵へと銃を向ける。

「くっ……………」

帝国兵も銃を構え応戦の態度をとるが無駄なあがきだと誰もが思うだろう、相手は大陸一の獵兵团なのだ、敵うはずはない、そんな中涙を流す帝国兵がいた。

「我らは……………結局は奴の手の上で踊っていただけだというのか……………」

なぜ彼らは涙を流すのか、たしかに彼らはテロリスト、それは許される行為ではない。しかし彼らは彼ら自身の守りたいもののために立ち上がったのだ、今の帝国の在り方に異を唱えその志のもと彼らは集まりオズボーンを殺すという作戦を決行した。

彼らには家族はおそらく大切な人もいたのだろう、その人たちをも残し、そして目的の途中で死にゆくのだから悔しさを抑えることができなかった。

「フン、これでさらばだ。」

実質の死刑宣告、銃の引き金が引かれようとしたその時、一人の少女の声が響いた。

「五の舞、雪桜。」

その瞬間激しい突風が吹き荒れる、赤い星座ももちろんだが帝国兵も突然のことで何が起こったか理解できなかった。いや、シグムン

トだけは笑みを零した、まるでこの場面で何者かが横やりを入れてくるのがわかっていたかのように。

「来たか……… 迅雷。」

「お……… 女の子………？」

帝国兵を背に現れた一人の少女、シグムントは名を呼んだが帝国兵は混乱しているのかそのような頓狂な声を上げた。少女は赤い星座から目を離さず、静かに語り出す。

「突然すみません……… 私自身殺す必要はないと思ひまして。」

「なんなんだ君は……… 我らをかばって何になる……！」

「あなた方をかばう気などありません、ただ……… 目の前で誰かが死ぬのを見るのが嫌なだけです。」

「……………」

リリスは過去に何人もの人が目の前で死んでいくのを見てきた、故に人の死にリリスは敏感なのだ。

どんなに重たい罪を犯したとしても助かる命は助けたい、ただそれだけ。

「フ、だが悪いな、奴らにも言ったのだがこれはビジネスでな。悪いがそこを退いてもらおうか。」

「……………それがあなた方の仕事ですしね、ですが……………それが彼らを殺していい理由にはならない!!」

リリスの叫びを聞きシグムントは目を瞑り、そして問う。

「……………ならば貴様はどうするといふのだ？」

「……………どうしても彼らを殺すといふのであれば、私がお相手します。」

「ほう……………シャーリイ、お前たちも下がれ。」

「え……………わかったよ、本当はシャーリイがリリスと戦いたかったんだけどね。」

「フ、許せシャーリイ。」

シャーリイと兵たちが後方へと下がる。

「まさかこんなに早くお前と戦うことになるとは思わなかったぞ  
迅雷。」

シグムントはリリスへと向き直り、自身の武器である二つの斧を構える。

「私ですよ、ですがいかに相手が 赤の戦鬼 だとしても負ける  
つもりはありませんが。」

リリスも刀を構え、瞳が真紅から蒼へと変わる。

「!?!?.....なるほど、最初から全力で来るといわけか、オオオ  
オオオオ!?!?」

シグムントが雄叫びを上げる、その瞬間シグムントの体から闘気が  
あふれ出す。

「!?!?.....ウォークライ、聞いたことがありますがまさかこれほ  
どとは.....」



リリスが素直に驚く、すると同時に理解する、自分が今から戦おうとする相手がどれほどの化け物なのかを。

「さて、あの 剣帝 を超えるとされた 迅雷 の力、見せてもらおうか！」

「……………ご安心ください、手を抜くつもりはありません、最初から……………本気で行かせてもらいます！」

片や命を守る者、片や仕事のため命を奪うもの、相反する二人の最強が今激突する。

?? side end

### 34話「守る者と奪う者」(後書き)

なんか帝国兵の人たちを美化しすぎてしまった。

### 35話「激闘」

オルキスタワーの地下、ジオフロントC区画で一つの戦いが繰り広げられた。

「せえい!! ぜああ!!」

「はああ!!」

――カキン!!――

斧と刀が交差する、対峙しているのは赤い星座の副団長シグメント・オルランドとリリス・プラティエである。

「ほう、俺の一撃をその細い刀で受け止めるか……ふん!!」

シグメントは受け止められていないもう片方の斧でリリスへと振り下ろす。

「ふっ!!」

リリスは少し後ろへと下がりその攻撃をかわし上空へ飛ぶ。

「確かに力はあなたのほうが圧倒的に上です、なら私は……………速さであなさに勝つ。」

リリスはそのまま刀を振りかぶりクラフトを発動する。

「三の舞、雪月花!!」

「確かにその速さは目を見張るものがあるが……………それだけで俺に勝てるとは思わないことだ。」

リリスの振り下ろす斬撃はシグメントの交差した二つの斧に止められる。

「ふん、軽いな。このていど「連撃……………」む!？」

シグメントは後方より聞こえた言葉に驚く、そこで一つのこと気づいた、今自分が受け止めているリリスに質量を感じないことに。

「分身か……………!」

シグムントは咄嗟に片方の斧でリリスの攻撃を防御する。

「雪花！！」

リリスから放たれるクラフトがシグムントへと迫る、それを防御するが……

「ちい！！（まったく素晴らしいほどのスピードだな、俺でも目で追えるか追えないくらいか）！？」

「私が剣技しか使わないとおもったら大間違いですよ。」

リリスは攻撃を止められた瞬間ずっと詠唱を行っていた、シグムントもこれは予想外だった、まさか刀で攻撃しながらアーツ発動の詠唱を行っていたとは思わなかったからだ。

リリスは後方へと飛び退きアーツを発動する。

「スパークダイン！！」

シグムントの頭上より雷光がせまる、しかし次はリリスにとって予

想外のことが起こる。

「たしかにタイミングは完璧だが……………所詮それだけだ、ふん！！」

シグムントは斧を雷に向かって振う、その瞬間凄まじい風圧が起こる、雷はシグムントに届くことなく音を立てて消えた。

「剣圧だけでアーツをかき消すなんて……………どれほど化け物なんですかあなたは……………」

そうはいってもリリスは内心そこまで焦ってはいなかった、シグムントは確かに強い、だがリリスは彼と同等か、もしくはそれ以上の者と戦ったことがあるのだから。

「（アリアさんと同じくらいでしょうか……………いえ、“兜”をとったアリアさんはこんなものじゃありませんでしたね。）」

リリスは昔のアリアンロードとの戦いを思い出す、それが今はリリスの力になっていた。

「フン、だが驚いたぞ、攻撃と同時に詠唱を行うとはな……………次はこちらからいくぞー！！」

シグメントはリリースへと駆けクラフトを発動。

ークラフト、ジオブレイクー

「はああ!!」

シグメントの二連撃がリリースに迫るがリリースは躲す、そしてシグメントは飛び上がり闘気を纏わせた強力な一撃をフィニッシュと言わんばかりに振り下ろす。そしてそれをリリースは受け止める。

ーガン!ー!ー

鈍い音があたりに響く。

「くっ……………重い……………!!」

シグメントの一撃を抑えきれないのかリリースは膝をつく。

「ふん、この程度か?」

「ふふ、ご冗談を………まだまだいけますよ!!」

リリスは力を思い切り入れて斧を受け止めた状態から無理矢理刀を押し出す。

「はああああ!!」

「ほう………」

リリスが立ち上がりシグムントの斧を押し返し始めた、とはいっても今のリリスは隙の塊といってもいいだろう、シグムントはそこを見逃さなかった。

「その状態で立て直したのは見事だが………一発はもらってもらうぞ!」

「!」

もう片方の斧が振り下ろされる、リリスは飛び退き躲す。二人の距離が離れる。

「大した反応速度だな、だが………」



「はぁ……はぁ………」

シグムントはニヤリと笑い。

「先手はいただいた………ということか。」

シグムントは斧についた血を見た後、前方へと視線を動かす。

「はぁ……さっそくりーシャとの約束を破ってしまいましたね………」

そこには肩から少くない量の血を流し、刀を持つ腕とは逆の腕をだらんと垂らしたリリースの姿があった。

### 35話「激闘」（後書き）

書いてる途中にシグメント化け物だなど本気で思ってしまった。

風圧でアーツ消すとか……………火遁を声圧で消す九尾化したナルトか！！

次の話で一応決着はつける予定です。

### 36話「結末」

リリス・プラティエは窮地に立たされていた。

ジオフロントC区画にて赤い星座に殺されそうになっていた帝国兵を救うため、赤い星座の副団長、シグムント・オルランドと戦うことになったのだが……

「はあ……………はあ……………」

「ほう……………片腕が使えないというのにまだやるのか。」

リリスとシグムントは常人とは思えないほどの高度な戦闘を繰り広げていた、お互いに拮抗していたのだがそれをさきに破ったのはシグムントだった。クラフトを発動し隙のできたリリスに一撃を入れたのだ。

「たしかに……………右腕はもう使い物にならないですね、まあ刀を持つ腕が無事だったのは幸いでした。」

リリスは刀を持つ腕とは逆の腕をだらしなく下へと垂らしていた、そこからは決して少ないほどの量の血が流れ出している。しかし、と言ってリリスは言葉を続ける。



「!?!」

突如響く爆音、それは特務支援課が装甲車を破壊したことで生まれたものだった。

「向こうも終わったようだ、直に奴らも来るだろう。」

「そうですね……………では……………」

「ああ……………お互いにこの一撃ですべてを決するとしよう。」

「わかりました。」

二人が武器を構える、二人が動き出すのはほぼ同時だった、お互いにSクラフトを発動する。

「赤き夜を、食らうがいい!!」

「贈るは終焉への宴。」

リリスとシグムントからほぼ同等と言っていいほどの闘気が溢れ出す、色でいうならシグムントが赤色でリリスが蒼色といったところである。

「食らえ！！クリムゾンフォール！！」

「これで終わらせます！！終の舞、桜花乱舞殺！！」

二人の距離が縮み……………そして零になる。

――ガーン！！――

「まさか……………ここまでの力があるとはな……………」

「あなたもですよ……………さすがは最強の獵兵というわけですか……………」

武器を交えたまま動きが止まる、互いの攻撃が相殺を起こしているのだ。

「ふん、まだこの戦いを楽しみたいところだが……………俺たちの仕事

はお前と戦うことではないのでな。」

「え…………まさか!？」

「フン、頃合いだ、やれお前たち。」

「は…………い 待ってたよ…………。」

シグムントが指示を出した瞬間赤い星座の面々が帝国兵へと銃を向ける。

「やめ「悪いが先にも言ったがビジネスだ、すまんな。」くっ!」

リリスが彼らのもとへ向かおうとしたがシグムントに止められる、そして…………ついに引き金は引かれた。

「アハハハハハ、イツちゃえ…………!」

——ダダダダダン!——

「ぐぶっ」

「がつ……………」

「く…………そ……………」

銃弾が帝国兵へと向かい砂煙が巻き起こる、中から聞こえるのは声にならない悲鳴。  
煙が晴れたとき、リリスが守ろうとしていた者たちは変わり果てた姿だった、おびただしい量の血があたりへと広がっていく。

「あ…………ああ……………」

「ふん！」

「ぐっ！…！」

声にならない嗚咽を出すリリスをシグムントが蹴り飛ばす、リリスは防御をするが後方へと飛ばされてしまった。

「さて…………シャーリイ、残りも殺っていいぞ。」



「えへへ、いいの？」

「ひっ……………！」

銃が放たれる瞬間一人だけ回避できたものがいた、もちろん最強の  
猟兵団がそれを逃すはずもなく。

シャーリイがナイフを出しながら隠れた帝国兵へと近づいていく。

「ふふ、どうしたのさ？他の連中には手を出させないから遠慮なく  
かかってくればあ？」

シャーリイが徐々に生き残った帝国兵へと向かっていく、そんなと  
き。

「……………めろ……………」

「え……………ひっ！！」

シャーリイが声の聞こえた方向へと視線を動かす、声のした方向に  
いるのはリスだ、だがリスを見た瞬間シャーリイは怯えた、リ  
スと目があつた瞬間今までに感じたことのない濃密な殺気がシャ  
ーリイへと放たれた、もちろんその殺気に恐れを成したのはシャ  
ーリイだけではない、シグムントを除く赤い星座の兵もリスの溢れ

出す殺気に恐れていた。

「（あれほどの傷を負っているというのにまだ動けるのか……いや、それは今はどうでもいい。なんだ？これほどの強烈な殺気は……人間がこれほどの殺気を出せるものなのか……）」

シグムントは内心そんなことを考えながらリリスを観察していたが彼女が何者なのかわからない、だが一つだけわかることがある、シャーリイが帝国兵を手にかけた瞬間、シャーリイは死ぬということが。

「やめろ……それ以上するなら……本気で殺す!!」

リリスの目はすでに瞳孔が開いていた、そして口調もいつもの柔らかい感じではなく、すべての者を冷酷に御すような雰囲気を感じさせる。

「そ……それでも……くっ!」

リリスの殺気に怯えながらもシャーリイは生き残った帝国兵へとナイフを向け殺しにかかる。

リリスは刀を構えシャーリイに切りかかろうとするがそこで第三者の声が響いた。

「やめろおおおー!!」

一同は声のした方向へ振り向く。

「ランディ兄……………」

「若……………」

現れたのは特務支援課だった、シャーリイともう一つの声、ガレスが彼の名を呼ぶ。

「クク……………遅かったな。」

「叔父貴……………シャーリイ……………こんなところで何してやがるんだ  
!!!」

ランディは彼らを問い詰める、こんなことも予想できないことはなかったが信じたくはなかった。

「だ……………駄目……………」

「全員事切れているみたいだ……」

帝国兵の脈を確認していたエリィとワジが伝えてくる。

「……………っ……………」

「くっ……………！」

ティオとノエルが悔しそうにその顔をゆがませる。

「……………何なんだアンタたちは……………なんでこんな非道な事を！」

ロイドが叫ぶ、それに対してシグムントは笑みのある表情を崩さず、その問いに答える。

「言っただろう、ビジネスだと。帝国宰相、および貴族を狙った不届きなテロリストを処刑する……………それが今回、帝国政府から俺たちが請けた依頼というわけだ。」

「……………！？」

「ま……………まさか」

特務支援課も気づいたようだ、そこで全てを見透かしていたかに見えたが確証を得ていなかった少女が口を挟む。

「やはり……………あなた方に彼らの処理を頼んだのは……………帝国でしかか。」

彼らの登場にリリスも気を持ち直したようである、目に色も戻ってきていた。

「リリス……………どうしてここに……………それにその傷。」

「ロイドさん……………すみません。すこし……………頑張りすぎてしまったようです……………」

そういつてリリスは体勢を崩し倒れる、だがそれをエリィとティオが支える。

「リリスちゃん!!……………よかった、気を失っただけよ。」

「そのようですね、ですがこの腕の傷はひどいです……………おそらく満足に腕も動かせないはずです。」

リリスが気を失っただけということに一同はすこしホッとした、だがすぐにロイドが切り出す。

「さっきリリスが言ったことを踏まえて聞くが……………あんたたちの依頼主というのは……………」

「うん、帝国政府からの委任状もちゃんとあるよ。」

恐れから復帰したシャーリイが特務支援課に紙をヒラヒラとさせながら言う。

「これでシャーリイ達には手を出せないんだよね」

「そ……………そんな!」

「自治州法第19条3項……………帝国、共和国政府によるクロスベルでの公約執行権はこれを認めるものとする。」

エリイが悔しそうに言う。

「クク、その通りだ。つまりこの件に関しては俺たちは帝国政府の代理……正式な処刑人ってわけだ。……………クッ！」

話しの途中でふとシグムントの顔が苦痛で歪む、肩の傷口から血が流れてくる。

「！？叔父貴……………その傷は……………」

「フン、俺も自身の体から出る血を見るのは久方ぶりだ、まさか迅雷 がここまでやるとは思っていなかったからな、次やることがあればどちらに転んでもおかしくないだろう。」

「なっ……………それじゃリリスはアンタと戦ったって言うのか！？」

「ああ、奴はその帝国兵を守ろうとして俺たちの前に一人で立ちふさがった。ほかの者では相手にならないと思ってな、俺が相手をしたというわけだ。」

「リリス……………」

「リリスちゃん……………」

支援課の面々は信じられないという思いでリリスを見る、ランディからシグメントのことは聞いていた。猟兵の中じゃ知らないものはいないほどの腕を持つ猟兵、それがシグメントだ。そのシグメントに傷を負わせたというのだから驚く、ましてや次やりあえばどう転ぶかわからないと言われたのもあるだろう。

「叔父貴イイー!!」

今までの話を聞いていてついに我慢できなくなったのかランディがシグメントに食って掛かる。

「リリスちゃんを傷つけたこともとりあえず言いたいことはあるが………なんで殺した!何で殺しやがったんだ!?!アンタなら殺さずに無力化できただろうが!?!なのにどうして………!」

「……………」

ランディに胸倉をつかまれ黙っていたシグメントだったが………

「ぬるいわー!!」

「ガッ……………!」



シグムントがランディを殴り飛ばす。

「ランディ！」

「先輩！」

「ランディさん！」

ロイド、ノエル、ティオがランディを心配するがシグムントが口を開く。

「言っただろう、“処刑”を請け負ったと。それにこの程度の殲滅戦、貴様には珍しくもあるまい？」

「……………ッ……………」

「そもそも貴様らがとつと連中を捕まえていればこんなことにはならなかったはずだ。この結果が 鉄血 に政治的に利用されることもな。」

「!!」

「そんな……まさか……」

「フフ、せめてもの情けに一匹くらいは見逃してやろう。シャーリイ、放してやれ。」

「はい。」

シャーリイは捕まえていた帝国兵を支援課へと押し出す。

「じゃあパス、逃げられないようにね〜」

「さて、引き上げるぞ。報酬も入ることだし、今夜はパーッと行くか。」

「了解!」

シグメントの問いに猟兵たちはそろって声を上げる。

「それじゃまったね〜。」

「失礼します、若。」

「じゃーな、ランドルフ隊長。」

それを皮切りに赤い星座を去っていく、だがシグメントが立ち止まり。

「迅雷が起きたら伝えろ、なかなか楽しめたとな。」

「くっ……！」

赤い星座が立ち去り、ランディが立ち上がる。

「ふざけんな……何のために……俺は……おおおおおッ！！」

悔しさを噛み締めるランディの叫びが周りに響く。

ここにゼムリア通商会議は終わりを迎えた、だが更なる混乱がクロスベルへと降りかかるのはそう遠くない未来であろう。



### 36話「結末」（後書き）

作者「それにしてもシグムントさんや、女の子相手にSクラフトまで使うなんて少々大人げなくはないですか？」

シグムント「フン、俺も少しそう思ったが熱くなっていてな、あれほどの楽しい戦いをしてくれるやつはそうそうおらん。」

作者「ふむ、悪い意味でリリスは好かれてしまったなあ。」

リリス「まったくです、こんな好かれ方はごめんでした。」

シグムント「フフ、そういうな、形はどうであれ好かれるということとはいいことではないか？」

リリス「いやいや、ほんとにそんなもの求めていますよ。」

作者「確かに好かれるというのはいい事かもしれないけど……………」

リリス「？どうしたのですか？」

作者「いや……………なんか私の後ろにいるよね？ゴゴゴって音を出してる何かがいるよね！？」

リリス「え？そんなものどk……………」

シグムント「む？……………」

イリア「さあて、どこかしらね、私の可愛い妹をその毒牙にかけ

ようとしたやつは、そして何より怪我をさせた愚か者は誰かしら？。  
」

作者「……………なんだろうあれ、シグムントさんより怖いと思うのは私の気のせいでしょうか。」

シグムント「ふむ、凄まじいほどの殺気だな（俺が震えている？……まさかな。）」

リリス「あはは……………早く逃げた方がよさそうですね。」

作者「そうだね、それじゃみなさん今日はこの辺で、続きを楽しみにしてね。」

シグムント「さらばだ。」

リリス「それでは読者のみなさん、またです。」

イリア「あら？、そこにいる3人ちよつと待ちなさい。」

3人「……………」

閑話「赤い星座と黒月」

ージオフロントC区画分枝点にてー

中央へと向かってくる二つの影。

「ほう………」

ツアオ率いる 黒月 と、

「これはこれは。」

シグムント率いる 赤い星座 である。

「 赤い星座 の………」

「 戦鬼 とその娘か………」

黒月の者が各々に口を開く。

「シグメント様……こちらの用意はいつでも。」

ガレスがいつでも戦闘可能というかのように武器を構えようとする。

「クク、構えるな。お互いにクライアントのオーダーをクリアした後だ。これ以上のお楽しみというのはさすがに無粋というものだ。」

「フフ、同感です。そういえば ノイエⅡプラン 新装開店、どうもおめでとうございます。なかなか挨拶に向かえず申し訳ありませんでした。」

「なんのこちらこそ、知らぬ仲でもないというのに挨拶に出向かずに悪かった。そういえば……死にぞこない共は元気か？」

お互いに相手を挑発するかのよう言葉を紡ぐ。

「ハハ、嫌になるくらいに元気な方々ばかりですよ。まああなた方のおかげでいまだに夢見の悪いご老人もいるようですが。」

「あはは、長老会を襲って人質にしたりしたからね。」

シャーリイの話を聞き今まで黙っていた黒い外装に身を包んだ男



が口を開く。

「……フン、依頼で不在で正解だったようだな。」

その声の人物を見てシャーリイが声を上げて言う。

「ああっ！ひよつとして 銀 ！？」

「東方人街伝説の凶手っていう！」

「……そういうお前は 血染めのシャーリイ か。わずか16で最強の猟兵団の部隊長を務めているという。」

「うゝん、一人の方が動きやすいんだけどね。」

シャーリイがなにかを考え込んだがすぐに銀へと問う。

「それよりも、ねえ？カッコいい覆面してるようだけど付けない方が強いんじゃないの？」

その問いに銀が少し動揺する。

「なに……（まさか銀の正体が私ということに気づいている？まさかね……）」

銀の思考お構いなしにシャーリィは続ける。

「筋肉の使い方方も不自然だし、普通にしてたほうが強いはずなのに勿体ないんじゃないかな？」

「……………（バレている……………みたいね。確証はないけど。）」

「ほほう……………」

ツアオも銀へと視線を向ける。

「フフ、親馬鹿かもしれないがこいつの見る目は確かでな、まあ気に障ったなら謝罪させてもらおう。」

「……………別に。」

「ふむ、銀殿のことは気にはなりますが……………その傷はどうしたの

で？」

先ほどから気になっていたのだろう、ツアオがシグムントに聞く。リリースとの戦いでできた傷はすでに血は止まってはいるが服の上から、刀で切り裂かれた傷を隠すことはできなかった。

「フン、少々骨のあるやつと戦ってな、そいつに付けられた傷だ。」

「ほう……あなたほどの人物に傷を負わせるとは只者ではありませんね、考えられるのは……特務支援課ですか？」

「たしかに奴らも来たがそれは戦いが終わってからだ、お前らも聞いたことがあるだろう？ 迅雷 という名を。」

「！？（リリース……）」

シグムントの言葉に銀がわずかだが反応する、そして興味深い事を聞いたかのような表情をツアオがする。

「例の結社の……聞いたことはありましたがまさかそれほどの力を持っているとは驚きですね？」

「そうだよね、ほんとにすごかったよリスは。まあ、今回はリスのほうが先に倒れちゃったけどね。」

「!!」

シャーリーの放った言葉に先ほどより大きい動揺を銀はする、大きな動揺といってもほかの者にはわからないだろう、シグムントとツアオを除いてだが。

「リス……それが 迅雷 の名ですか……おや？、たしかアルカンシエルにイリア・プラティエの妹が帰ってきたという情報がありましたね……たしかその名は……リス・プラティエ。」

「ふむ、知っていたか。シャーリーとあまり歳が変わらないというのにまったく大した娘だ。おそらくこのまま力を付けていけば……そう遠くない未来に俺を完全に抜くだろうな。」

「ほう……（ 迅雷 リリス・プラティエですか、実に興味深い……どうにかしてこちら側に引き込みたいですね。 ）」

少し銀を見ながらどうにかしてリスを引き込めないかと考えるツアオ。

「まあ今回はお互いに一撃を入れて終わったが……次は支援課の者達にも言ったがどう転ぶかわからんな。」

「あはは、けっこう肩から血を出してもんね。動かなくなるってことはないと思うけど大丈夫かな、リリス。」

「……………（リリス……………）ツアオ、下らん話を続けるのなら先に行くぞ。」

シャーリイの話しを聞き、リリスのことが心配になったのかリーシヤは話を切り上げようとする。

「ハハ、すみません、すこし興味深い話だったもので……………ではまたの機会に。」

何かを含ませような言い方をしてツアオは別れを告げる。

「ああ……………またの機会に。」

「ふふっ、まったね〜!」

こうして赤い星座と黒月の邂逅は終わりを告げた、それぞれの思惑

を残して…………

シグメント side

フフ、またの機会に……………か。

「あゝあ、銀と戦うのがすごく楽しみだなあ。」

「フフ、どうやら銀のことが気に入ったようだな。」

さすがは我が娘ということか、血とは恐ろしいものだ。

「うん！早く楽しい殺し合いがしたいよー！でもでも……………戦いの楽しみができたのはお義父さんでしょ？」

シャーリイが笑いながら俺に聞いてくる。

「フフ、そうだな、戦ってみて改めて思ったが奴とは本当にいい殺し合いができそうだ。」

迅雷 俺たちはまた会い見えるだろう、その時が決着の時だ、そ

れまでにさらに力を付けるがいい。

シグメント side end

ツアオ side

さて、彼らとの邂逅を終え興味深い情報を得ることができました。

「迅雷 ですか……………まさかこの地でその名を聞くことになるとは思いませんでしたね。」

「ツアオ様、奴らの言っていたことは本当なのでしょうか。」

横を歩くラウが聞いてきます。

「ええ、おそらく本当でしょう。あの 戦鬼 に傷を負わせるなど生半可な力を持つものではまず無理です、ですがかの 迅雷 なら納得できますからね。」

「ふむ……………それほどの人物が我らの力となってくれるなら相当なアドバンテージになりそうですね。」

フフ、やはりラウも私と同じことを考えていましたか。  
たしかに 迅雷 の力はほしい、それこそ………どんな手を使って  
でも。

「さて………これから忙しくなりそうです。」

ツアオは静かに微笑むと止めていた足を動かして歩き出す。少しの  
笑みを残して。

ツアオ    s i d e    e n d



## 閑話「赤い星座と黒月」（後書き）

作者「あちゃー、シグムントさんに続いてツアオさんにも目を付けられちゃったね。」

リリス「……………なんかもう溜息しか出ないですよ。」

なのは「にやはは、まあこの物語の主役はリリスちゃんだからね、しょうがないよ。」

作者「そうだよー、リリスの戦闘力は高めの設定だからその能力をほしがる集団は多いのだよ。」

リリス「いいですよ、いざとなったらアリアさんに助けてもらいますから。」

なのは「アリアンロードさんかあ、あの人ってリリスちゃんにはとことん甘いよね、そんな場面もこの先見れるのかな？」

作者「見れますよー、作中ではアリアンロードのそのような場面は見れなかったのでバンバン書いていく予定です。」

リリス「ううー、恥ずかしいですね。でも……………一つだけ聞いてもいいですか？」

作者「うん？なにかな？」

リリス「なぜここになのはさんがいるのです？他作品ですよーね？」

なのは「タグ欄にほんのすこしなのは入るってあるよね？きつとあれだよ。」

作者「そうだね、ああでも……もしかしたらスポット参戦もあるかもしれないんだ。」

なのは「！！そうなの？？」

リリス「それはそれは……」

作者「うん、まああくまで考えているだけであってやるかどうかは未定だよ、終章を更に盛り上げるためになのは達をスポット参戦させようかなって思ってるんだ。」

リリス「そうなんですか……」

作者「なのは達ってマテリアル達と戦ったじゃない？その消えた一人、星光の殲滅者はリリスに宿ってるからね、世界は違うけど確かにつながりはあるんだよ。」

なのは「なるほど、今の私たちは１７歳だから……」

作者「うん、Strikersが始まる２年前だね。ちょうどその時期が合うかなって。まあ番外編としてクロスを書くかも知れないけどそこはまだ待っててね。」

リリス「わかりました、なんか楽しみになってきましたね。」

なのは「それは私もだよ、リリスちゃんともお友達になりたいからね。」

作者「うんうん、世界をまたにかけの友情っていいね。」

リリス「そうですね……おっと、もう時間そうですね。」

作者「そうだね、まあ読者の意見もあることだし英雄伝説になのはクロスは合わないっていう意見があれば書きません、まあ私はすでにシナリオを考えているので強行するかもしれませんが。」

なのは「にやはは、それじゃこれでお別れだね、みんなまたね。」

作者「また次回の話してお会いしましょう。」

リリス「それではみなさん、次回も楽しみにしてください。」

### 37話「戦いの後」

リリス side

「えっと……リーシャ？さすがにこの服は恥ずかしいですよ……」

「ふふ、でもすごく似合ってる、可愛いよりリス。」

「うう／＼／／」

私は今リーシャに勧められた服を着ています、ただ服を選んでもらえるならうれしいことなんですがこの服……

「なんでゴスロリなんでしょうか……」

私はレンが着るような感じのものではないですが、胸元フリルの付いた白ブラウスに黒ベストとパニエ入りフリルスカート、という感じのゴスロリ系服を着ています。

さてさて、なぜ私がこんなことになっているかというところ少し前のことを話さなければなりません。

私は 戦鬼 との戦いを終えた後、気を失い倒れてしまったのですがロイドさんたちに姉さんの部屋へ運んでいただきました、包帯が巻いてあることから治療までしてくれたようです。

ですがそこで私を待っていたのは恐ろしい…… もとい、いい笑顔をした姉さんとリーシャがいらっしやいました。姉さんは私が戦いをできることを知っていました、怪我をして帰ってきたことを怒ると同時にとても心配していたようです。

リーシャも若干涙目にながら私のことを心配してくれました、腕の傷がエリイさんとテイオさん曰くけっこう深かったようで、もしかしたら後遺症かなにか残るかもしれない、と言われていたのもあったようです。家までセイランドさんという新しいウルスラ病院の准教授が来てくれて、心配することはないって言うてくれたようですがそれでもリーシャは不安だったようです。

それでリーシャを心配させてしまった償いとして前に言われたなんでも言うことを聞く、という約束を果たすこととしました。一体何を言われるのだろうと思っていたのですが……

「それじゃあ、今度私とデートしてほしいな。」

ということでした、私自身断る理由もないので喜んでOKしました。デートという単語は少々気にはなりましたが気にしないでおきましよう、それで現在に至るといっわけです。姉さんとも後で埋め合わ

せするということでした。

「なんかこの服を着てからすごく周りから視線を感じるのですが……」

そうなのです、先ほどから痛いと言えるほど視線を感じます。

「ふふ、だってリリースすごく可愛いから。視線を集めてしまうものしょうがないと思うよ？それにその服装だし、まあ私がプロデューズしたんだから言えないんだけどね。」

「あはは……でも視線を集めてしまうのならリリースかもしれません？女の私から見ても羨ましいほどのプロポーションですし、それに何より綺麗ですから。」

ただでさえリリースはアルカンシエルの準ヒロインですし、今じゃ彼女を知らない人はあまりこのクロスベルにはいないでしょうからね。

「あ、ありがとう／＼（リリースのこれって絶対無自覚だよね………）」

なにか顔が赤い気もしますが……ああ確かにいきなり綺麗と言わ

れたら照れますよね、私もリーシャにこの服を着て似合っていると言われた時すごく照れましたけど同時に嬉しかったです、あと少し胸がポカポカしました、こんな感じ今までなかったのですが一体……

どうやらリリースはあの天然女落とし主人公より早い成長を迎えているようです、それでもリリースがその気持ちに気づくのはいつになることやら。なんとなくそのころにはフラグ乱立していそうです。レンとかリリースとかフランとかマリABELとかアリアンロードとか……

「それじゃリーシャ、次はどこにいきますか？今日はとことん楽しんでいきましょう。」

「うん、というよりリリース……なんか吹っ切れた感じ？」

「そうですね、恥ずかしさってある一定の値を超えると人を変えてしまうようですね、きっと読者の皆様もそんな経験あることかと思えます。」

「そうだね、私も舞台に立つときひどく緊張とかしたし恥ずかしかったけど、いざ舞台に立ってみるとそんなこと気にならなかったし………というかりリス、最後のほうの読者のというのは何なの？」

「気にしてはダメですよリーシャ、よくあるメタ発言？と呼ばれるものです。ささ、次いきましよう。」

「う、うん、それじゃあ次は………そういえばお腹空かない？そろそろ昼時だし。」

そうですね、ちょうど私も何かを食べたいと思っていました。

「そうですね、それじゃあ東通りのレストランに行きましようか。」

「うん、わかった。」

――少女移動中――

「うゝん、何を食べましようかね。」

「ふふ、気が早いよりリス。」

「何を言ってるんですかリーシャ、おいしいものに目がないのですよ私は。」



そうです、正直私はおいしいものには目がありません。料理とかならもちろんですが、デザートともなるともう我慢できないくらいですよ。

「ふふ……うん？あれは……むっ！」

あれ、なぜかリーシャの顔が陰しくなりました、私たちの前には一つの人影、でもあれは……

「あ、リースさん！」

私たちの前にいたのはリースさんでした、どうやらリースさんもこれからご飯を食べるようですね。

「おや？リリースさん、この間の月の僧院以来ですね。それと……どうもこんにちわリーシャさん。」

「そうですね、こんにちわリースさん。」

あれ？なんか二人の間に火花が見える……きっと気のせいですが、私も疲れてるんですねきっと！

「それにしても今日はすごく可愛らしい服装をしていますね、リリスさん。」

「はい、この服はリーシャが私の為に選んでくれたのですよ。似合ってますか？」

私はその場でクルリと一回転します。

「はい、とてもよく似合っていますよ（ほんとに可愛らしいです、ただリーシャさんが選んだというのが悔しいですが。）」

と言いながらもリースさんはリーシャに敵意丸出し……………とは言いませんがそれに似た感じの視線を向けています。早くご飯食べに行きましょう、この空気は何故か苦手です……………

「えっと、リースさんもこれからお昼ですよ？よければ一緒にしませんか？」

「はい、その通りですけどよろしいのですか？」

「構いませんよ、リーシャもいいですよ？」

「うん、リリースがそうしたいのなら構わないよ。一緒にしましょう、リリースさん（あなたとはいろいろとお話したいことがありますからね。）」

「ありがとうございます、それではぜひ一緒にさせていただきますね（望むところです、私もゆっくり話したいと思っていましたから。）」

うん、もう気にしない。表の言葉とは裏腹に何か別の声が見えるのは気にしません！

こうして私たちは3人で昼食をとりました、どんな風だったかというところ……思い出したくありません。ただ言えるとすれば……リリースとリリースさんの怖さを垣間見た感じがしますね……

そして時刻は夕刻。

「ふう、今日は楽しかったです、ありがとうございます、リリースさん。」

「私も楽しかったよ、よければまた一緒に出掛けたいな。」

「ふふ、そうですね、今度は姉さんも一緒に行きたいです。」

「そうだね、なら今度はイリアさんも誘って3人で出掛けようか。」

そうですね、今度は姉さんも一緒に行きましよう、そうすればきっと楽しくなります。

「リリスはこれからどうするの？私はすこしアルカンシエルに寄っていいのかなと思ってるんだけど。」

「私は部屋に戻ってお風呂とご飯の用意をします。姉さんもきっと疲れて帰ってくると思うので。」

今日リーシャはお休みでしたが姉さんはシュリと一緒に練習すると聞きました、なので姉さんが気持ちよく1日を終われるように準備しないといけません。

「うん、わかった、それじゃあここでお別れだね。」

「はい、今日はほんとに楽しかったです、ありがとうございましたリーシャ。」

「こちらこそ、それじゃまた明日、リリス。」

こうして私はリーシャと別れ西通りを歩いています。

「通商会議の後のこの静けさ………なにか不気味ですね。」

今のところ赤い星座が動いたような形跡は見られません。帝国との契約が終わり彼らもすでにクロスベルに用はないはず………ですがいまだに市内の中に姿が確認されています。

「今考えても仕方ないのですが………」

私がそう考えているとふと背後から声がかかりました。

「歪んだお前がクロスベルを救う算段か？ご苦勞な事だな。」

「！？」

そつ………その声は二度と聞きたくないと私が思っていた声でした。

「なぜ………なぜあなたがここに――！」

私は声を荒げ、気づけば声の主を睨んでいました。

「フフ、そう睨まないでくれよ。久しぶりの再会だったのに。」

「ふざけないでください！！今さら私に何の用があって……………」

「何の用か…………それはお前自身がよくわかっているだろう？」

「……………」

そんなものわかっていますよ、あなたが狙っているものは…………

「お前の中に眠る闇の力、最後の一欠けらをもらいにな。」

「くっ！！」

私は刀を構えいつでも切り込めるよう体制を低くする。

「フ、まあ焦るなよ。別に今すぐお前に手を出すわけじゃないさ、今日は挨拶をしに來ただけなんだからよ。」

「ならなんのために「お前と一緒にいた子、アルカンシエルの準ヒロイン、リーシャ・マオだったな。」！？」

なぜそれを……………まさか最初から見られていた！？でもそんな気配は感じませんでしたし。

「まあそんなことはどうでもいい、時が来ればお前の中の闇の一欠けらをもらいに来るぞ。ああ先に言っとくがお前に逃げ場はないと思え。」

「えっ……………」

「いや、お前自身は逃げれるな。まあ簡単に言えばお前が逃げればお前に関わったすべての人間が死ぬと思ってくれればいい。」

「っ……………！！」

どうして……………

「まあ今は精々楽しく過ごしな、そう遠くない未来お前は××××××だからな。」

「……………」

やっと私は…………

「恨むのなら自分自身の適応力の高さを恨むことだ。」

大好きだった姉さんと…………

「とはいえそういう風に調整したのは私なんだがな。」

大好きで…………大切な人たちがたくさんできたのに…………

「じゃあな、時が来ればまた会おう。“被陰体157番”」

またあなたは私からすべてを奪うの……………？

一際強い風が吹き、目を開けたときすでにその声の持ち主の気配は消え失せていた。



「う……………うああ……………」

また失ってしまうのかという絶望感が私を包む、わからないわけじやなかった。あの人たちが私を狙っていることなんて最初からわかっていた、でも……………そんなことを忘れてしまうくらいこのクロスベルで私の身の回りで起こったことが大きすぎた。

姉さんと再会し受け入れてもらえたこと、リーシャと出会い心から信じあえる親友になれたこと、言い表せないほどたくさんの嬉しいがあった。

「あああ……………ああああああ！！！」

だからこそこんなにも悲しい、私は人通りがまったく言っていないほどない通りで泣いた、ぶつけることのできない悲しみをただただ吐き出すように。

そんな時だった、私は誰かに優しく抱きしめられた。

「前にもこのようなことがありましたね、あの時もあなたは一人で泣いていました。」

「あ……………」

聞いたことのある澄んだ声が私の耳に届く。

「私にはあなたの悲しみを取り除くことはできません、ですが……  
……こうしてあなたを抱きしめることはできます。」

「あ……………ああ……………」

抱きしめられて伝わってくる温もりが私を包む、心が落ち着いてくるのがわかる。

「あの時も言いました、私を頼りなさいと、それに……………今のあなたは一人ではないのでしょうか？あなたにはたくさんの繋がりがあります。決められた運命ではなく、あなた自身の手で紡いだ絆が。」

そうだ、また私はあの時と同じようなことになるところだった。

「そう……………ですね、私はもう……………一人ではないのですよね。それなのに私は……………」

「ふふ、今はそれがわかっただけでもいいのです、もう……………あの時のような過ちは起こさないはずですから。」

「あはは……あの時はすみませんでした、あの時の私は全てをあきらめていましたから……  
少し、胸を借りていいですか？汚してしまうかもしれませんが……」

不思議とすでに私を包んでいた絶望感は消えていた、今はただ……  
…目の前の人物に甘える……というのは間違いか、でも似た感情なのは違いない。

「構いません、好きなだけ泣きなさい、リリースが落ち着くまでこうしていますよ。」

その声を合図に私は我慢せず全てを吐き出すように泣いた。

「ありがとうございます……」

“ アリアさん ”

傷ついた心を癒すのはリリースにとってもう一人の姉と言っても過言

ではない人だった。かつて短い期間ではあるがリリスと共に旅をし、戦いを教え、家族の温もりを教えた人物。

身喰らう蛇 第七柱 鋼の聖女 アリアンロード、兜を取りリリスを抱きしめ、その優しい表情は使徒として恐れられている人物とはかけ離れているものであり、リリスの大好きなもう一人の姉が確かにそこにはいた。

### 38話「鋼の聖女と過去」

リリス     s i d e

「あの、ありがとうございましたアリアさん、すごく落ち着きました。」

「ふふ、それはよかったです。あなたの力になれてうれしいですよ。」

アリアさんに抱きしめられたおかげか随分と落ち着きました、思えば昔からそうでした。私が一人で泣いているときいつもアリアさんがいつも慰めてくれた気がします。あれ？でもどうして……

「でも、どうしてアリアさんがここに？まだ計画が始まるには……」

「そうですね、確かに『幻焰計画』の本格的な始動はまだですが……  
……久しぶりにリリスに会いたいと思ったのですよ。」

「あ／／／」

うう、会いたかったのは私もですよ、でもこうして面と向かって言われるとさすがに恥ずかしいです。

「ふふ、あなたのそういう照れる姿も久しぶりに見ました、やはり可愛らしいですね。」

「もう／＼アリアさんからかわないでください！！／＼／」

いつもは綺麗な女性っていう感じで憧れの存在でもあるのに今は悪戯を決めた楽しそうな顔をしています……

「ふふ、ごめんなさい。あなたの服装がいつもと違うこともあったのでしょうかね。」

「ああこの服ですか？大切な……大切な親友が私の為に選んでくれた服なんです。」

「そうですか、あなたにもそのような人ができたんですね。」

「はい！」

昔アリアさんと初めて会った時の私は……一言で言うなら全てを

拒絶するような性格をしていたと思います。姉さんを除いてですが、ですがアリアさんとエンネアさんと過ごすうちに私は変わっていきました。

家族なんていない方がいいと思っていた私に温もりを教えてくれた、家族の大切さを教えてくれました。本当にこのことは感謝してもしきれないです。

「それにしても…………なぜこのようなところで泣いていたのですか？誰かと話していたようですね。」

「あ……………」

今の楽しい時間を引き裂くように私の心に入ってくる絶望、思い出すだけでまた涙が出そうになります。

――ギュー――

「え？」

「大丈夫です、無理に聞こうとは思いません。リリースが話したいと思った時に話してくれればいいですよ。」

本当に優しくすぎですよアリアさん、確かに私は誰も巻き込みたくあ

りません。私の所為で誰かが傷つくのは見たくはありませんから、でも……………それでも誰かに頼りたいと思う自分がいる。姉さんやリシャには今の生活を崩してもらいたくない、私がいなくなった後でもその思いは変わらない。私がいなくなっても……………何年かすれば忘れてくれるだろうから。

「話したい……………話したいです、私は誰にも傷ついてもらいたくない。それはアリアさんももちろんです、それでも……………私はアリアさんを頼ってもいいですか？」

「ふふ、どうぞ、もちろん私だけではありませんよ？結社の皆を家族と言ったあなたに私たちはとても感謝しています。盟主を初め力ンパネルラもあの子たちも、そして今は亡き 剣帝 も。」

盟主様、カンパネルラさん、エンネアさん、アイネスさん、デユバリイさん、そして……………レーヴェさん。

思えば私はアリアさんだけではありませんでした、結社のたくさんの方にお世話になりました。

――過去――

「それでは 福音計画 の完遂、お願いしますよ？ 白面。」



「フフ、まかせていただこう。」

白面　と言われたのはリベールの異変を巻き起こし最終的にエステルたちとの戦いに敗れ、煉獄に落とされた人物、ゲオルグ・ワイスマンである。

「カンパネルラも、そしてほかの皆さんもよろしくお願いしますね。」

中央に立つ人物は控えている人物たちにも計画の成功を促す。

「全ては盟主の「みなさ〜ん！！お菓子を作ったのですがぜひ…」

……」

彼らの中央に立っていた人物、カンパネルラが声の主に返事をして  
いる最中、その場に似合わない幼い少女の声が響いた。

カンパネルラは喋るのを止め、声のした方向を見る。もちろんカン  
パネルラだけではなくその場にいたすべての人物が声のした方向に  
視線を移す。

「えっと……もしかしてもしかしなくてもタイミング悪かったで  
すか………ね？」

気まずそうにしながら現れたのは短い黒髪に真紅の瞳を持った少女、  
リリス・プラティエだ。

「ふふ、構いませんよ。すでに伝えるべき用件は済みましたから。」

中央に立つ人物はリリスが安心できるように優しくそうに話す。

「そうでしたか…… 盟主様…… ああ~~~~!!」

リリスが 盟主 と呼ばれた人物にさらに言葉を続けようとしたとき  
リリスの叫びによってそれは中断された、その場にいた皆が目を  
向けるとそこには……

「何先にもう食べちゃってるんですか!! レン!! ルシオラさん!!」

「ふふ、ごめんなさいお姉ちゃん、あまりにおいしそうだったから  
我慢できなくなっただけ。」

「まあまあ堅いこと言わないでリリス、そんなに声を荒げると老けるわよ?」

「レンはそのまま食べていいですよ、あとで感想を聞かせてくださいね。ルシオラさんは……………オハナシしますか？」

「うんー!」「ごめんなさいリリスー!」

リリスの言葉に正反対の反応を返した二人だった、片方は目を輝かせながら嬉しそうに、もう片方は遠目でもわかるくらいガタガタ震えている。

「ウフフ、にぎやかだね。」

「そうだな、それにしてもリリスのオハナシというワードはすごいな、あれでもルシオラは仮にも執行者なんだが。」

笑うカンパネルラと呆れて溜息を吐くレーヴェ。

「ふふ、まああのオハナシを一度経験すればそんな反応にもなってしまうさ……………」

そう言い遠い目をするカンパネルラを見て……………

「そ、そうか……………」

きつと何かがあったんだろうが聞かない方がいいと思ったレーヴェだった。

そんな二人の元にもリリースはお菓子を持って走ってきた。

「レーヴェさんにカンパネルラさんも食べてください。」

笑顔で差し出してくるリリース、それを断る理由がない二人は。

「いただくよ……………うん、おいしい。リリースはやっぱり料理が上手だね。」

「いただきます……………今までもたくさんのお菓子や料理を食べさせてもらったがやはりうまいな。」

「ありがとうございます、お二方。」

カンパネルラとレーヴェの反応に満足そうに頬を緩ませるリリース。  
そこへ……………

「お姉ちゃん！！」

レンがリリスに抱き着いてきた。

「おや、どうしたのですか？レン。」

「うん、お菓子すごくおいしかったわ！！もしよければレンにも作り方教えてくれないかしら？」

ルシオラも興味を持ったのかリリスへと聞く。

「あら、楽しそうね。私も一緒にいいかしら？」

「はい、よろしいですよ。それでは行きましょうか。」

「はーい。」

歩き出したがリリスは立ち止まり。

「そうでした。盟主様も使徒の皆様もまた今度食べてください

ね、腕によりをかけて作りますから。」

「わかりました、その時が待ち遠しいですね。」

「私もその場にいて食べたかったですけど……… 白面 ? 何を  
楽しそうに食べているのですか ? 私に対する挑戦ですかそれは。」

「い、いやそんなつもりはないよ。気を悪くしないでくれ 鋼 よ。」

結社の雰囲気上台無しにするようなほのぼのな光景、それを見たり  
リスは笑みをこぼす。

「ふふ。」

「リス ?」

「今……… 笑ってくれましたね、やっと。」

リスの笑みに皆は驚いたが声に出したのは 盟主 と 鋼 。た  
だ 鋼 の最後の言葉はあまりに小さく誰の耳にも届かなかったが。

「すみません、ただ……家族ってこんな感じなのかなって思っ  
たんです。」

リリスは柔らかい表情のまま話を続ける。

「私には大切な姉がいます、その人と過ごしているときもすごく楽  
しかったです。今と変わらないくらいに……だから、えっと……  
すみません。何が言いたいかというと、今の私にとってこの身  
喰らう蛇のみなさんは私にとって大切な家族だということです。」

「リリス……」

「すみません、まだみなさんのお世話になって日の浅い私がこんな  
おこがましいことを言って……」

「そんなことはありません、あなたに家族だと言われた時私は嬉し  
く思いました、いえ……どうやら私だけではないようですね。」

「盟主様……みなさん……」

盟主の言葉にリリスは言葉が出ないくらい心が幸福色に染まる。

「それじゃあ家族ということなら……レンがお姉ちゃんの妹ね！」

「レン………」

「それなら私がリリスの姉かしらね。」

「何を言ってるのですか？ 幻惑の鈴、リリスの姉は私です。」

「あはは、アリアさん、ルシオラさん………」

「じゃあ僕がリリスの兄かな。」

「それはないです（ないわよ）（ないですね）」「」

「なんでさ！？」

「――時は戻り――」

「あはは、そういえばそんなこともありましたね、懐かしいです。」



「あの時あなたに家族と言われたとき本当にうれしかったのですから。」

ありがとうございますアリアさん、そんな風に言ってくれて。

「なら、今度はもうあの時のようなことにはならないようにしないといけませんね。誰も傷つけないとは思っても、その私の思いが誰かを傷つけてしまう。姉さんと再会してそれが身に染みました。」

「それでは……………話してくれるのですね？」

「はい……………」

そういえば誰かが言っていた気がします、私の力は数多の絆だつてそれを誰が言っていたかは忘れてしまいましたけど。私は決意を固め話し出す、あの時私の人生を捻じ曲げた人物が接触してきたことを。

「私がさっき会っていたのは……………リシア、リシア・キルレアン。闇の創生 計画の首謀者です。」

ついに動き出した運命の齒車、その運命の行きつく先は幸福か、それとも絶望か。

その結末を知る者は今はまだ誰もいない、ただ言えることとすれば……… 零の御子 ですらも見えなかった未来が着実にリリスに迫っているということ。

特務支援課の物語は既に始まっていた、だがここにリリスの物語が本当の意味で動き出したのは言うまでもない。

リリス    s i d e    e n d

### 38話「鋼の聖女と過去」(後書き)

結社での生活がほのぼのすぎたでしょうか。

まあこんな感じかなとおもい書かせていただきました。

あと黒幕の名前ですが書いているときに即興で考えた名前です。

上の名前のキルレアンという名前ですが、作者はC A B A Lというオンラインゲームをしているのでそれに出てくるボスキャラの名前に似た感じになりました。諸々はパクっていません。

闇の創生………亡者の塔………なんか繋がらないけど作者の中では何かが繋がりました！！

### 39話「決意の瞳」

「私が先ほど会っていたのは……リシア、リシア・キルレアン。闇の創生 計画の首謀者です。」

重苦しい空気の中でリリスが名前をつぶやく、自身の人生を狂わせた者の名を。

「そうでしたか、やはり接触してきたんですね。」

リリスの口からその者の名を聞き、ある程度予測できていたのか大して驚きを示さないアリアンロード。

「やはりということは……知っていたんですか？」

リリスはその名をアリアンロードが知っているとは思わず少し驚いた感じで聞く。

「はい、というよりも私たちは 闇の創生 計画についてはある程度掘んでいます、あなたが私たちの元にいたときから調べていました。」

「え……………どうして、あれに関する資料はすべて処分しました。後にそれがフェイクだとはわかりましたがオリジナルを持っているのはリシアだけです、それなのに……………いえ、なぜ私が教団にいたということを知っているのですか？」

リリスの意見も元もだ、リリスは過去に 身喰らう蛇 にいたが誰にも自分が教団の被害者だとは言っていない。ましては知っているのはこのクロスベルに来てから話したイリア、リーシャ、リース、そして昔に話したことのあるヨルグマイスターだけと思っていたのだ。

「そうですね、あなたのレンに対する態度……………ですね、私たちがあなたが教団にいたのではないかと疑い始めたのは。」

「レンに対する態度？」

「リリスはあの時誰にも心を開いていませんでしたね、もちろん私にも。ですが、あなたが最初に心を開いたのはレンでした。レンはあの時自分を教団に売った家族を憎んでいた、故に家族を否定し……………偽物の家族に囚われていた。」

「……………」

「それはリリース、あなたもでしょう？でもあなたはイリア・プラティエと出会うことで家族を知った。だから家族を頑なに否定するレンを見ていらなかった、レンはまだ幼い、それなのに家族の温もりを知らないのはあまりに悲しすぎると。」

たしかにそうだ、リリースは初めて 身喰らう蛇 のメンバーと顔を合わせたとき何者も寄せ付けない雰囲気を出していた。しかしレンと出会うことで何かを感じた、その時にいたレーヴエとヨシユアに聞くことでレンの過去を知った。

「そうですね……あの時私はレンに何かを感じました、それで色々調べて……まさかその後の行動が私の閉ざされた心をこじ開けることになるなんて思いませんでしたけど。」

あははとすこしはにかみながらリリースは言う。

「ふふ、それからでしたね。あなたが私たちに心を開き始めたのは、レンと話し、子供らしい遊びをしていく中であなたは変わっていった。」

アリアンロードは目を閉じて過去を思い出すように話す。

「ですが私たちは疑問に思った、今まで他人を拒絶していたあなた

がなゼレンに心を開いたのか。そこでカンパネルラ達に 盟主を  
初め皆で聞いたのです、なにかリリスにあったのかと。」

――過去、星辰の間――

「おや、みなさん集まって何か用なのかな？」

「いえ、大したことではないのですが来てくれたこと感謝します。  
カンパネルラ」

「ウフフ、構わないよ。それで 鋼の聖女 だけでは……………ないよ  
うだね、それで何か聞きたいことでも？」

「ええ、リリスがレンに心を開きつつあるのはあなたも知っている  
でしょう？あれほど頑なに他者を拒絶していたあの子に一体何があ  
ったのか聞きたくなったのよ。」

「そうだね、僕はよくは知らないんだけど……………レーヴェとヨシ  
ユアはどうだい？」

「そうだな、大してなにもなかったとは思うが……………いや。」

「何かあったのですか？ 剣帝」

「ああ、前に一度リリスがレンの過去に何かあったのかを聞きにきたんだ、俺とヨシユアにな。」

「そうだったね、あの時は初めてリリスから話しかけてきたからどうしたのだろうと思ったけど。」

「ふむ……………それが何かあったのですか？」

「うん、僕たちはレンが教団の被害者だということを話した、その時リリスが微かに動揺していたんだ、そうだよ？ レーヴェ。」

「それだけじゃない、あの時ヨシユアは気づかなかったかもしれないが……………リリスは教団という言葉聞いた時目を見開いて驚いていた。」

「そうだったんだ……………あ、まさか！！」

「なるほど、これで繋がりましたね。」

「ええ、おそらくリリスは「教団の被害者……………」ということですね。」



「盟主……………」

「何か……………知っているのですか？」

「ええ、これは私も後に分かったことなのですが……………クロスベル、ガレリア要塞のさらに向こうにあったとされる教団のロッジが何者かに破壊されていたというのは皆も知っていますね。」

「うん、たしか約7年前だったかな、一体誰なんだろうね……………」

「そうですね、そしてその約7年前のあの日、その周辺で一人の少女が目撃されているんです。」

「少女？まさか……………そんなことは……………」

「その少女の特徴は……………短い黒髪に真紅の瞳を持った少女だそうです。」

「……………!?」「……………」

「そしてこれも今にわかったことです、そのロッジでは他のロッジとはまったく違った実験が行われていたようなのです。」

「まったく別の……実験。」

「それが何かはまだ調べている最中ですが……ふふ、気になりますか？ 鋼 道化師」

「はい、やっと……彼女の事を知ることができると思うと……」

「そうだね、それじゃあ？」

「はい、あなた方にはその調査をお願いしたいと思うのです」

「よろしいのですか？それは計画とはまったく関係のないことです  
が。」

「構いません、あの子を少しでも救いたいと思っているのはあなた  
方だけではありません、私たちもですから。」

「……わかりました、感謝します。カンパネルラ？」

「うん、いつでもいいよ？それじゃあ行こうか。」

――現在――

「……………そんなことが……………」

「ええ。」

リリスは知らなかった、自分の知らないところでたくさんの人が自分の為に動いていてくれたことに。

「あはは……………まったく私は……………こんな……………」

「ふふ、あなたは愛されていますからね、あなたには不思議な力がある。たくさんの人を惹きつける力が。」

「私なんかが愛される資格なんて……………いえ、こんなことを言うのはいけませんね。」

「そうですね……………おそらく、彼らが動き出すのは 碧き零の計画の終了後です。」

優しい表情を一変させ真剣な表情をするアリアンロード。

「はい、その時が一番時期が合うでしょう。帝国も共和国も混乱し動きやすい時でしょうから。」

「そうですね、ですが今は目の前のことに集中しましょう、おそらく私ももうすぐ彼らの前に出るようになるでしょうから。」

「そうですか…………ふふ、そうなれば私もアリアさんと戦わないといけませんね。」

「ええ、ですがリリスの成長が見れるとなると嬉しいという気持ちがあります。」

「あはは、負けませんよ私は。」

「いい覚悟です、それに…………いい表情になりました、あなたらしい…………私の大好きなリリスの顔です。」

「アリアさん……………」

「ふふ、それではそろそろ私は行きます、また会いましょうリリス。」

」

「はい、今日は本当にありがとうございました。」

そう言いアrianロードは転移を使いその場から消える、残されたリリスの目には確かな決意があつた。

「そうですね、私は一人ではないんです。」

もう絶対に失わない、自分自身も絶対にいなくならない、絶対に最愛の姉の傍から消えない。

大切な者のためなら自分が消えることも厭わないと思っていた、でもその思いはただの自己満足。そんなものが幸せに繋がるなんてありえない。

「私は負けません、あなたの方がどんな手を使つてきても……………その全てを跳ね除けて見せる！！」

確かな決意を見せたりリス、碧き零の計画。そして闇の創生。目先の不安はたくさんあるが今のリリスに怖いものなどないのかもしれない、彼女には彼女を支えるたくさんの絆という力がある。

動き出したリリスの物語、たくさんの思惑が動く中、彼女はどのような軌跡を辿るのだろうか。

願わくば、それが幸福で染まる道であらんことを。

く動き出す運命の歯車くゼムリア通商会議く      E N D

### 39話「決意の瞳」（後書き）

2章終了です。

次はインターミッション、ほんの息抜きタイムですね。

ビーチでのことやミシユラムテーマパークを戦いという場からかけ離れた楽しいものにしたいと思っています。

お楽しみに！！

## プロローグ

リーシャとリースさんの共闘、シグムント・オルランドとの戦い。

アリアさんとの再会、たくさんのがあった。

そして……リシア・キルレアンとの望まない再会。

私に迫る教団の脅威、でも不思議と私は怖くない。

だって私は一人ではないのだから、守ると決めたものを必ず守る。

絶対に失わないと決めたから。

さて、これまでの戦いを労うかのように届いたテーマパークへの招待状。

次の大きな戦いまでの束の間の休み。

今は楽しもう、自分自身運命に負けてこの身を失うつもりは毛頭ないけれど……もしかしたら二度とこんな楽しい時間を過ごすこと



はできないかもしれない。

だから、今だけは……この幸せな時間を楽しんでもいいよね？

#### 40話「招待状」

リリース side end

「え？ミシユラムへの招待状ですか？」

「ええ、IBCのマリアベルさんからよ。通商会議前夜でのアルカ  
ンシエルの活動を評価してくれたようでね、ぜひ景気を養ってほし  
いとのことよ。」

なるほど、おそらく何らかの思惑があるのでしょうか……ミシユ  
ラムのテーマパークは私自身非常に興味があるんです！！ぜひ行き  
たいですね！！

「それは楽しみですね、誰が行くのです？」

「そうね、私とリリースとリーシャ、シュリに……あとセシルも誘  
おうと思ってるわ。」

「ふむふむ、他の劇団の人とも行きたかったんですけど……」

「ふふ、残念だけど招待券は6枚しかもらってないのよね、まあみ

んなはしっかり楽しんできてくださいって言ってたけど。」

「そうですか……あれ？6枚ってことはあと1枚あるってことですよね？」

「ええ、リリスは誰か誘いたいと思ってる人はいるかしら？」

「私が決めてもいいんですか？」

「構わないわよ、はい。」

そついつて姉さんは私にチケットを差し出します。

「ありがとうございます、それではさっそく誘いに行ってきますね。」

「ええ、いつてらっしゃい。」

さて、では行きましょうか。彼女ならおそらく警察本部でしょうか。

――少女移動中――

「さて来ました、警察本部前です。キングクリムゾン並みの速さです  
ね。」

え？キングクリムゾンって何かって？あの某鬼巫女12Pのスペル  
カードですよ。

「まあそれはさておきっと、おじゃまします。」

私は警察本部の扉をくぐると女の子が一人モニターに向かっていま  
す。

「いましたね、フラン。今よろしいですか？」

「え？……あー！リスさん！！」

私を見つけた途端パタパタと走ってくるフラン、可愛いです。

なぜ私がフランのことを呼び捨てで呼んでるかというと通商会議の  
後にロイドさんたちに誘われたんです。

ノエルさんの妹が私に会いたがってるって。それで私は会いに行っ  
たのですがまさかその女の子が前に私が助けたあの女の子だと思  
いませんでした、ですので私自身とてもいい再会だったと思います。  
それでその時はまだ私は彼女の事をフランさんと呼んでいたんです

けど、堅苦しいのは嫌だということと呼び捨てで呼ぶことになったんです。

「わざわざ走らなくてもいいのに。」

「えへへ、すみません。リリースさんが会えたのがすごく嬉しかったので。」

嬉しい事言ってくれますね、何となく小動物のような可愛さとも言うのでしょうか。  
そんな感じがフランはしますね。

「それで今日はどうしたんですか？」

「ああそうでした。実は……………」

——少女説明中——

「なるほど、ミシユラムのテーマパークに……………」

「はい、話しによれば特務支援課のみなさんも来るとのことですが。」

「ということはお姉ちゃんも来るんですか!？」

おや、すごい食いつきようですね。

「ええ、間違いなく来るとおもいます。」

「そうですか、それじゃアリスさん。私もお願いしてもいいですか？」

「わかりました、それでは当日は船が出るので港までお願いしますね。」

「了解です〜!楽しみだな〜」

ふふ、本当に楽しそうですね。まあかという私も当日が非常に楽しみなんです。

この後私はフランと別れて姉さんの部屋へ戻りました。

姉さんに誰を誘ったか聞かれたのでフランの事を言ったら姉さんが

.....

「あらら、またライバル登場なのね。リーシャがんばりなさい。」

ということを書いていたのですがなんのことでしょうか。

――そして当日――

「さてと、あとはセシルさんとフランだけですな。」

「そうね、まあまだ時間はあるし遅れるなんてことはないと思うけど。」

そうですね、出発まではまだあと30分ほどありますからね。

「リリース、少し落ち着いたら？楽しみなのはわかるけど。」

そわそわしていた私にリーシャが笑いながら言ってきました。

「すみません、わかってはいるんですけど………やっぱりすごく楽しみです。」

「なんだかんだ言ってるリーシャ姉もさっきからそわそわしてると思うけど？」

「シュリちゃん!？」

「フフ………あ、来たわね。」

姉さんが向こうから人影に気づいたようです、二人いるということはセルさんとフランですね。

「みんな早いね、おまたせ。」

「みなさん、お待たせしました！リリースさんもおはようございます  
!!!」

「おはようございますセルさん、フラン。」

「おはよう二人とも、それじゃみんなそろったことだし船に乗ろうかしら。」

私たちは船に乗ります、思ったより乗る人が多そうですね。  
さすがは噂に名高いテーマパークです。



「いきましょーリリースさん!」

ーギューー

フランが私の横に来て手を握ってきます。

「ふふ、慌てないくださいフラン。」

「えへへ、すみません。」

もう、本当に可愛いですねフランは。  
私がそんなことを考えているともう片方の空いてる手を握る手があ  
りました。

「リ、リリース……いこ?」

「あ、はい。」

照れながら首を傾げて聞いてくるリーシャがいつもよりすごく可愛  
く感じました……

「むむむ、リーシャさんですか。強敵ですね。」

「たしかにフランさんは可愛いけど、私だっ て負けないんだから。」

二人が小さな声で何かを言っていますが聞き取れませんね、何を言っているのでしょうか。

こうして私たちはミシユラム行き 連絡船に乗りミシユラムへと出発しました。

リリース side end

#### 41話「王様ゲーム前半戦」

リリス side

今私たちはミシユラムへ向かうため連絡船に乗っています。

「それにしても暇ね。」

「あはは、しょうがないですよイリアさん。」

姉さんの気持ちはわかります、最初のうちは風景を楽しんだり潮風を楽しんだりしていたのですけどね。

「なにか楽しいことはないの？」

「姉さんだらしないですよ。」

アルカンシエルのトップスターがこんなところでそんなだらしない恰好しないでくださいよ、他にお客さんもいるんですから。

「でしたら王様ゲームなんてどうですか？」

「『『『王様ゲーム?』』』」

フランの発言に私たちは全員聞き返します。

「はい、実は私即興で今くじを作ったんですけど。ルールはわかりますよね?」

「たしか王様とほかの数字のくじがあつて、王様のくじを引いたひとが命令できるってものよね?」

ああよく友達のお泊りでやるあれですね、漫画で何度か見たことがあります。たしか……題名は忘れましたが枯れない桜の物語でしたっけ……

「その通りですセシルさん、このままでも暇なだけなのでどうでしょう?」

「いいじゃない、おもしろそうね。でも命令の許容範囲はどれくらいなの?」

だらつとしてた姉さんが食いつきましたね、しかもなんか私の方を

見て目をキラキラさせていますし……

「そうですね、よほど過激なのとか傷ついてしまつようなことはダメですね。」

まあそれが普通ですね。

「それじゃあさつそく始めましょう、みんな集まって。」

こうして私たちは6人で王様ゲームをすることになりました。

――1回目――

「それじゃあいつせーの、せい！」

姉さんの掛け声のもと皆一斉にくじを引きます。

「あ、私が王様ですね。」

おや、どうやら王様を引いたのはリーシャのようです、ちなみに私は3です。

「へえ、王様はリーシャなの、一体どんな過激な要求が来るのかしら??」

「そ、そんな命令しません!! えっと、3番が……」

え!?! まさかの私ですか……

「3番が2番の人を膝枕する!」

「え、なんか普通すぎるわね。」

違いますよ姉さん、姉さんがみんなと違って大胆すぎるだけです。

「えっと、2番は俺だ。3番はだれ?」

私が膝枕する相手はシュリのようなですね。

「私ですよ、どうぞシュリ。」

「「なっ!?!」」

リーシャとフランが声を上げます、というよりもその命令をしたのはほかでもないリーシャですよね？

「えっと、それじゃありリス姉。」

「はい、どうぞ。」

シュリは遠慮してるのかゆくり私の膝に頭を下ろしていきます、シュリの頭が私の膝に付いた途端私はシュリの頭を撫でなくなってしまったので撫でます。

「ーナデナデーー」

「リリース姉!?!?!」

「おや、ダメでしたか？シュリ。」

「いや、そんなこと……ないよ?!?!」

「ふふ、照れてるんですか？シュリは可愛いですね。」

普段は男勝りなシュリですがこんな可愛い一面もいいものです  
ね。

「い、いきなり可愛いだなんて言うなよ！／＼／」

ああもうほんとに可愛いですよシュリ。

「「むむむ」

「どうしたのですか？リーシャ、フラン。」

「なんでもないよ！」

「なんでもありません！」

「??？」

「あらあら。」



「ふふ、まったくあなたたちを見てると飽きないわね。」

なぜかわかりませんがすねる二人と私を交互に見て温かい目を向けるセシルさんと姉さん。

「それじゃあ次、いつくわよー!!」

姉さんの声でシュリも私の膝から頭を退けて元の位置に戻ります、シュリがすこし残念そうにしていたのは私の気のせいでしょうか…

……

――2回目――

「せーの、せい!」

おや、次は4ですね。

「あら、次は私が王様ね。」

王様はセシルさんのようです。

「セシルさんですか、一体どんな命令が来るんでしょう。」

「そうね、でもセシルは意外と天然なところがあるから強烈なのが来るかもよ?」

「ちょっとイリア、天然ってなによ? 失礼するわね。」

でもあながち間違っていないですよ? 聞いていますよロイドさんに連れて来る人男女問わずロイドさんのお相手だと信じちゃうそうじゃないですか。

「ふふ、ごめんなさいね。ほらセシル、命令命令」

「もう、そうね……王様が4番を抱きしめるってのはどう?」

またまた私ですか、でもさつきと同様これもいたって普通ですね。

「あら、意外と……というより普通すぎるわね。」

「ふふ、まあセシルさんらしいといえづらいんですけど。」

「まあいいじゃないの、それで4番は誰かしら。」

「ああ私です。」

「あら、リリスちゃんなのね！やったわ。」

「なっ!?!」

え、今度は姉さんが声をあげました。どうして??

「リリスちゃん、いらっしやい。」

「あ、はい。」

――ギュッ――

「久しぶりのリリスちゃんの感触だわ。」

うわ、セシルさんに抱きしめられた瞬間に訪れるこの柔らかさは……それに……すごくいい匂いがします。

「うん、なんかこうしてるとすごく眠くなってしまう……」

「ふふ、いいわよこのまま寝ても。」

「え？でも……」

私が申し訳ないと、そう考えてると姉さんが突然私を引き離して。

「はいお終い！！いくらセシルといえどこれ以上リリスを籠絡するのは許さないわ！！リリスの姉は私なの！！」

「あらあら、残念ね。」

あれ、もしかして姉さん。

「姉さん、もしかして私がセシルさんにとられてしまうかもしれないって思ってたんですか？」

「え？いや……えっと……」

「大丈夫ですよ姉さん、私はずっと姉さんの傍にいますから。」

「リリス……………」

「でもセシルさんも私の姉のような存在ですし……………みんな大切です。」

「ふふ、ありがとうリリスちゃん。あゝあ私もリリスちゃんみたいな可愛い妹がほしいわね。」

「何言ってるの、あなたには弟君がいるじゃない。」

「もちろんロイドも私の可愛い弟よ、それでもやっぱりほしいと思っちゃうのよ。」

「そついうものなのかしらね。」

「そうよ、ということでイリア、リリスちゃんをちょうだい。」

「イヤよー!」

あの、お願いですから私を挟んでの言い合いは止めてください。  
両サイドから私にはないものが当たってるんですよ!!

「あはは、ドンマイリリス。」

「私もお姉ちゃんに抱きしめてほしいな、向こうに着いたら言ってみよう!」

「リリス姉、がんばって生きろ。」

リーシャは私に手を合わせてるし、フランはトリップしてるし……  
……てかシュリ!なぜかあなたからは別の意味を感じるのですが!?

そんなこんなで前半戦終了です、後半に続きます。

リリス    s i d e    e n d

## 42話「王様ゲーム後半戦、そして到着」

リリース side

さあ引き続き王様ゲームは後半に突入です。

――3回目――

「いつせいの、せい！」

このゲームではおなじみとなりました、姉さんの掛け声で皆一斉にくじを引きます。

「ふふ、ついに来たわ！！今度は私が王様よ！！」

うわ、どうやら姉さんが王様を引いたようです。ちなみに私は4です。

「げっ！イリアさんかよ……………」

「これは……………恐怖ね……………」

「あはは……………」

「一体どんな命令なのでしょうか」

フラン以外みんな意気消沈というかなんというか……………リーシャな  
んかすでにあきらめてしまってますしね。

「そうね、いつも嫌がられて逃げられてるから……………」

え？それって……………私は自然と視線がリーシャへと動く、リーシャ  
がものすごくわかりやすく震えています。

「大丈夫ですよリーシャ、確率は5分の1、的中なんてよっぽど運  
が悪くない限りは……………」

そうです、確率は5分の1、まあ私が犠牲になることもあるんです  
が……………それでもやっぱり確率は平等です。リーシャに言いました  
がよほど運が悪くない限りは……………

「1番は王様に胸を揉まれなさい！もちろん嫌がらずにね！」



1番……誰ですか！？誰が姉さんの魔の手に……

「はは……ははは……orz」

リーシャー……！！

まさか本当に的中だなんて……とりあえず私にできることは……

「みなさん。」

「ええ、わかってるわりリスちゃん。」

「ごめん、リーシャ姉。オレには何もできねえ。」

「いいな、イリアさん、私も大きくなれるように分けてもらいたいくらいです。」

フランだけは何か違いますが私たちはリーシャの犠牲を無駄にはしません。

「『『『敬礼!!』』』」

すみませんリーシャ、私たちは無力なんです!!

「ちょ!!みなさん!?!」

「ふっふっふ、リーシャ?」

「嫌です!こんなところでそんな私は!!」

「来なさい。」

「はい………」

最初はリーシャも抵抗していましたがどうやらあきらめたようです。

――数分後――

「はあ／＼／＼はあ／＼／」

「前より大きくなってるわね、若いつていいわね、ほんとに。」

肩で息をしながら顔を赤くしているリーシャとスツキリした顔をしている姉さん、一体どんなことが行われたのかは私の口からは恥ずかしくて言えません／＼／

「えっと……………大丈夫ですか？リーシャ。」

私は少し心配になったのでリーシャに声をかけます。

「う、うん……………何とかね／＼／」

あはは……………重症ですね……………

――4回目――

「いつせいの、せい!」

おや？これは……………

「次は私が王様のようですね。」

そうです、王様を引いたのは私です

「へえ、リリースが王様か。どんな命令なのかしら。」

「なんかドキドキするわね。」

「大丈夫ですよ、そこまで過激なものとかはしないですから……………」

いや、ここは派手さを求めるべきでしょうか……………それとも無難に  
当たり障りのないものにするべきか……………

「リリース？……………なにその間。」

「いえ、そうですね……………では「間もなくミシユラムへ到着します、  
お客様はお忘れ物のないようお願いします。」……………」

え……………なんてタイミングで……………

「あはは……………まあ王様の命令はまた今度ということかな。」

「そうね、リリスもせっかく王様引けたんだしね。」

リーシャと姉さんが私を励ますように言ってくれます、こんなことで落ち込んでないですよ？……………ほんとに落ち込んでなんかいないですから……………

こうして私たちは船からおり、後に来るであろう支援課の皆さんを待つことにしました。

――数分後――

「おや、船が来ますね、もしかしてあれでしょうか。」

一隻連絡船が近づいてきます、きっとあれですね。

「あ！お姉ちゃんだ！！」

フランがノエルさんを見つけたようです、というよりあぶないですよ走っては……………

「ふふ、まったくお姉ちゃん子よねあの子、リリスもあれくらい甘

えてもいいのよ?」

「いやさすがに……恥ずかしいですから。」

さすがにあれくらい甘えるなんて恥ずかしすぎですよ、甘えたい気持ちがないわけではないですけどね。

「さて、私たちも行きましょうか。」

「そうですね。」

さてと、それじゃあ支援課の皆さんに挨拶にでも行きましょうかね。

リリース side end

ロイド side

「さてと、確かマリアベルさんが待っていてるんだっただか?」

「ええ、9時半に待ち合わせのはずだからちよつどいいはずだけど……」

それにしてもマリABELさんには感謝しなきゃいけないな、通商会議でいろいろあって俺たちは自分たちの力不足をこれでもかというくらいに痛感した。

でもここで立ち止まるわけにはいかない、きっとまだまだクロスベルでは何かが起きると思うからな。

だからこれはあくまで束の間の休息だ、思いっきり楽しもう。

そんなことを考えてると予想しなかった人物の声が聞こえた。

「あ、来た来た〜！」

え？この声は……

「こ、この声って……」

「ま、まさか……」

ノエルが驚いてるな、俺たちは皆声の下方向に視線を移す。すると俺たちのよく知ってる人物がかけてきた。

「お姉ちゃん、みなさん、おはようございます！キーアちゃんも、

おはよう！」

「おはようー！」

「おお、フランちゃんかよ！」

「ど、どうしてここに……昨日会ったとき何も言わなかったじゃない。」

どうやら姉であるノエルも知らなかったみたいだ、誰かに誘われたのか？」

「えへへ、お姉ちゃんたちを驚かせたくって。それに特別ゲストは私だけじゃないよ。」

え？そう聞いたときまた聞き覚えのある声が聞こえた。

「ふふ、来たみたいね。」

「よし！メンツもそろったことだし今日は楽しめそうね。」



ちょ、ちょっと待ってくれ、どうして……

「こ、この声って……」

「まさかね……」

こちらに歩いてくる5人。

「!？」

「おおおおっ!？」

俺は驚きで声が出なかったがランディはものすごく嬉しそうだ。

「あー、セシルだあ!」

「それにイリアさんたちまで……」

「へえ、また綺麗どころが集まってるじゃないか。」

「こんなことをしそうなのは…………ベル！…あなたね！…」

だろうな、俺も思ったし。

「ふふ、正解ですわ。」

イリアさんたちの後ろから近づいてくる一つの影、やっぱりあなただったか。

「マリアベルさん、これは一体どういう……………」

「フフ、皆さんを招待したついでに日頃仲がいいと聞いている方々もお呼びしただけですわ。アルカンシエルの方々は来月行われるリニューアル公演の激励も兼ねてますけど。」

「弟君達、やつほー。」

「ふふ、どうも御無沙汰してます。」

「でもなんでオレまで……………」

「まあまあシユリ、せっかく来たんですから楽しみましょう、ね？」

「リリス姉がそういうなら。」

なんかもう言葉でないといつかなんといつか……

「はは……なんて言ったらいいのか。セシル姉、休暇取れたんだ？」

俺はとりあえず思ったことを聞いてみる。

「ええ、偶然取れたところにイリアから連絡があつてね、ロイドたちも来ると聞いたからお言葉に甘えたのよ、迷惑だったかしら？」

そんなことあるわけないな。

「そんなことない、嬉しいよ。」

この気持ちは嘘じゃない、だがこの光景を目の前にして叫びだすやつがいた。

「うおおおっ！俺は夢でも見ているのか！？セシルさんやイリアさんだけでなく綺麗どころがこんなに沢山……ひゃっほう！テンションMAXだぜ！！」

ランディ……すこしは自重しろよ……どうやらこいつ思ったのは俺だけではなく。

「ランディさん、ウザイです。」

「ま、気持ちはわかるけどね。」

「でも、ちょっと驚きました……それよりも、リリースさん腕の怪我は大丈夫なんですか？」

あ、そういえばそうだな、俺も聞こうと思っていたんだけどタイミングがなかったからな。

「はい、その節はご心配をかけてしまい申し訳ありません、ですがほら。」

そう言ってリリースは腕を軽く回す、どうやら後遺症とかはなさそうだな。

「この通りです、あの時のみなさんの治療のおかげですよ、ありがとうございました。」

「そんなこと、私たちは当然のことをしたまですよ。」

「そうだよな……それと、すまなかったりリスちゃん、俺の「ランディさん。」？」

ランディの言葉を途中で遮りリスがランディに近づく、それで人差し指をランディの唇に置き……え？

「その先は言うてはダメですよ、あれは私がしたくてやったことなんですから、ね？」

そう言うてリリースは誰でも落とせそうな笑みでランディに言う。

「お、おう………／／／」

あれ？いつもここでテンションが高くなるはずんだけど顔を赤くして黙ったぞ……それにどうやらその笑顔を見たほかの人たちも顔を赤くしているみたいだ。

「今の笑顔は反則よね……………」

「はい、羨ましいですねランディさん。」

「ランディさん、あの時では飽き足らず……………」

「ランディさんは私のお城へご招待ですわね、あ、ついでにロイドさんもこの際消してしましましょう。」

エリイとティオは思ったことを口に出している、逆にリーシャからは何か黒い物が……………てかマリアベルさん！！今あなたの口から聞き逃せない言葉が聞こえたんですが！？

こうして俺たちは1日目はビーチでえいきを養うということでした。そく水着を借りに行った、てか俺大丈夫だよな？マリアベルさんに殺されたりしないよな……………

底知れぬ不安に恐れているロイドだった。

ロイド side end

## 42話「王様ゲーム後半戦、そして到着」（後書き）

さてさて、ついに次回はビーチでのことなのですが……

みなさんはリリースの秘密を覚えていますか？

ついに次回リリースの1つの秘密が支援課の一部の人達に明らかになります。

### 43話「リリスちゃんはリリスちゃんでしょう?」

リリス side

さてみなさんおはようございます。

今私達はビーチで遊ぶということで水着を選んでいきます。

「さうて、どんな水着にしようかしらね。」

「どうせなら可愛いのを着たいわね、これなんかどうかしら。」

「お姉ちゃん、この水着どうかな?」

「フラン!?それはちよつと生地が薄い気が……………」

皆が思い思いに水着を選んでいきます、私はというと体の胸から背中にかけて開いているビキニタイプなどの水着を着ることはできません。だってそれを着ると私の体の傷が……………」

私がそんな暗い思考をしていると……………」



「リリース？どうしたの？」

リーシャが気になったのか私に聞いてきました。

「あ、リーシャ……………実は。」

私は悩んでることについて話した。

「そっか……………たしかにそれだとビキニ系の水着は着れないよね……………」

「やっぱりここはテイオさんみたいなワンピースタイプの水着にしようかと思います。」

それが無難でしょう、それならこの身体の傷が見えることはまずないはずですし。

「そうだね、そうと決まったら早く合う水着を探そうか、いつまでもそのままだと風邪引いちゃうかもしれないし。」

そうですね、今の私の恰好はバスタオル一枚しか着ていません、いくら温かいとは言ってもずっとこのままでは本当に風邪をひいてし

まうかもしれませんね。

「というかよく見たら私以外みんなもう着替えてるんですね……………」

「あはは、うん。あとはリリースだけだね。」

うゝん、みなさんを待たせてしまうのも嫌ですし早く着替えましょうか。

「え〜と……………これなんかよさそうですね。」

私が選んだのはピンクを基調としたワンピース型の水着です、単純にテイオさんより少し布が多くその色違いと違ってくれればいいです。

「可愛いね、きつとリリースに似合うと思うよ。」

「ありがとうございます、リーシャ。」

そう言って私は着替えを始めます、ですがここで予想しなかった事態が起きました。

「ちょっとフラン！あまりはしゃぐとあぶないわよ！」

「大丈夫だよ姉ちゃんそんな……わわ、リリースさん！」

「え？」

フランが少しはしゃいでいたのでしょうか、フランの走ってる方向に私がいることに気づかなかったようです、そのまま二人の距離は縮み……

ーードンーーー

「きゃー！」

私たちはぶつかり私はリーシャに支えられ、フランはノエルさんに支えられています、他のみんなも何事かとこっちに集まってきました。

「いたた……大丈夫でしたか？フラン。」

「はい、こちらこそすみませんでした。リ……リス……さん。」

あれ？なんか後半の反応が悪いですね、どうしたのでしょうか。というよりフラン以外の人も固まっていますね。

「リリスちゃん…………その傷……………」

セシルさんが何か信じられないものでも見たかのように私に言う。

「え？」

傷？まさかと思って私は自身の体を見てみると私の体に巻かれています。たはずのタオルが床に落ちていました。もちろん私の体に刻まれた無数の切り傷が隠されているわけではなく…………

「い…………いや…………見ないでください!!…」

気づけば私は涙を流していました、それもそうです。こんな汚れたものを見たら絶対に気持ち悪いと思われてしまう、姉さんが駆け寄ってくるのがわかったが私はもうこの場にいたくないという気持ちだけが渦巻いていた。

「す…………すみません！こんな気持ち悪いものを見せてしまって…………

…あの……私、部屋に戻ります!!」

そう言って私は扉へと駆けだしますが、混乱していて足元に散らかっている水着に足を取られてしまいつまずいてしまいました。

そのまま倒れるかと思ったのですが……

ーギョッー

「え？」

私は誰かに抱きとめられました、この安心するような匂いは……

「大丈夫？リリスちゃん。」

「セシルさん……？」

このままこの身を預けてもいい気がしましたが私はすぐ先ほどのことを思い出し抜け出そうとします。

「離して!! 離してくださいセシルさん!!」

私はセシルさんの腕の中で暴れますが抜け出すことができません、  
てかセシルさん力強いですね…………

「大丈夫、大丈夫だから、ね？リリスちゃん。」

「……………あ……………」

セシルさんに頭を撫でられると不思議なくらいに自分の心が落ち着  
いたのがわかります。

「たしかにその傷を見たとき……………すごく驚いたわ。」

「っ！！」

やっぱりこんな傷は気持ち悪いんです、いい気分なんてするはずあ  
りません！！

「でもね、そんなことで私の……………いえ、私たちのリリスちゃんを  
見る目が変わるとでも思ったの？」

「え？」

私はセシルさんが何を言ってるのかわからなかった。

「だってどんな傷を持っていたても、どんな私たちの知らない過去を持っていたとしても……………リリースちゃんはリリースちゃんでしょう？」

セシルさん……………

「そうね、私も確かに驚いたわ。でもね、それでもリリースちゃん私の大切なお友達よ？もちろん私だけではないでしょうけどね。」

エリイさん……………

「そうですよリリースさん、私にとってもリリースさんは大切なお友達です。そんな傷が何ですか、それくらいのことです私のリリースさんに対する気持ちは変わりません！」

ノエルさん……………

「はい、私はリリースさんがとても優しい方だと知っています。その傷の事も私たちに心配させたくないという気持ちで黙っていたので

はないですか？だとすれば不謹慎ですがこの偶然に私は感謝します、より一層……リリスさんに対する気持ちが強くなった気がしますから。」

ティオさん……

「リリス姉？たとえどんな過去を持っていて、どんな生き方をしてきていたとしても……リリス姉はオレにとって大切な家族の一人なんだ、それだけは覚えていてよ。」

シュリ……

「えっと……リリスさん、すみませんでした。私がぶつからなければこんなことには……でも！でもセシルさんも言っていましたけどリリスさんはリリスさんです、私がリリスさんの事を好きだという気持ちは変わりません！」

フラン……

「えっと……みなさん、気持ち悪いとは言わないんですか？正直こんな傷を見て黙っていられるとは思いません。」

たしかに自分で言うのもなんですがこの傷は本当に気持ち悪いです、



何度も何度も同じ部分を切り付けたものもあれば何重にもクロスさせたような傷もあります。

「そんなことない」とみんなが私に言ってくれた、とても私の安心する表情で……………あ、そうか。

「私は忘れていましたね、みなさんは私の大切な友だということを。」

本当にそうです、どうやらこのクロスベルでの出会いは私に大きな変化をもたらすものなのでしょうね。

「ふふ、いい友達を持ったじゃないリリース。まあ何人かは告白染みたものを感じただけだね。」

姉さんがそういった瞬間多くの人が顔を赤くしました、告白って……………姉さん。

「リリース？私も……………私もリリースのこと大好きだから。」

「リーシャ……………」

あれ？なんでしようこの空気………なんかこのまま進んじゃうと大変なことになってしまつと私の勘が言っています。

「ふふ、お楽しみなのはいいけどそろそろ着替えましようねリリス。」

「「あつ！／＼／」」

私とリーシャはお互いに顔を赤くして離れます。

「これが普段一緒にいる者の強さですか……………」

「リーシャさんか、スタイルもいいし顔も綺麗だし……………」

「うゝ、やっぱりリーシャさんは強敵ですね……………」

「あらあら、これは私も参戦しようかしらね……………」

みなさん何の話ですか？まあ気にしても仕方ないですね……………」

こうして私は傷のことがみなさんに知られてしまいどうなるかと思

いましたがみなさん私の事を受け入れてくれました。ただ……傷のことが知られたただけであって私自身全てを話したわけではありません、その全てを皆さんに話す日も近いと思います。

皆さんは受け入れてくれますか？ ティオさんは私の事を優しい人だと言ってくれましたがそれがたとえ……作られた人格であつたとしても……

リリース side end

#### 44話「青い空、白い雲……え？」

リリス    s i d e

「うんしょっと、どうでしょうか？」

私はピンク色のワンピース型の水着を着てその場でクルッと一回転。

「似合ってるわりリスちゃん、すごく可愛いわよ。」

「本当ですね、とてもお似合いですリリスさん。」

「さすがは私の妹ね！」

「いや、それは関係ないよな……」

皆が私の水着姿を見てそんなことを言ってくれます。

「ありがとうございますみなさん、傷も出てないですね。」

私はそれが気になっていたので聞いてみます。

「ええ、大丈夫よ。」

それを聞いて安心しました、おそらくですがロイドさんは勘がいいので何かしら気づいてしまうかもしれません、そうなった場合 闇の創生 について触れてしまうかもしれませんから。

「それでは先に私たちは行きますね。」

「ええ、わかったわ。 私たちもすぐ行くから。」

フランを含めた支援課のみなさんが先に行きます、 なにか準備をしに行ったのだと思いますけど男子の方たちがすでにしていそうですがね。

「それじゃあ私たちも行きましょうか。」

「はい、姉さん。」

――少女移動中――

「　　」

「どうしたのリリース、すごく機嫌よさそうだけど。」

あ、気づきましたか。それもそうです、この傷を受け入れてくれたんです、今日は私にとって忘れられない日になりそうですよ。

「はい、私のことをみなさんが受け入れてくれたことが嬉しかったです。」

「リリース……………」

リーシャも私につられて笑顔になりました、そういえばリーシャはいつも私の変化に気づきますよね、まあそれは私もなんですけど……心が通っているとしてもいいのでしょうか……………

「お！みんないたわね、やつほ！みんな！」

姉さんがロイドさんたちに気づいたのか手を振りながら歩いていきます。さてさて、一体何が起こるのでしょうかね、私の心中は久々に遊べるワクワク感と何かが起きるのではないかというドキドキ感でいっぱいだった。

リリース    s i d e    e n d

ランディ    s i d e

よう！みんなのお兄さん、ランディ・オルランドだ。  
俺はロイドとワジの３人でパラソルを用意し女子の到着を待っていた、しばらくしてお嬢たちが来たんだが……

もうね、たまんないな。いつもは仕事着でその肌を見ることはできないんだが水着によつて解放されたお嬢たちの姿と言ったらもう……生きててよかったと言つてもいいもんだったぜ。現にロイドなんか固まつてるからな。

「ほっほう！いいじゃんいいじゃん！」

「へえ、みんな似合つてるねえ。」

ワジの野郎、クールに褒めやがつて。ああこいつホスト的な仕事をしてるって競売会の時言つてやがったな。この手のことには慣れてるってか？くうゝ羨ましいぜまったく。

「そ、そうかしら。」

「あまり自身はありませんが。」

「えへへ、ロイドさん。誰の水着姿が一番似合ってますか？」

「ええっ!？」

おうおうフランちゃんよ、そんなことロイドに言ったところでお決まりの口説きが始まるだけだぜ？ワジなんかも飽きないな〜みたいな顔で笑ってやがるしよ。

「もうフラン！あまりロイドさんを困らせないの!!」

「ふふ、どうしたんだい？さっきからボーっとしてるけど。」

ワジがロイドがボーっとしてることに気づいたのか聞く、いやいやロイド！お前まだ小さい頃にセルさんという俺の直球ストライクなお姉さんと一緒にお風呂とか入ってたんだろ！ならこんな光景くらいで……まあこいつも年ごろだからな、まあ俺も一応聞くか。

「ハッハッハ、さすがに刺激が強かったか??」



するとロイドはすこし考え込み、

「ハハ、まあ目の毒にはなるかな。でもみんなすごく似合ってるよ、  
グラビア雑誌に出てもおかしくないくらいだ。」

まあお約束だなこいつは！この弟貴族が！！

「えへへ、ありがとう。」

「ロ、ロイド……／＼／」

「え、えっ……？／＼／」

「くっ、さすがはロイドさん……」

「……やはりタチが悪いです。」

あゝあ、お嬢たちが顔を赤くしているよ。でもそんな態度をとって  
もこいつのことだから……

「あれ……？俺なんか間違ってたかな？」

「（こいつ……いつかゼツテー身を滅ぼすな。）」

俺はワジに耳打ちする。

「（まあそれも男の本懐じゃない？）」

まあそういうものなのかね。とそんなことを考えていると向こうから声がかかった。

「やつほ～！みんな～！」

やっとイリアさんたちの登場か、そして俺たちがそちらを見ると…

……

「ふふ、お待たせ。」

「お、もう可愛い子たちに囲まれてるじゃないの。」

「あ、パラソルとか用意してくださったんですね。」

「……言ってくれりゃあオレがやったのに。」

「ふふ、でも気が利きますね。ありがとうございます。」

天使たちが御光臨なされました。

「……………」

「……………」

あれ？俺も固まってる？ロイドと同じでマヌケにも口を開きっぱなしで彼女たちから目が離せない。

「ほえ……………」

「な、何というか……………」

「さっきも更衣室で見ましたが圧倒されるというか……………」

「オーラが違う……そんな感じですね。」

「す、すごいですっ。」

お嬢たちも圧倒されてるみたいだな、てかやべえよ。いまだに話せねえよ。

「あら、あなたたちだってなかなかイケてるじゃない。うんうん、眼福眼福」

「ふふ、そうね。エリィちゃんも思った通りすごくグラマーだし。キーアちゃんもティオちゃんも思いつきり抱きしめたいくらいだね。」

「あ、あはは……（セシルさんの胸で言われても……）」

「えへへ、ほんと〜?」

「ふふ、でもほんとに綺麗なビーチですね。」

「ま、まあ悪くないかな。」

「そうですね、おや……………ロイドさんにランディさん。いい加減戻ってきてください。」

「ハッ……………！俺は一体何を。」

「あぶねえあぶねえ……………一瞬アッチの世界に行つてたぜ……………」

ほんとだぜ、リリスちゃん言葉がなかったら俺とロイドはもうすこしアッチの世界だったろうな。

「男つて単純ですね。」

ティオ助、それは僻みつてやつか？まあティオ助はまだ子供だからな。しょうがないさ。

「ランディさん、今何か失礼な事考えていませんでしたか？」

「い、いや別に、なにも。」

あぶねえ、なんたつてティオ助はこんなに鋭いんだ、現にまだ睨ん

で来てやがるし…………

「まあ女性に比べたらシンプルな生き物だね。」

そうだよな、まあ複雑なのではないことだけは言えるな。

「いや、それにしてもリリースちゃんってけっこう着やせするタイプなんだな。」

俺は思ったことを言ってみる、普段のリリースちゃんってあまり体のラインが出る服じゃないからな。

「え？あまり見ないください／／／その……………恥ずかしいですか／／／」

いや、照れてる姿も可愛いぜリリースちゃん。

「いや、でも自信を持っていいと思うよ。本当に似合ってるから。」

「ロイドさんまで…………／／／」

お？これはロイドの毒牙にリリスちゃんまでもがかかってしまうのか？いや、それはなさそうだな。リリスちゃんはロイドさえも凌ぐほどの鈍感だからな。

「ふふ、まったくランディさんだけでは飽き足らずロイドさんまでも……」

あれ？なんかリーシャちゃんから黒いオーラが見えるんだが……  
…いや！リーシャちゃんだけじゃねえ！ティオ助とフランちゃんからも似た感じのオーラが見えるぞ！！

「ねえ、ロイドさん、ランディさん。」

「「は、はい！！」」

やべえよ、なんだよこの怖さ………なんかリリスちゃんとイリアさんたちまで震えているぞ………

「スイカ割りでもしましょうか、どうです？ティオさん。」

「いいですね、さっそくスイカを調達してきましょう。」

どうやらスイカ割りをする事になった、でもなぜかリーシャちゃん  
とティオ助が含みのある笑いをしてるんだがなんなんだ!?

「なあランディ、俺たちは何かしてしまったのか……………」

「…………ふん!」

ーードカッー

「いて!」

まあ俺も原因ではあるんだがよ、ロイドはいい加減その性格直せ  
よな、お嬢に背中をいつか刺されるぞ?

「ふふ、大変だね。まあがんばってよ。」

「何を言ってるんです? ワジさんも参加ですよ強制参加です。」

「…………これもさだめか……………」

ティオ助のなんか迫力ある笑顔にワジも屈した。ワジ……………なんか



すまねえ。

俺は初めて心の底からワジに謝った。

ランディ      s i d e      e n d

――とある場所にて――

「うん？今なんかワジの野郎によくないことが起きた気がするぜ、  
ふん！ざまあねえな！！」

ワジに関することならここまで敏感なのか……と言いたくなるヴ  
アルドさんでした。

#### 44話「青い空、白い雲……え？」（後書き）

ランディの心情を書くのがなぜかすごく楽しかったです。

さてさて補足ですがロイドが零の時点で絆イベントを起こしたのはエリイという設定です。

リリースとのフラグがバッキバキに立っているのはリーシャとレン、リリースとフラン、そしてティオです。マリアベルとアリアンロードはどのようにリリースと関わらせるのが未だに構想ができていないのでまだわかりません。

なのでロイドにはエリイとノエルのルートかなあ。

問題はコンビクラフトが強化されるあの絆イベントなのですが……  
…フランはやるとしても簡単なもので終わらせるとして。

レンとリリースはどの場面で絡ませるか……

てかレンとのことは絶対に書きたいです。

作者は軌跡シリーズでは一番レンが好きなので……

それでは次回をお楽しみに！！

45話「それはスイカ割りじゃない！頭割りだ！！」

ロイド side

「なあランディ、ワジ……………」

「ああ？どうした？ロイド。」

「うん？どうしたんだい？」

俺の声掛けにランディは気だるそうに、ワジはいつもの音色に聞こえるが顔は微妙に疲れている。

「なんで俺たちは……………スイカを挟んで埋められているんだ？」

そうなんだ、リーシャとティオがスイカ割りをしようと言い出したのはよかったそこまでは。

そして俺たち3人なんだけど、リーシャが横に来たと思ったら頭の後ろに軽い衝撃が来て気づいたら埋められていたんだ。

「そりゃーお前、あれだろ？」

「あれ？」

ランディは何が原因か分かってるのか、ワジも頷いているしわかってないのは俺だけか。

「嫉妬。」

「え？嫉妬？」

嫉妬って……

「まあお前に説明してもたぶんわからないだろう、少なくとも今の問題は……」

そう言ってランディは目の前に視線を向ける。

「この死地をいかにして潜り抜けるかだ。」

そう、目の前にはティオがいる、目隠しをしながら木刀を持った状態で。

「でもこの光景って漫画だけの世界かと思ってたよ、まさか現実で僕たちがそんなことになるなんてね。」

そうだよな、昔によく見た漫画かテレビの罰ゲームだよなこれって……まさかワジの言うとおり現実で味わうことになるとは思わなかったよ。

「だが相手がティオ助ってのは助かったな、仮に俺たちの誰かに直撃してもティオ助は力が弱い。死ぬなんてことはないだろうさ。ただ……」

「ただ……？」

「死ぬほど痛いのは間違いないだろうな……」

「……………」

だよな、どんなに力のない人でもそれなりに力が入る。それをもろに頭に振り下ろさせるのだから間違いなく痛いだろう……

「それに……………」

「どうしたんだワジ？」

次はワジが口を開く。

「あの子は感応能力が高いよね、現に僕たちも彼女の能力に幾度となく助けられてきた。そんな彼女のことだから少しの物音でも僕たちの居場所は把握されてしまう、それがたとえ目隠しの状態でも。」

「そっか、くそ！ここにきてテイオの力が俺たちの敵になったのか……あれ？俺たちの居場所が把握されてしまう？それって別にいい事じゃないのか？これってスイカ割りなんだし少なくともそれで俺たちが犠牲になるなんてことはないはずだよな？」

「でもさ、それって別に好都合だろ？俺たちの居場所がテイオにわかるのなら少なくとも俺たちに振り下ろすなんてことはないだろう、間違いなくスイカを割ってくれるはずだ。」

俺がそういった瞬間二人はお前何言ってるの？みたいな顔で見えてきた、俺って間違ってるかな？

「はあ………ロイド。」

「あ、ああ。」

いきなりランディがティオのほうを向き真剣な顔で喋り出す。

「いいか、集中しろ。そしてティオ助の口を見る、何かを口ずさんでる。空気に溶け込むように……ただティオ助の声を聞き取ることにだけに集中しろ、そうすればこのゲームの真の意味を理解できるはずだ。」

「真の意味……わかった。」

俺はランディに言われた通りティオの声を聴くことだけに集中する、

「……いは……ドヤ……ラ……ん……さん。」

あ、聞こえてきたぞ。今の俺はどんなに遠くの音でも聞き取れる気がする。よし！今度こそティオの声が俺には鮮明に聞こえた。

「狙いはロイドさんランディさんワジさん。」

……え？

「狙いはロイドさんランディさんワジさん狙いはロイドさんランディさんワジさん狙いはロイドさんランディさんワジさん。」

「どういうことだ？狙いが俺たち？スイカじゃないのか？……………まさかっ！？」

「ついにお前にも理解できたようだな、これはスイカ割りなんて生易しいゲームじゃねえ。俺たちの命を懸けた……………スイカ割りならぬ頭割りゲームだ。」

「な……………なんだって……………」

「くっ！最初のティオとリーシャのあの笑みはこれを意味していたのか！」

「く！どうするんだランディ。」

「俺もいろいろ考えたがよ、俺たちは砂に埋められているが意外と深い。手足は動かせない、できるとすれば話すこととこつやって少し首を動かすことくらいだ。」



「絶体絶命ってやつだね……………」

俺たちにできることはなにもないのか、こうして考えているときでもティオは徐々に近づいてきて。

「できることとすれば少しでも気配を殺し、ティオ助が外すのを誘発するくらいだ。」

そう言いランディは目と閉じ話すのを止めた、ワジも同様にしている。

「3人ともどこでしょうか？先ほどまで気配を感じていたのですが今は感じ取れません……………おかしいですね。」

どうやら俺たちは見事に気配を消すことに成功したらしい、ティオも立ち止まり俺たちの居場所を必死に探しているのだろう。

「（この距離だと最も近いのは……………）」

「（リーダーだね。）」

二人は若干片目を薄く開きながらそう思っている、ロイドも頭から

吹き出す汗が止まらない。これはおそらくただ暑いから、なんていう理由だけではないだろう。

「（まずい、嫌な汗が止まらないな。）」

ロイドも思考を巡らせている、しかしここで予期せぬ事態が起きた。

「……………」

ロイドは少し声を上げてしまっ、流れてきた汗が目に入ってしまったのだ。それで少しではあるが反応してしまった、ロイドは内心やつてしまったと半ばあきらめた。

「！……………そこです！」

もちろん気配を探していたティオがその反応を見逃すことはなく…

……

——ズシャン！——

無残にも木刀は俺に向かって振り下ろされた、地面にぶつかった衝撃で砂煙が巻き起こる。

「ロイド!!」「リーダー!!」

二人の声が聞こえる、だが不思議と痛みはない………ということは。

砂煙が治まり俺も目を開くことができた。

「……………!？」

俺の髪の毛を掠めるくらいの距離に木刀が振り下ろされていた……………

「ちっ……………外しましたね。」

「今舌打ちしたよなティオ!ていうか思ったより力が強いんだがどういうことだ。」

そう明らかに小型ではあるがクレーターのようなものできている、現に俺の顔にも砂がかなりかかっている。

「当たり前です、私の狙いはスイカではなく3人なんですから。」

「……………」

顔色を変えず平然にいましたよティオさん……………」

「嫉妬はここまで人を変えるんだな……………」覚えとくぜ。」

「そうだね、僕も少し改めようかな……………」

どうやら二人は今までのことを少し反省しているらしい、ワジなんかは競売会の時なんかいろいろと引つ掻き回してたからな。

「でもこれで終わりだな、助かった。」

そうだこれでスイカ割り……………」ランディ曰く頭割りゲームというなのDEATHゲームは終わりだ……………」のはずだった。

「何言ってるんですか？まだリーシャさんが残ってますよ？」

「……………」

もういいや……

ロイド    s i d e    e n d

リリース    s i d e

あれからスイカ割りも終わり私たちはみんなでスイカを食べています。

「それにしても災難でしたね3人とも。」

「ああ、あんな思いは二度とごめんだな。」

「そうだな、あれ以上の恐怖を俺は知らねえぞ。」

「うん、僕もがらになく顔に出るほどだったからね。」

3人が先ほどのことを思い出したのか震えています、ティオさんの後はリーシャがやったのですが遠くから見てる私から見ても怖かったとだけ言っておきましょう。なんかツンツン頭の少年に体から電気をビリビリ出しながらゆっくり近づいていく少女を見たような光景を見ましたね……

「でもリーシャはちゃんとスイカを割ってくれたのでよかったです、もしあの勢いで振り下ろされてたら……………」

そうなんです、最初リーシャはランディさんの方向へ迷わず進んでいたのですが私が「スイカおいしそう、みんなと食べたいです。」とけっこう小声で言ったのですが、その言葉が聞こえたのかリーシャはすぐさまスイカへと向き直りスイカへと振り下ろしました、なんか振り下ろした瞬間風が切れるような音が聞こえたのは気のせいですよ。

「まあその点はリリスちゃんに感謝しないと、俺たちの命の恩人だ。」

「ふふ、大げさですね。」

「まあそれほどの窮地だったからな……………あ、リリス。」

「何ですか？ロイドさん。」

「その上着来て熱くないか？水につかったわけでもないし……………」

「あ…………すみません、ただあまり人に肌を見せたくないというか……………」

私の声が弱くなっていくのがわかります、その声質にロイドさんも気づいたのか。

「そっか、まあでも楽しむことをおススメするよ。俺たちも「ロイド」！」「セシル姉？」

ロイドさんと話してる途中で向こうからセシルさんの声が聞こえてきました。

「悪いリリス、セシル姉に呼ばれたから行ってくる。」

「はい、どうぞ、それとがんばってくださいね。」

「？ああ。」

ロイドさんはなにを頑張るのかわからなかったみたいだ、椅子に座って背中をこちらに向けてるのだから間違いないくオイルを塗ってほしいとかそんなところでしょう。

「さて私は……………」

向こうにティオさんとフランが見えたのでそちらに向かうことにしました。

「それじゃあランディさん、ワジさん、私も行きますね。」

「ああしつかり楽しんで来いよりリスちゃん。」

「ふふ、いつてらっしゃい。」

ティオさんとフランはお城でも作ってるのでしょうか……………まあ楽しそうですし私も手伝ってみましょうかね。

リス side end

ワジ side

肌を見せたくない……………か。

「ねえランディ。」



「ああ、リリスちゃん何か隠してるよな。」

どうやら彼も気づいていたみたいだね。

「気づいていたんだね。」

「ああ、たぶんだが……ロイドも何かしら勘付いてると思う。」

「そうか。」

やっぱりリーダーも気づいてたんだね、さっきリリスちゃんが話してるとき一瞬だけかなり動揺していた、勘の鋭いロイドなら気づいてもおかしくないかな。

「まあ俺たちが何かしようとしてもおせっかいになっちゃまうかもしれないが……いつかは話してほしいよな。」

そうだね、彼女が 迅雷 ということは掴んでいたけど……

「（闇の創生）」

僕たちの中でもこの名前の計画は知られている、尤もどんな内容なのかはわからないけどね。そして……

（リナ・ハート……）

闇の創生 計画の行われていたガレリア要塞の向こうにあった教団のロッジにいたとされる一人の少女の名、そして僕は一度だけ彼女に会ったことがあった。あの時は顔は確かに可愛いと思ったけど口が悪く隣にいた執事みたいな人には顎で命令してたっけ、まあ服装からしてかなりの金持ちの家の子だろうけど……だからだろうか、顔だけを見ればあの時の少女とリリスはあまりに似ている。でも性格からしてまったくの別人だと言える。だけど……

「（どう見てもリリスとリナ・ハートの顔は同一人物だ。）」

これがわからない、彼女に双子がいたという記録はないし……

「そもそもリリスという名は本物なのか……」

彼女が偽名を使ってるとは思えにくい……嘘を言ってる感じでもないしね。

「うん？なんか言ったかワジ？」

「いや、なんでもないよ。」

いけないな、どうやら言葉に出してみたいだ。

「そっか、イリアさんたちがビーチバレーしてるんだがよ、俺たちも行かねえか？」

「そうだね、いいよ。」

教団での実験で少なからず人格が変わったりするのはおかしいことではないと聞いた、でもあそこまでまったく別の存在みたいな感じになるものかな？まるで………何かをその身に埋め込まれたみたい………

「まあ今はまだ情報が少ないしリースのほうもそちらのことを調べてるみたいだからね。」

僕のほうは今支援課のメンバーとして彼らの力になっていくしかないか、そうすれば自ずとすべてが明らかになるような気がする。

フ  
ジ

s  
i  
d  
e

e  
n  
d

45話「それはスイカ割りじゃない！頭割りだ！！」（後書き）

また一つ伏線が……まあ後々すべてが明らかになりますのでお楽しみに！

#### 46話「砂のお城、テーマパーク」

リリス     s i d e

皆さんこんにちわ、今私はティオさんとフランが何をしているのが気になって二人の元へと向かっています。まあロイドさんの質問の後であの場に居づらくなったというのが正しくもありますけど……

「ティオさん、フラン、何をしているんですか？」

「あ、リリスさん。」

「あ！リリスさん！実はティオさんと砂のお城を作ってるんですよ。」

「いわゆるサンドクラフトというやつですね。ただ、なかなか上手くいかなくて……何度も作っては壊しの繰り返しです。」

なるほど、砂のお城ですか……たしかに実際にやるのは難しそうですね。

「ふむ、難しそうですね。」

「そうだ、リリスさんも作るのを手伝ってくれませんか？」

「私ですか……………」

うん、私もあまりこつというのは得意ではないと思うのですが…………

「そうですね、作業が進展するかもしれませんし……………何より。」

「何より？」

「えっと……………リリスさんと一緒に作りたいです……………／／／」

「……………」

上目使いのティオさん……………すごく可愛いんですが！何か今にでも抱きしめたいくらいです。

「むむっ、リリスさん！私もリリスさんと一緒にお城を作りたいです！……」

フランはティオさんに負けない？ように手を思いつきり挙げながら私に言います、フランもフランで別の可愛さがありますよね。まあ私も断る理由なんてないですし。

「いいですよ、二人がよければぜひ私も混ぜてください。」

「「はい！！」」

こうして私たちは3人で砂のお城を作ることになりました。

――少女製作中――

「ふう、だいぶ出来上がってきましたね。」

「そうですね、3人でやるとさすがに早いですね。」

「ふふ、でもティオさんもフランも手先起用ですね、私は何回も崩してしまっただのに。」

二人はほんとに上手でした、私なんてあまり力加減がわからなく何度も崩してしまいました。



「えへへ、リリスさんの意外な弱点発見ですね」

「もう、フラン。」

まったく悪戯っ子みたいな顔して……そこで私はティオさんのほうから視線を感じました。

「……………」

「どうしたんですか？ティオさん。」

「いえ、フランさんのことはどうして呼び捨てで呼んでるのかなど。」

ああそのことですか。

「前にフランのことはフランさんと呼んでたんですけど、なんか堅苦しいという事で呼び捨てで呼ぶことにしたんです。」

そうですね、あの時はさんづけで呼んだ時のフランったら捲し立て

るように呼び捨てをお願いします！！って言ってきましたものね。

「なるほど……………でしたらリリースさん。私の事も呼び捨てで呼んでくださいませんか？」

「え？よろしいのですか？」

「はい、私はリリースさんとは3つも年下ですし……………それに私自身リリースさんに呼び捨てで呼ばれたというか／＼／」

ぐはっ、またティオさんの上目使い……………これは効果抜群です、普段クール少女がデレるとここまでのダメージなんて……………

「ダメですか……………」

……………なんとか鼻から出そうな忠誠心を抑えました、がんばりましたよ私。

「そんなことないですよ、ティオ。」

「あ……………／＼／」

「なんか顔が赤いですけど、大丈夫ですか？ティオ。」

「だ、大丈夫です！／＼／」

うーん、日射病とかなら大変なんですが本人が大丈夫というなら大丈夫なんでしょうか。

この後、私たちはお城を何とか作り上げることができました、そこでお城の名前をバンバンキャッスルかみっしキャッスルにするかで一悶着ありました、どちらの名前がいいですか？と私が巻き込まれたのは言う必要もないですね。

その後は姉さんたちとビーチバレーをしたりキーアやシュリとホワイトストーンという石を探したりなどして過ごしました。てか姉さんのあんなにジャンプできてアタックできるならワールドバレー出れば大活躍ですよ……

あああとロイドさんとエリイさんが顔を赤くして気まずそうにしました、オイルを塗ってもらうのでなにかあったのでしょうか……  
…逆にリーシャとセルさんは笑ってますし。そういえばマリABELさんってエリイさんのことが大好きでしたよね、ロイドさんが海底に沈められたりしなければいいのですが……

ちなみに今のマリABELの中ではエリイ<<リリースです・w・

その後、ロイドさんが冷たい飲み物を持ってきてくれてホテルが用意してくれたランチボックスを楽しんだりして過ごしました。

「そういえばお昼はテーマパークでしたよね。なんだかワクワクします!！」

「あはは、リリスはどこを回るとか決めてるの?」

「そうですね、なんでも東方系の有名な占い師がいるみたいなんです。そこをまず訪ねたいですね。」

おそらく私の予想通りだったらあの人でしょうけど……まあまだわかりません。

「なるほど（東方系の占い師か……）」

リーシャも何か気になるようですね……

「リーシャも気になるのでしたら一緒に行ってみませんか? 占いの館。」

「うん、リリースがいいのなら。」

いいに決まっていますよ、それじゃあそろそろ時間ですし。

「ではそろそろ行きましょう、もうすでにみんないるかもしれないですし。」

「そうだね、いこう。」

――少女移動中――

テーマパークの入り口に着いた私たちはまだみなさん集まっていなかったのですこし待ち、その後中へ入りました。

門を潜って私たちの目の前に現れた光景は……一言で言うなら輝いているでしょうかね、みなさん驚いているようです。

「うわあああっ!」

「ここがミシユラムワンダーランド。」

「……………（じいん）」

「……………すげーな……………」

「へえ、あたしも初めてだけどなかなか楽しめそうじゃない。아트  
ラクションも結構あるんでしょ?」

「ま、正直1日じゃ回りきれないほどあるッスね。」

「今日はビーチで昼過ぎまで過ごしちゃったし……………今からだと代表的なものから回った方がよさそうだね。」

「うーん、全部回れないんですね……………ちょっとショックです。」

「代表的なものというとなんがあるのかしら?」

「うーん、やっぱり左に見える観覧車は外せませんね。ファミリー、  
カップルと二種類あります。」

「眺めはとにかく最高ですよ。最後の締めに乗ってもいいかもしれ  
ませんね。」

なるほど観覧車ですか、これも候補ですね。

「ふむふむ、なるほど。」

「ふふっ……ワクワクしてきますね。」

「あとは真ん中の鏡の城かしら、このテーマパークのモニュメント的な場所だそうです。願いを叶える鏡というのが最上階にあるらしく……鐘を鳴らして鏡の前に立つと願い事が叶うなんて言われますね。」

鐘ですか……星見の塔や月の僧院に置かれている物と同じ物なのでしょうか……

「あら、ロマンチックね。」

「ま、やっぱりカップルやファミリーが多いッスね。なにせその鐘を鳴らすハンドルが左右に二つあるらしいし。」

「たしかにそれは一人で鳴らすと切なさだな。」

「そうですね、私もいつか未来の旦那様と来ることがあるのでしゅうか。」

ーピキッー

あれ、今何かよからぬ音が聞こえたような……まあ私だって17  
ですし恋人のことを考えてもいいですね。

「あらあら………」

なんか姉さんが笑ってます……この微妙な空気の中で助けがありました。

「ねえねえ!」

ナイスですキア。

「あそこに見えるお屋敷って誰か住んでるの?」

「な、なんか不思議そうなお屋敷だな。」

「ありや俺も知らねえな……最近できたアトラクションか?」



「ええ、テーマパークでも一番新しい施設みたいです。ホラーコースターといってかなり本格的らしいですよ。」

「その情報でしたら私も調べていました。どうやら最新技術を駆使した怖ろしくもエキサイティングなアトラクションのようですね。」

「そ………そんなものが新しくできたんだ。ベルつたら一言も教えてくれなかったわね。」

ホラーコースターですか………実を言えば私は怖いものが苦手です、あれはパスですね！

「うんうん、いいわね！テンションあがってきたわ、他に定番はないのかしら？」

「アトラクションじゃないけど占いの館というのも定番だね。何でも去年入った占い師がかなりの凄腕だっという噂だよ？」

「相性占いから失せ物探しまでなんでもござれって話ですよー。エキゾチックで美人の占い師さんらしいです。」

「（リリース、これが例の？）」

「（うん、おそろくね。）」

「……それをいうならみっしいの追っかけも見逃せないです。」

ふふ、ティオは本当にみっしいが好きなのですね。

この後私たちはみんな解散して各々でアトラクションを回ることになりました。

「それじゃありーシャ、行きましょうか。」

「うん、行こう。」

こうして私とリーシャは占いの館へ行くことになりました。  
本当に私の思った通りなら結社のこともリーシャに知られることになりそうですね。

リリース side end

#### 47話「占いの館」

リリス    s i d e

さあやってきました占いの館です、前話を読んだ方ならわかると思いますが一緒にいるのはリーシャです。

「いらつしゃいませ、こちら占いの館になります。お二人でよろしいですね？」

「はい、お願いします。」

「それじゃあチケットをもらいますねっ、ではお楽しみください。」

「行きましょうリーシャ。」

「うん。」

こうして私たちは館へと足を踏み入れました。

「おや、どうやらあの人のようですね。」

「そうだね、一体どんな占いなんだろう。」

私たちの目の前に現れたのは緑色の長い髪を持ち、明らかにミステリアスな雰囲気を漂わす女の人でした。

「ふふ、いらつしゃい。さあこちらの椅子にお座りなさい。」

どう見てもルシオラさんですね、まああとでいいですかね。

「はい。」

こうして私たちは椅子に座ります。

「（この人の腕前は知っていますが……）」

「（顔を隠してはいるけど美人ってのはわかるね。）」

「どうしたのかしら？人の顔をジロジロ見て。」

おや、どうやら気に障ったみたいです（笑）

「すみません、それではさっそくお願いします。」

「わかったわ、ではその前に……あなたたちの血液型を教えてくださいませんか？」

「血液型ですか？」

「ええ、正確に占うために必要なものの。」

なるほど、他の占いでも血液型を聞くのは見たことありますね。

「なるほどです、私はOです。」

「リリスもなんだ、私もOだよ。」

おや、奇遇ですね、今まで血液型なんて聞くことなんてありませんでしたから知りませんでしたよ。

「ふふ、どうも。それでは始めるわね。何を占うかしら？」

「そうですね……………リーシャは何か占いたいことありますか？」

「私？……………うん、リリースが言いなよ、興味あるから。」

興味って……………そうですね、それじゃあ。

「私の未来……………占えますか？」

「リリース……………？」

未来だなんて大げさですかね、でも気になるんです。

「……………わかったわ。」

占い師の人が目を瞑ったと思ったら水晶玉が光り出しました。

「（いれは……………）」

「（すごいね。）」

光が治まり占い師の人が私の目を見て話し出します。

「どうやらアルカンシエルのリニューアル公演がこの先行われるみたいね。」

「………はい。」

リニューアル公演……まさかそこで姉さんの身に何かが！？

「その公演で何かが起こるといふ暗示が出ているわ、そして………」

「そして………どうなんですか？」

リーシャが聞きます、リーシャの顔がいつになく真剣ですね。

「視えないの………」

「え？」

視えない？どういうことでしょうか。

「あなたの未来はそこから途絶えているの、あるのは真っ暗な空間、まるで……闇。」

途絶えている……まさか……そんな。

「途絶えているって……どういう……」

リーシャも意味はわかっているのでしょうね、でも認めたくないのかもしれない。

「でも、その未来を変えることはできるわ。」

「……どうするんですか？」

「あなたが今すぐこのクロスベルを離れること、これがこの未来を変えることになるわ。」

「私が……クロスベルを離れる？」



私が姉さんの傍を離れる？でもそんなこと………できるわけがない。

「リリース………？」

リーシャが私に不安そうに聞く。

「辛い判断になるとは思っわ、でもこれはあくまで占い。本当とは限らないのだけど。」

きつとこの人も私がどれだけクロスベルの地のことを思ってるのかわかってるのでしょうか。だからそういう気休めの言葉を私に言う。でも、たとえどんなことが起ころうと私の思いは決まってるんですよ。

「いえ、きつとその占いは現実のものになるのでしょうか。ですが………公演の場で何かが起こるということはもし私がいなくなった場合、その代わりがほかの人になってしまいかもしれない。」

私がそう言った瞬間………私の頭の中を映像が駆け巡る。

――イリアさん――イリアさん――いやああ――――

――リ……シャ……リ……リス……シュ……リ……

――姉さん！！しっかりしてください！！姉さん！――

――イリアさん……オレなんかを助けるために……

――そんなにまでなって人の心配なんてさすがはイリア・プラティエだね――

「うっ！！」

……  
なんですか今の映像は……映像が視えたと思ったら激しい頭痛が

「リリース！？どうしたの！？」

あ、どうやら心配をかけたみたいですね。安心させないと。

「大丈夫ですよーシャ、ちょっと頭痛がしただけですから。」

「そ、そう……」

でも今の頭痛は一体……まるで今の映像を見せないようにするた  
めのような……まさか今のは未来の映像？決められた未来？姉さ  
んが傷つき私とリーシャとシュリが泣いていた世界……

――う……う……参ったなあ、こんなに早く……死ぬことにな  
るなんて……

――リリース！もうやめて！こんなのリリースじゃないよ！――

――そうです！――こんなの……あの優しいリリースさんじゃありませ  
ん！――

――うるさい！！そいつは姉さんを傷つけた！！それは……絶  
対に許されないこと、私の一番大切な人を傷つけた！！だから私  
は……そいつを殺す！――

――もうやめるんだリリース！！その子はもう動けないだろ！！それ  
以上やるならただの人殺しだ！――

――黙れ！！邪魔するなら……お前から先に殺すから！！

――

「うあっ!？」

今度は鮮明に視えた、どうして……

「どうして……」

「リリース!？本当に大丈夫なの!？」

「どうして私は……リーシャ達と殺し合いをしているの……?」

「え……」

「どうして私は……」

何かを考えようとしたとき、また先ほどよりもひどい頭痛が私を襲い、私は意識を失う。

意識を失う瞬間リーシャとルシオラさんの声が聞こえた気がした。

リリース

side  
end

??「夢」

リリス side

真っ赤……………すべてが赤色だ。

この赤は何の色だろうか、一つしかない。

「私が殺したみんなの血……………」

そうだ、私がみんなを殺した。

経緯なんて思い出したくもない。

赤い星座によるアルカンシェル襲撃。この出来事で一人の死者が出た。

「……………姉さん……………」

そう、イリア・プラティエ。私の大切な姉さんだ。

私はミシラムでリーシャと占いの館へ入り、自身の未来を占ってもらった。

その公演で何かが起こり私の未来が途絶えると言われた、リーシャは私の事を想って姉さんに公演の延期を促した、だが明確な理由がないため姉さんはもちろん劇団の誰もが取り合わなかった。

私は姉さんの傍を離れたくなかった、なぜなら二度と姉さんに悲しい思いをさせなくなかったからだ。

でも私はルシオラさんの言うとおりクロスベルを離れた、私に何かあったとき姉さんや私に知り合った人達が悲しんでしまつかと思うたから……いや、これは嘘だ。本当は……

「私は自分が傷つくのが怖かっただけ。」

これが本当の理由だ、誰かが私は大切な者のためなら喜んで自身の身を犠牲にすると言っていた気がする。私はそんな強いやつではない、私は弱い、私は……弱いんだ……

それでも私は何かが起こると言われて素直に顔を出さなかったわけではなかった。たしかに一時期クロスベルを離れたけど、やっぱり私は姉さんのことが心配だった。でも……クロスベルのアルカンシエルに戻った私を待っていたのは、リーシャに抱きしめられ、血まみれになり変わり果てた最愛の姉の姿だった。

姉さんの体は冷たかった、流れた血も多く、とても病院まで持ちそうになかった。

こんな時の私の勘はよく当たるものだ、私が姉さんの元へ行き、しばらくして姉さんは息を引き取った。

私とリーシャは泣いた、同時にある人物を酷く憎んだ。

リーシャ・リー・オルランドー

リーシャも怒りを爆発させたと思う、でもそれはすぐに収まった。

私の憎しみと怒りがリーシャを上回り、自分でも信じられないくらい速さでシャリーリの胴体目がけて一閃を放った。

その衝撃で彼女の持っていた武器、テストロツサは砕けた。彼女が体勢を立て直そうとしたが私は刀で両腕を切断した。そして両足も同様にした、両腕両足を失い彼女は動くことはできなかった。でも私は止まらなかった、手にも持っていた刀で彼女の腹を突き刺し、抜いては刺すを何度繰り返しただろうか。まったく覚えていない。

そんな私を止める者がいた、リーシャと特務支援課だ。

どうやらIBCのビルが破壊された後に警察に連絡が来たそうだが、アルカンシエルから大量の死体が出てきたと。どうやら私はシャリーと戦っている最中に自分でも無意識に彼女の部下を全て殺していたようだ。



大切な友たちなのになぜ私は殺そうと思ったのだろうか、一人、また一人と倒れていく中、私の中に後悔という文字はなかった。

――姉さんのいない世界なんて必要ない――

――みんな死んでしまえばいい――

シャーリイは文字通り虫の息だ、もうどんなに治療しても助からないだろう。

でも最後の二人、リーシャとティオが立ちふさがった。

二人はずっと私に呼びかけていた、でも私の耳に二人の言葉が入ることなく……

「死ね……」

私は二人を殺した、でもその瞬間私の世界に色が戻った気がした。正気に戻ったとも言っのだろうか。私を支配していた物、それはとてつもない破壊衝動……いや、狂気か。

「大切な物は失ってから気づく……」

誰かが言っていた気がする、失ってから気づくなんてダメだろう。

「そうだね、失ってから気づくんじゃ遅すぎるよね。」

え？誰？。

「あなたは……………私？」

「さあね、今はまだわからなくてもいいかな……………そうだね、私のことはリナとでも呼んでくれるといいよ。」

「リナ……………」

「そう、よろしくね。リリス。」

私と同じ顔の少女が微笑みかけてくる、リナという名前に何かが引っかかる、それが何かは私にはわからない。それよりも聞きたいことがある。

「気づくのが遅いって……………あなたはそんな経験があるの？」

「うん、私は家族はずっといるものと思ってたんだよね。だから自分の我儘をずっと言ってた、家族だけでなくお手伝いさんたちにもね、たぶん嫌な思いをたくさんさせたと思う。」

彼女の顔色が暗くなってくる、どうやら相当過去を後悔しているように見える。

「でもそんな日々が続く中、私の家にある集団が来た。その人たちは私を求めていたんだ、ある儀式においてかなりの適合率がどうとかってね、お父さんとお母さん、お手伝いさんたちがみんなして私を守ろうとしていた。私にはわからなかったの、どうしてこの家にとってマイナスしかもたらしそくない私を守るのだろうって。そんな中みんな死ぬ間際私を抱きしめてある一言を言ったの。何かわかる？」

なんだろう、安心する一言かな。

「ふふ……………大好きなんだってさ、こんな私のことを。」

大好き……………

——私はリリスのこと好きよ？——

――私もリリースのこと大好きだから――

「あ……………」

「ふふ、ねえリリース。この状況も可能性の一つでしかないの。」

「可能性の……………一つ？」

「そう、あなたは迷っていたでしょう？自身が取るべき行動に。」

「……………はい。」

「誰かを大切に思うならたとえどんな状況になったとしても自分が正しいと思えることをすればいいと思うわ。」

「正しい事を？」

「そう、他人に言われて歩く道よりも自分で切り開いた道歩く方がいいでしょう？」

「自分の道を切り開く。」

「その過程で誰かが道を踏み外そうとするならあなたが連れ戻せばいい、リリースにはその力がある。」

「私に……できるのかな。」

「それはあなた次第ね、あ……そろそろ時間のようだね。」

彼女がそう言った瞬間曇り空が晴れるように私の世界に日差しが入り込む。そんな中声が聞こえてきた。

——リ……ス……リリ……ス……——

「この声は……リーシャ？」

「ふふ、早く起きてあげなさい。彼女、あなたが倒れてからずっと看病していたようだから。いえ、彼女だけではないよね。それじゃあねリリース。また会いましょう。」

話せる時間が終わったとしても言いたいように彼女の姿は消えていく。

「私が切り開く道………か。」

この夢は私に何かを示すためにあのリナって子が見せてくれたのかな。今は考えてもわからない。とりあえず今はどんな未来になっても自分ができる精一杯のことをしてみよう、それがもしかしたら………今私が見た最悪の未来を回避することにもなるかもしれないから。

リリス    s i d e    e n d

#### 48話「テイオの告白」

リリス side

「う、うん……」

「リリス!!」

「ふえ？」

私が目を覚ますといきなり抱きしめられました。

「ちょっとリーシャ？みなさんも……」

すこし目を潤ませながら私を抱きしめるリーシャと、その後ろに口ぐちによかったと言っているみなさんがいました。

「だって……いきなり倒れるんだもの、心配したんだからね。」

「そつよりリス、何があったの？」

リーシャと姉さんが聞いてきます、何か夢を見ていた気がするのですが……

「夢を……見ていた気がします。」

「夢？」

「はい、内容は思い出せないのですが……とても悲しくて、けれど……何か光を掴めたような……そんな感じです。」

断片的にしか思い出せないですがそんな感じですね。

「ふふ、あなたはそれでいいの、決して後悔だけはしないようにね——」

「あ……」

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません。私はどれくらい眠っていたんでしょ  
うか。」



女の子の声が聞こえた気がしますますが気のせいでしょうか。

「半刻ほどだけど、動けそうかしら？」

「はい、大丈夫です。みなさんにはご迷惑をおかけしました。」

せつかくのテーマパークだというのに私の為にみなさんは遊ぶのを止めて看病してくれてたんですね。

「いいのよりリスちゃん、こうして何事もなく目覚めてくれてよかったわ。」

「そうですね、リスさんが倒れたと聞いたときはすごく驚きましたから。」

「セシルさん、ティオ……………」

てか今気づいたんですが何気にセシルさんに膝枕されてたんですね、ティオなんかずっと手を握っていました。

「時間はあと僅かですか……遊べるアトラクションもあと一つくらいですかね。」

「そうですね、リリースさん。」

「何ですか？ ティオ。」

「私と……観覧車に乗ってはくれないでしょうか？ / / /」

ティオからのお誘いです、私に断る理由はありませんね。

「いいですよ、いきましようか。」

そう言って私はティオの手を握り歩き出します、他の人がいいなとか言っただけでしたがなんでしょう……体は大丈夫か？とみなさん聞いてきましたが私自身本当に大丈夫なので大丈夫だと言っておきました。

——観覧車——

「すごいですね、本当に小さくクロスベルが見えます。」

そうですね、だいたい何メートルくらいなのでしょう。おや、ロイドさんとエリイさんがホラーコースターに行くようですね。かなり小さいですが見えます。エリイさん怖いものは苦手じゃありませんでしたか？

「あの……リリスさん。」

ふとこちらに顔を向けてティオが私に話し出します。

「何ですか？ティオ。」

「リリスさんは……いえ……」

ティオが言いたいことがあるのになかなか聞き出せないのか言葉を詰まらせる。まああらかた予想はできます。

「ティオは……D・G教団の被害者ですね？」

すみません、こちらから切り出します。

「！？……なぜそれを……やっぱりリリスさんも？」

「はい、8年前。姉さんに保護される前……私は教団にいました。」

「そうだったんですか……でも、それでもよく私が教団の被害者だとわかりましたね。」

明確な理由はありませんが強いて言うなら……

「あなたが知り合いの女の子に似ていたんです、その子も教団の被害者でしたから。」

ティオはレンに似ている、性格や境遇はまったく違うかもしれないけど。年が同じというのも理由にあったのかもしれませんが。

「なるほど……ちょっと待ってください！！保護って……義理の妹とは聞きましたが元からいたわけではないのですか？」

やっぱりそこが気になりますか。

「はい、私は教団から逃げ出して、衰弱して倒れていたところを姉さんに助けられたんです。」

「それじゃあ……………リリースさんの親御さんは。」

「うん、死んじゃったんだと思う。」

「思う?。」

「はい、なぜなら私は……………教団に攫われた以前の記憶を持ってないんです。ただ一つ、自分の前の人格を除いては。」

「人格……………」

「私は教団の実験で以前の人格を殺された……………いえ、今の私の人格を上書きされたとも言うのでしょうか。」

以前の私の人格に星光の殲滅者の人格を上書きした。シユテル・ザ・デストラクター以前の私の性格等の記憶は残っていますが、家族と過ごした記憶は何一つ残ってはいません。

「……………」

「気持ち悪いですか？私が。」

「え？」

「本当の自分を持たない、他人の写し身であるこの私が。」

ああダメですね私は、言った瞬間不安になってしまいました。

「……………」

この沈黙がたまらなく怖い、ティオは一体何を考えているのだろうか……………この子は私の傍にいてくれるのかな、気持ち悪いと言って離れていくのだろうか。そうになったら私は……………

――失いたくない――

この繋がりを失いたくない、ティオのこともちろんだが私が関わってきたすべての人との繋がりを失いたくない。

ティオが私の目を見る、どうやら言うべき言葉が見つかったようです。

「私は……私はリリスさんが大好きです。」

「え………？」

い、いきなり何を………好きと言われて嬉しくないわけではないですが、この状況で私はどう返せばいいのでしょうか。

「すみません、私自身自分が何を言いたいのかわかっていません。でも………」

そう言ってティオは言葉を続ける。

「今まで私が見てきたリリスさんは他人の写し身なんかではありません、確かに私は昔のリリスさんのことは知りませんよ。私にとつて今この場にいるリリスさんが全てなんです。」

「今………この場の私。」

「はい、おそらくそう思っているのは私だけではないと思いますけど。」

今この場にいる私が全て、昔の私は関係ない……………

「ジオフロントで私のことを助けてくれたリリスさん、おいしいお菓子を作ってきてくれたリリスさん、優しい声と優しい笑顔で話をしてくれるリリスさん、そして……………お姉さんのように、本当の家族のように接してくれるリリスさん。」

――危ない！――

――今日はマフィンを作ってきました、ぜひ食べてください――

――ティオは大切な物つてありますか？私にはあります。それもたくさん――

――姉だと思って甘えてもいいのですよ、ティオ――

あ……………確かに昔の私では考えられない私がたくさんですね……………これが……………

「人格を植えつけられたとしても……………たとえ本当の自分を持たないとしても……………リリスさんはリリスさん、今この場にいるリリスさんが全てなんです、私の大好きなリリスさんです。」



「テリオ……………」

「だからずっと、これからも私たち……………私の傍にいてください。」

テリオの言葉が鮮明に私の脳に焼付く、私は……………

リリース side end

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6530x/>

---

碧の軌跡～つながる姉妹の絆～

2011年12月20日22時49分発行